

UFOと人間の宇宙的カルマ特集

UFO

GAP JAPAN NEWSLETTER



UFO・超能力・宇宙哲学

コンタクティー

contactee

UFO問題と世界の運命

SPRING
1989

アダムスキーの

宇宙的カルマと異星人の援助

デザートセンターで円盤着陸痕跡発見!

過去世透視法とその実例

〈連載第7回〉

UFO-宇宙からの完全な証拠

104



〈巻頭言〉人間のカルマ	1
UFO問題と世界の運命	久保田八郎 2
アダムスキーの宇宙的カルマと異星人の援助	アリス・ボマロイ 10
デザートセンターで円盤着陸痕跡発見!	安藤澄雄/久保田八郎 15
過去世透視法とその実例	遠藤昭則 22
科学—SCIENCE—	30
GAP短信	31
UFO-宇宙からの完全な証拠 (連載第7回)	ダニエル・ロス 32
GAP活動の原理	ダニエル・ロス 44
日本GAPへ入会しよう	45
〈投稿欄〉ユーコン広場	46
本誌/バックナンバー掲載記事目録	48
〈報告〉福岡支部大会 〈予告〉山形 仙台合同支部大会	49
〈広告〉アダムスキー全集/英文版ユーコン/編集後記	50
日本GAP全国月例研究会案内	51



◀金星人からジョージ・アダムスキーに伝えられた金星のシンボルマーク。2個の図形の内、左側は宇宙の父性原理(陽)、右側は母性原理(陰)を意味する。円は宇宙をあらわしている。

GAPについて

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コスミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題に関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

表紙写真

コニストン円盤 1954年2月15日、イギリス、ランカシャー州のコニストンで、当時13歳のステューヴン・ダービシャー少年が撮影したアダムスキー型円盤。イギリスの科学者レナード・クランプが正射影法により、アダムスキー撮影の円盤と同型であることを証明した。

昨年九月二十五日のGAP総会でアダムスキーの高弟であったアリス・ポロマイ女史が東京銀座のガスホールで『アダムスキーの思い出と宇宙哲学』と題する大講演を行った。

そのあと、宿舎のホテル浦島で歓迎大晩餐会を開催したが、途中で気分が悪くなった女史は中座してホテルの自室で休息し、そのまま数日間寝込んでしまった。このため京都行きは中止し、GAP会員が入れ替わり看病と世話をしたのだが、この舞台上であるドラマが発生して意外な一幕が展開したけれ

〈巻頭言〉

人間のカルマ



ども、それはさておき、最終的に女史の病気を超能力でもって一発で治したのは春川正一氏(仮名。『異星訪問奇談』の主人公)であった。

ポ女史の病気を聞いた春川氏は「私が治してあげましょう」と言ってホテルを訪れ、編者と斉藤庄一氏の立ち会いのもと、約四十分間、「治療」した。手を病患部の上方の空間にかざして手から出るエネルギーを放射する。少し揉むこともある。

翌日訪れたらポ女史は別人のように元気になっていた。一夜で奇跡的に治

癒したのだ。「治ってよかったですね」と春川氏は心から嬉しそうに笑っていた。報酬など念頭にないらしい。

別な治療例としては次の事実がある。横浜に住むGAP会員のY氏のお父さんの腹の中に腫瘍ができた。手の施しようがなく、手術は不可能だと医師は宣告した。だが親思いのY氏はなんとかして父を救いたいの一念をもって編者に相談してきた。春川氏なら治せるだろう。お父さんの写真を送りなさい」と答えて送らせた写真を春川氏に見せたところ、氏は編者がY氏から聞いていたとおりの確な判断をくだした。写真から発するオーラまたは波動で病患部や原因などがわかるらしい。「お父さんが快方にむかうように良い波動を送ってあげましょう」と春川氏は約束した。

約半月後、Y氏から歓喜に満ちた報告があった。どういうわけか手術が可能になり、大手術の結果、巨大な腫瘍のかたまりが患部から摘出されて一命をとりとめ、快方にむかっているという。しかも病院での手続きその他が不思議にうまくいって、スムーズに事が運んだということだった。

まだある。生来両足が内側に曲がって奇形化していた人の患部を一時間にわたる治療でまっすぐになるように治した実例も編者は目撃したし(ただしこの人の正常歩行は今後の歩行練習にかかっている)、その他、病人の写真を

見て処置法を指示し、その結果助かったという例は枚挙に暇がない。病氣治療ばかりではなく、悪魔に取り憑かれたような地獄の人生に喘いでいる人にもやはり写真を見ただけで良き想念波動を送って救出した例も多数ある。しかも謝礼を全く要求しない。

氏自身も生来目が悪く(斜視)、幼少時には辛い思いをしたらしいが、自分のパワーで治したと言っていた。自分の目が治せるぐらいだから他人の斜視を治すのは簡単だろう。

希代の超能力者である氏のこうした奇跡発生の事実はあまり知られていない。超能力といってもテレビに出演してスプーンを曲げたりするのではなく、他人の難病を癒やしたり苦痛を除去したりして、いわば「ひそかに」他人を助けているからである。

コンタクトティールとしての春川氏の体験談は本誌93号から98号まで『私は別な惑星へ行ってきた』と題する連載記事となり、後に単行本化された。現在までこの書の読者から賛辞が殺到している。

しかし本誌に体験談を連載した当時は喧々囂々たる非難攻撃があった。中傷・嫉妬などが日常茶飯の惑星地球であるから怪しむにはあたらない。犯罪行為そのものの超低次元妨害が春川氏と編者に向けられたが、氏は何も言わず、微笑を浮かべているだけだった。氏は誰をも悪く思わないのだ。「暴

対して暴をもつて報いるな」とは終戦後に中国の全日本軍を無血送還した蔣介石總統の有名な言葉である。この高貴な精神により日本軍は補償にならずにすんだが、いま總統の恩義を自覚している日本人はまずおるまい。

この世界にはいかにメクラが多いことかという不遜な考えは編者にはない。ただ痛感するのは人間の持つカルマ(宿命)の問題である。われわれGAP集団は狂信的な人よりも常識のある宇宙的カルマを持つ人と提携することが大切である。春川氏の記事を読んで文面から発する真実の波動を感じし得るか否かは知能よりも内奥のカルミックな直感力に起因する。直感力は数代にわたる過去生から培われた宇宙的記憶を基盤とするパワーである。

むかしアダムスキーもひどい攻撃を受けた。助手たちは次々と離反し、悪口雑言を投げ続けた者もいた。しかしアダムスキーは沈黙を通したまま他界した。彼らのカルマを知っていたのだ。宇宙的カルマ——この有無によって個人の行動姿勢が決まる。このカルマを持つ人は僻地に住みながらも黙々として宇宙哲学の研鑽を続ける一方、持たぬ人は心の振動が激しくて他と対立しやすい。しかし最重要なのは宇宙的カルマの有無にかかわらず無差別に他人を助けることにある。これがまた本人(助ける人)の宇宙的カルマを形成する土台となるからだ。

(久)

Space People Are Here! by Hachiro Kubota

UFO問題と世界の運命

久保田 八郎
〈日本GAP会長〉

●今世紀最大の謎UFO問題を多年調査研究してきた筆者が驚くべき実態を伝えた警醒のドキュメント

総会会場の奇妙な光体

昭和六十三年九月二十五日午後一時より都内銀座七丁目の銀座ガスホールで始まった日本GAP総会会場は、ほぼ満員の聴衆の熱気で溢れていた。

この日、アダムスキーの高弟であったアリス・ポマロイ女史がアメリカより来日して大講演を行なうため、北は北海道から南は沖縄に至る全国の会員がつめかけて女史の出演を待っていた。

演題は『ジョージ・アダムスキーの思い出と宇宙哲学』

篠芳史司会者の朗々たる声が響いたあと、私がまずステージに出て二十分間の挨拶をする。講演慣れしているとはいえ、いささか緊張しながら日本GAP活動の沿革とポ女史の紹介を行なった。

客席の大部分は暗いのでステージ側からお客さんの顔が見えない。これは講演者にとって都合がよいように思われるだろうが、実はよくない。聴衆

全員の顔が見渡せるほうが私の場合は落ち着くのである。

その頃、GAP本部役員の一人、安藤澄雄君（東京）は役員席にいないで二階席の前方中央付近にいて話を聞いていた。というよりも撮影が主体であった。同君は後日ポ女史に送ろうと思っていた、さまざまな位置からコンパクトカメラで写真を撮ったが、私の講演中は二枚ほど撮影した。

ところが総会が終わった頃から、会場に二人のスペース・ピープル（友好的な異星人）が来ていたとか、ステージ上の空間に超小型円盤（スキヤニング・ディスク）が浮かんでいたのを数名が見たとかいう噂が広がったため、もしやと思いつながり後日フィルムを現像に出したところ、果たせるかな私を撮った写真の右上に小さな光点があるのを発見したのである！

同君は当初、フィルムのキズだろうと思ったが、光点の部分を大きく拡大した写真を十月二十五日に私がコンタ

クティー春川正一氏（仮名）に見せたところ、次のように確認した。

「たしかにスペース・ピープルの波動を感じます。しかし光点は円盤そのものではなく、どこからかスペース・ピープルが操作して放射したビームのようです。何かのサインとして写真に写させたのでしょうか」

安藤君は撮影時には光体に気づいていない。プリントした後に調べてみてわかったのだ。UFO写真ではこうした例が多い。

写真専門学校を出た同君がなぜ高級一眼レフを持つてこなかったかという点と、UFO写真を撮るのに高級カメラと安物との差はなく、UFO側が撮らせようと思う人間に対しては、どんな安物カメラでも写させるし、超高級カメラを持ち歩いてもUFOを全く写せない人もいるから、カメラにはこだわらないことにしているという。含蓄のある言葉だ。

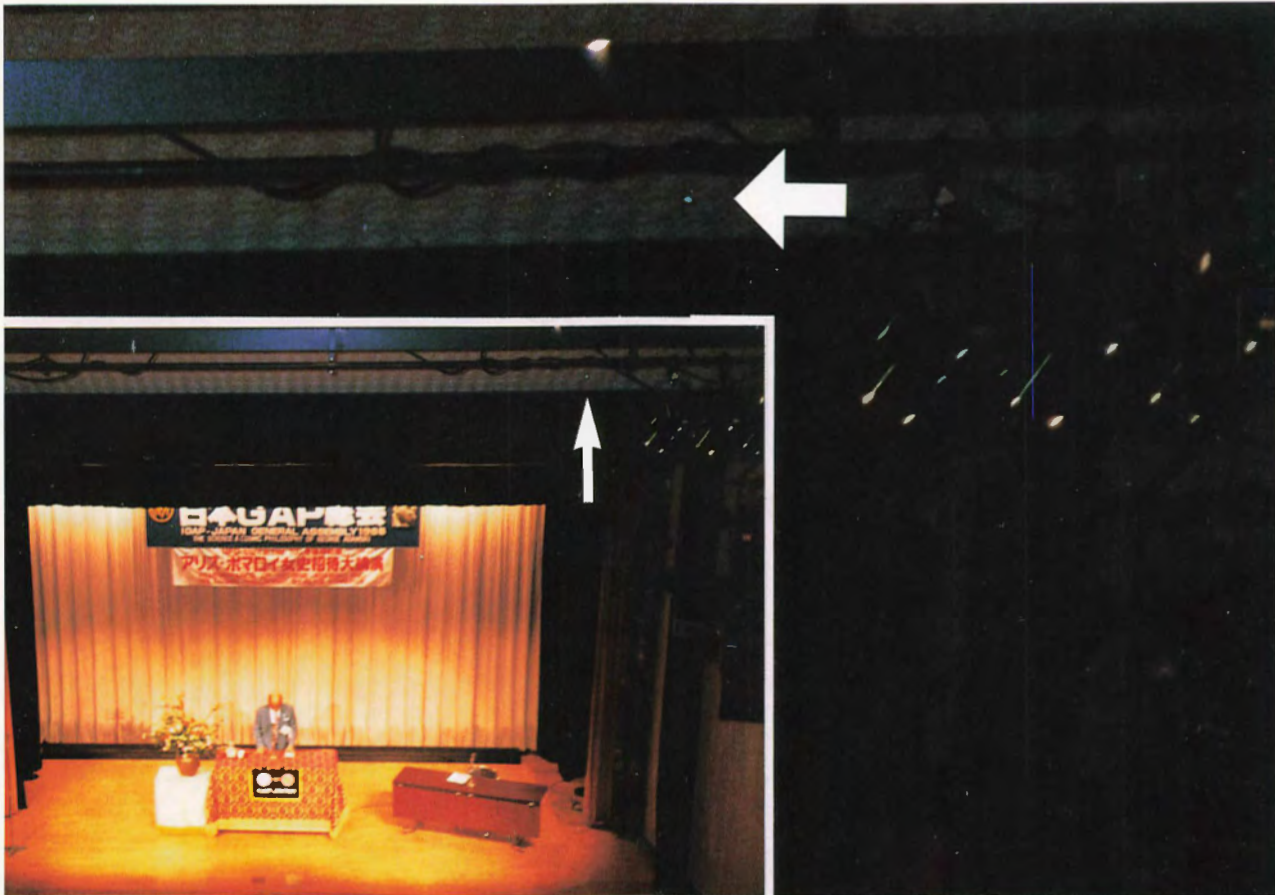
そういえば本誌97号の記事『八王子

市でUFOを撮影』の筆者、降旗和彦氏などは、フジの使い捨てカメラ『写ルンです』を使って、素晴らしいUFO写真を撮影している（本誌97号表紙カラー写真）。UFOの目撃や撮影にはUFO側の配慮と当事者の持つカルミックな（運命的な）要素が大きな原因をなしているように思われる。

光体が写っていた別な写真

一方、総会における私の講演中に、もう一人奇妙な写真を撮った人がいた。香川県高松市に住む関高明君である。同君は昨年九月より日本GAP高松支部を設立し、代表としてGAPの地域活動を展開している熱心な会員だ。

同君がステージにカメラを向けて私を撮った写真の上部に白い円の一部のような光が大きく写っていたのである。これも春川氏に見せたところ、安藤君撮影の光体と同じ性質のもので、スペース・ピープルの操作によるビームで



▲上の写真は安藤澄雄撮影の総会会場ステージ。左下の矢印が小さな光体を示す。右上の大きな矢印は光体を拡大したもの。〈ニコンピカイチ3/35mm f2.8/フジカラー100/オート撮影〉

◀左は関高明撮影の写真。上部に半円形の不思議な光が写っている。〈ヤシカT-AF/コダカラー〉



あつて、スキヤニング・ディスクそのものではないという。たぶん本人に何かのメッセージを伝えようとしたサインだろうと語っていた。

以下は関君より筆者宛の手紙の一部。
「東京本部通信9月・10月号の中に、ブラザーズと超小型円盤が出現したとあり、驚いております。特に小型円盤が出現したことについては想像もしておりませんでした。

本部通信を読み終わった後、ふと総会で撮った写真のことを思い出し、たしかに不思議な写真があったはずと再確認し、お知らせする次第です。

同封の写真の上部が白いのです。当初これは私のミスによりカメラの裏ぶたを開けたのか、フィルム最初の部分のため光が入ったのだらうと思いましたが、しかしフィルムを見ると、最初のは篠さん（司会者）の挨拶の写真であり、同封の写真はフィルムの三枚目に写っていました。よく思い出しても撮影中に、もしくはフィルムの巻き戻し中にカメラの裏ぶたを開けた記憶はありません。それで、これはたぶんスペース・ブラザーズの祝福の想念波動かもしれないと思い、これ以上深く追求しませんでした。

でも今日いただいた東京本部通信を読み、この写真が超小型円盤と関係があるのかもしれないと思い、同封の写真調べていただこうと考えました」

四国でGAP活動を展開した関君に対するスペース・ピープルからの祝福のメッセージだと考えたいが、それを確認する物的証拠はない。しかし春川氏の超能力は大変なものであるから、同氏の証言を信頼してよいだろう。

会場で光体を目撃した人もいる

実は総会会場でこの不思議な光体を目撃した人がある。GAP本部役員の遠藤昭則君（千葉県）がそれだ。

ポ女史の大講演と質疑応答が大喝采裡に終了した直後、二階席でステージを見ていた同君はアッと驚いた。むか

って右側のステージ上約二メートルの空間に小さな光体が浮かんでいるのを目撃したのだ。それは数秒間で消えたが、まぎれもない「光体」そのものだった。

安藤君撮影の光体と同じ物ならば、それは総会開会時から終了時まで会場内にいたことになる。数秒間で消えたというのはいやなりディスクそのものではなくてチームだったのか。真相は不明だがUFOをよく見る超能力者の遠藤君のことだから、この目撃も錯覚や幻覚とは考えにくい。

蔵前橋通りから見た美しい円盤

こんなこともあった。六十三年七月十八日午後五時すぎ、本誌102号を全国会員向けに発送するため二台の車に積んで神田郵便局へ向かっていた。先頭の車は遠藤君が運転し、助手席に私が座り、後続車は中里信彦君（千葉県）が一人で運転した。神田郵便局は内部の波動がよいので、遠いけれどもむかしからここを利用している。

蔵前橋通りを進行しているうち、午後五時五十五分頃、亀戸四丁目あたりで突然遠藤君が叫んだ。

「あつ、円盤ですよ。円盤が飛んでいます！」

同君が左手で指さす左の方向を見ると、いた！真珠に似た白銀色に燦然と輝く円形物体が「らがー」という

看板の上を越えて左から右へ（南から北へ）移動し、遠いスカイラインの上を低空で悠然と飛んでいる。少し弧を描きながら飛行する物体はまさに生き物のごとく、私たちに美しい姿態を見せようとする天翔ける天女のような感じだ。

見かけ上の大きさは私の右手を前方にいつぱい伸ばしたときの小指の爪ぐらいで、目撃時間は十秒あまりだったろうか。物体は青空に吸い込まれるように消えてしまった。後続車の中里君も見たという。私たち二人がウィンドシールドの前方の空を指さして叫んでいる姿をうしろから見てUFOの出現だと直感したらしい。

この円盤はどうみても私たちに姿を見せるために出現したとは思えない。視界の良好な位置とタイミングの良さでそうとしか考えられないのだ。

やはりスペース・ピープルの祝福と激励のサインなのだろうか。

というふうには言え、いかにも主観的でロマンチックで非科学的に響くかもしれない。

しかしジョージ・アダムスキーがその著『宇宙からの訪問者』で伝えた別な惑星の超絶した文明と科学は、地球人の想像をはるかに超えるものであるし、アダムスキーと同様の体験をした日本人、春川正一氏（仮名）の体験記『異星訪問奇談』（本誌に広告を掲載）にもスペース・ピープルのものすごく

高度に発達した科学と精神の状態で光明に語られているところからみると、気が遠くなるほどの格差が存在すること自体、ロマンそのものであり、現在レベルの科学研究の対象とするには縁遠いだろう。

といって非科学的な詩文の材料にとどめてよいというのではない。それどころかUFO問題は地球人にとって重大きわまりない要素を帯びていると言えるのである。

米ソは太陽系の真相を隠している

何度も述べるように、アダムスキーによればわが太陽系には九個だけではなく実際に十二個の惑星があり、しかもそのすべてに偉大な発達をとげた人間が想像を絶する文明を持ち、天国のような平和な生活を楽しんでいるという。そして最劣等な惑星は地球だけで、ここはまさに地獄であるから「天国と地獄」は実際に存在するというわけだ。

ここでだれしも大きな疑問が起ころう。宇宙開発により惑星探査機が太陽系内の各惑星を調査した結果、地球以外の惑星に生物がいけないことは明確になっているのに、なぜ各惑星に人間が住んで文明が存在していると言えるのか。バカも休み休み言え、と。

この疑問に対する回答は次の一言に尽きる。

「米ソの宇宙開発機関のトップクラス科学者は惑星探査機による調査の結果、地球以外の惑星群に人間が住み、驚異的な文明を持つ事実を知っているのだけれども、現段階では発表できないために隠蔽工作をし、逆な情報を流しているのだ」

なぜ現段階で発表できないのか？

発表すれば世界に大混乱が発生するからである。そんな事実を公表しようものなら学者の権威の失墜、教育体系の崩壊、産業界の動揺、株価の大変動、経済界の混乱等、シワ寄せは果てもなく拡大し、ついには大戦争になりかねない。だから米宇宙開発機関の一部科学者は金星などに素晴らしい文明が存在することを知って知り抜いているけれども、緘口令により一切沈黙を守っているのだと、アメリカで知人のUFO研究家が私に洩らしたことがある。

UFOは金属製の宇宙船

UFO（未確認飛行物体）なるものは近隣の惑星群から地球へ飛来する宇宙船である。アダムスキーによると、惑星間を航行するには葉巻型の大母船を使用する。これは長さ数百メートルのものから巨大なものになると数キロにも及ぶものがあり、内部はさながら人工的な宇宙都市になっているという。

この大母船に小型の俗に「円盤」と呼ばれる数人乗りのスカウトシップ

（偵察船）を多数積載し、地球のとき惑星に接近してからスカウトシップを発射する。

このスカウトシップは大気圏内を飛行したり、低空で飛んだり、ときには地上に着陸して研究調査用に土壌その他のサンプルを採取したりする。あるいは中から乗員が出てきて地球人とコンタクトすることもある。また調査用の超小型スキヤニング・ディスクを飛ばしたりする。

こうした大母船やスカウトシップの推進法だが、残念ながら地球の科学ではまだ解明に程遠い。わずかに推測できるのは、これらの宇宙船が人工的な重力場を発生しており、そのために船体が無重量状態になるから、あとはわずかな推力で光速に近いスピードで飛べるらしいことぐらいのものである。

これは惑星の公転自転と引力発生 の原理を応用したものらしく、スカウトシップがかりに時速一万キロでジグザグまたは急速Uターンをやっても、内部の人間は重力場の圏内にいるので何ともない。人間の肉體細胞すべてが人工引力に引っ張られているからだ。もちろん船体内部には空気があり、船体の外部も空気層で包まれている。この外部空気の気体分子（原子）が船体のフォースフィールドによってイオン化するために種々の色光を帯びる。夜間はスカウトシップが特にオレンジ色を呈することが多い。その他、赤色、緑

▼金星の大母船。1952年5月1日午前7時58分にパロマー山腹でジョージ・アダムスキーが6インチ反射望遠鏡を使用して撮影した。



色等多くの色に変化するけれども、これは船体自体の色ではない。

船体は超硬質の金属で作られている。アダムスキーによれば半透明の金属だというが、これも地球の科学レベルでは不可解な物質らしい。

春川正一氏は火星で人工的に作られた特殊な鉱石を証拠物件として火星から与えられたといい、それを私が預かって、ある大学と民間のある大研究所へ調査を依頼したことがある。

その結果、驚くべき性質のものであることが判明したが、この鉱石も蛍光灯のごとき明るいライトに近づけると半透明であることがわかる。

とにかく、いわゆるUFOなるものが四次元世界からくる霊的な実体で、地球へ接近して三次元空間内に入ると物質化して可視的になるのだという説は完全に誤りである。

単極磁気が重大な力

物理学に詳しい人は逆二乗の法則を思い出すだろう。太陽から出る放射ビームは距離の二乗に反比例して弱まってゆくという法則だ。これをグラフであらわすとすごい急カーブを描く。したがって地球より遠い惑星群（これを惑星という）に地球と同じ光や熱が与えられるはずはないといって反論するだろう。

逆二乗の法則は真理だろうが、太陽

系の場合はこれがあてはまらないとして、アダムスキーはテレビのブラウン管の原理にたとえて説明し、三種類のアステロイド帯の加速作用により冥王星やそれより外側の遠い惑星にまで地球と同じ光と熱が与えられ、快適な居住環境が存在しているのだと述べている。詳細はアダムスキー全集第二巻『UFO問題の真相』を読みたい。

ところが春川正一氏によれば、太陽のビームが全惑星に等しく届くには単極磁気がカギをなすという。この単極磁気なるものが地球の科学の最後の課題であるけれども、おそらく深遠難解であるため、これを説明するには地球人総出でたの必要があるとういうことだ。異星の宇宙船の推進原理も単極磁気が重大な役割を果たすらしい。とすると地球の科学が異星と同等レベルに達するには「前途程遠し。思いを雁山の暮雲に馳す」どころの話ではない。轟音をとどろかせて、わがもの顔に飛び回る地球の航空機の噴射推進方式なるものは、異星人から見れば話にならぬほど原始的なもので、彼らにとっては太古の遺物なのだろう。

上野駅にいた異星婦人

その別な惑星からきた人々をやはり霊体視する説があるが、これも誤りである。彼らも人間であるからには地球人と同様の肉体を持つ。骨、血液、筋

肉などから成る生きた人体であって、外観は地球人と全く変わらない。しかも地球上で地球人と同じような服装をして適当な名を名乗り、職業を持って働いているから周囲の人々は全く正体に気づかない。私が出会った異星人たちも東洋人タイプ、白人タイプというるあり、見た目には地球人と全く変わらなかった。もちろん男もいれば女もある。こうして彼らは地球人を援助するために、ひそかに活動を続けていたのである。

昭和六十三年七月九日（土）、東京上野公園の東京文化会館で開催された日本GAP東京本部七月度月例研究会に、本部役員の遠藤昭則君は仕事の都合で遅れてやってきた。

上野駅の「公園口」改札を出たとなん、彼はギョツとして目を輝かした。なんとそこには別な惑星からきた婦人が立っていたのだ！

見たところ二十七、八歳。中肉中背の容貌は全くの日本人タイプ。ブラウスにスカート、ハイヒールの服装はこれらのOLにしか見えない。

なぜ異星人であることがわかったかという、遠藤君は彼女の体から放射されているオーラで見抜いたのである。

そのオーラは青色だが、地球人には全く見られない澄みきった透明な無限の深みを帯びた青色であった。すでに宇宙哲学の解説講義の始まっている東京月例研究会の会場の方向を見上げな

がらその女性は立っていた。

重要なオーラ透視能力

遠藤君はオーラの見える透視能力者である。昭和五十八年八月に日本GAP海外研修旅行でバチカンのサンピエトロ大寺院に立ち寄ったとき、筆者と遠藤君ほか数名が黒い僧服に身を包んだ白人タイプの金星人と会見したが（詳細は本誌92号掲載「サンピエトロ大寺院の異星人」を参照）、上野駅の異星婦人との遭遇はそれ以来だと同君は言っていた。

オーラ透視能力は重要である。オーラは万物から出ている放射線で、物体（人間の場合は肉体）の質、人間の精神の状態などの変化と連動して波長が変化するものらしく、科学的には未解決だが、オーラ透視能力を持った人には色がついて見えるのである。人間の場合は精神的に次元の低い状態が赤、高次元になるにつれて紫色の方向に変化し、各人が自分の精神レベルに応じてその間の色をあらわしている。

非常に高度な精神を持つ人は紫を超えて白銀色からさらに黄金色となるようだが、地球人にはめったに見られないという。青や紫の人は地球人にもたまにいますが、スペース・ピーブルの場合は同じ青でも濁りのない透明度の高い色だと遠藤君は言う。だから相手の正体がわかるのだ。

一般人には自分のも他人のもオーラが見えないからオオカミのような人間が羊の仮面をかぶっていてもごまかし通せると思うだろうが、どっこいオーラばかりは絶対に隠せない。どんなに聖者ぶった顔をしていても心が低次元な状態にあれば、それなりの色のオーラを放つのだが本人は気づかない。

以前、東京月例研究会に自分こそアダムスキー哲学探求の最も熱心な者だと自負しているらしい人がいたが、そのオーラは暗い醬油のような色で、ひどく濁った状態であつたと遠藤君が言っていた。それ以後その人は東京月例研究会に来ていない。この人は実際は迷い心を持つ人であるらしい。

その後遠藤君は昨年九月の総会で大方ぶりにその人を見かけたが、今度は「自分が最高だ」という傲慢さをあらわすオーラを放っていたという。人間は顔に微笑を浮かべて自分の心をいくら隠そうとしてもだめなのだ。

逆に、求道のな人にとって自分のオーラは自身自身の心の純度を示すバロメーターになる。その意味でオーラは自分を奮起させるのである。

もつとも、オーラによって他人を差別するのは宇宙的な愛の法則に反するから、そのゆえに宇宙哲学による研鑽が必要になってくるのだが、これは別次元の問題である。ここではオーラの性質について客観的に述べたにすぎない。オーラに関する詳細については本

誌103号の遠藤昭則執筆『オーラ透視能力開発法』を読みたい。

異星人の驚異的な精神レベルと科学

話を戻すと、別な惑星の高度に進化した人間といえども肉体的には地球人と全く異なる。オバケのような異星人は存在しないのだが、巷間そのようなものの目撃事件が伝えられるのは何かの誤認、錯覚、情報操作、架空の物語のいずれかであろう。

異星人が地球人と大幅に相違するのは、非常に高次元な精神性にあるとアダムスキーも春川氏も言う。彼らはテレパシー、遠隔透視、その他の超人的能力を持ち、絶対的ともいえる愛と調和の精神で生き、病氣も戦争もなく、天国のような社会を建設しているというのは先に述べたとおりである。

また彼らの科学技術も地球人の想像を絶しており、惑星の重力を遮断する巨大な宇宙船を建造して惑星間、太陽系間を自由自在に飛び回っている。

彼らは光をコントロールする超絶した技術を有している。投射した光を空間で停止させたり、ねじ曲げたりする。大母船内で光を空間で停止させて、そこをスクリーンとし、立体映像を見せられて驚嘆したとアダムスキーは『宇宙からの訪問者』で述べているが、春川氏の話によるとこれは事実らしい。地球のホログラフィーと同じではな

いかという人があるだろうが、まるで違う。ホログラフィーはレーザー光を物体にあてて、それから出る光と元の光の干渉パターンを感光板に撮影し、これに再度光をあてて立体像を再現させるのだが、異星人の方法は感光板などを必要とせず、『披写体』である物体から発する光をそのまま船内に導入増幅して空間に放射し、空間で停止せらるらしい。地球人がこの技術をマスターするにはまだ数千年を要するかもしれない。

光をコントロールする技術

異星人は光をコントロールできるからある物体を人間の目に可視・不可視にすることは自由に可能だ。たとえば二人の人間（地球人）が空をながめて一人が巨大なUFOを目撃したけれども、そばにいる他の一人にはどうしても見えなかったという例が往々にしてある。

この場合はAという人だけに船体の光を送り、Bという人には送らないという技術上の操作にすぎない。われわれが物体を見てその存在を知覚するのは、物体自体から発する光を肉眼でキャッチするからである。したがってその光が遮断されれば物体は見えない。この簡単な原理を応用してスペース・ピープルは、地上の地球人のある人にはUFOの船体を見せ、別な人には見

せないようにする。SFという平行空間などは存在しないのだ。

なぜある人には見せないのか。この理由は不可解である。察するにその人の精神的発達段階、性質、カルミックな（運命的な）要素などによると思われるが、真因は不明である。

同様に人体を不可視にすることも可能である。広い場所で大出会ったばかりの人間が急に見えなくなつたという実例がときどき発生するのだが、これも光をコントロールする技術によって、相手の肉体はそこに存在するのだけれども、見る側の人には消滅したように見えるのだ。

このために宇宙人はエーテル体だという考え方もあるようだが、これは正しくない。彼らはものすごい科学技術を持つ現実の生きた肉体系人間なのである。

ルールドとアティマス奇跡について

余談だがこれで思い出すのはむかしフランス南部のルールドで発生した聖女ベルナデットの奇跡的事件である。

一八五八年二月、ルールドの町はずれのマッサビエユの洞窟で十四歳の少女ベルナデット・スピルは、十五日間、連日のようにこの場所で聖母マリアの姿を見て、何事かを長時間話し合っていた。他の人には見えないし声も聞こえない。

この事件は世界的に有名になり、現在には現地に大聖堂が建立されて一大聖地となっている。

しかしベルナデット関係のどんな資料を調べても本人は「聖母マリアに会った」とは言っていない。十五、十六歳の絶世の美女」を聖母マリアにしてしまったのは周囲の信奉者たちなのだ。

以下は私の推測である。

マッサビエ洞窟の上空に別な惑星からきた大宇宙船が停止していた。そして光をコントロールする技術によりベルナデットだけに絶世の美女の立体像を見せた上、特殊なビームを使って彼女だけに聴こえる音波を送った。ベルナデットの想念はテレパシーにより上空でキャッチできるから、二人の



▲ルールの奇跡のヒロイン、聖女ベルナデット。

会話は生きた人間同士のように行なうことができる。こうしてスペース・ピールは聖母マリアの幻の出現のごとく思わせることによって、イエスの愛の教えを広めようとした——。

異星人の科学技術によれば、こんなことは朝飯前でやれるはずだ。

ベルナデットが選ばれたのは、おそらく至高の純粋さとカルミックな（運命的な）要素によるものだろう。

似たような事件で一九一七年五月から六ヵ月間、ポルトガルのファティマで三人の子供ルシア、フランシスコ、ジャシントに発生した聖母マリア出現がある。そして十月十三日には七万人の大群衆の頭上に太陽に似た円盤状物体が出現して人々は聖母マリアの乗物

▼ファティマ事件の立役者。左よりルシア・ドス・サントス(10歳)、そのいとこフランシスコ・マルト(9歳)、ジャシント・マルト(7歳)。フランシスコとジャシントは早逝したがルシアは長生きし、筆者がファティマを訪れた1957年には80歳の高齢ながら健在だったという。当時はローマ法王でさえ会えないほどに別格視されていた。



だと叫び大歓声をあげた。

この事件について春川正一氏は、ファティマの場合は確かにスペース・ピールの活動であったことを異星人から聞いたと言っている。ルールの件については質問したことがないという。

ルールの詳細については拙著『ルールの奇跡』（学研ポケットムー）を参照されたい。ファティマの事件に関しては本誌80号に筆者による「ファティマの大UFO事件」が掲載されている（ただし80号は品切れ絶版。この記事だけを所望する方は六十円切手二枚を同封の上、申し込まればコピーをお送りする）。

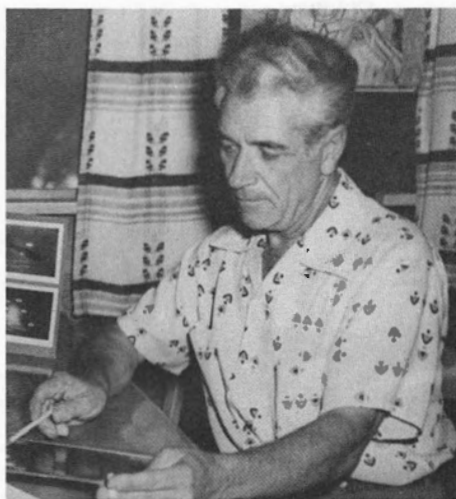
蛇足ながら、わが国で出ているファティマ事件関係の本は申し合わせたように

うに当事者である三人の子供たちの名前のうち、ルシアをルチア、ジャシントをヤシントと書いているが、これは誤りである。だれかが書いた本をまる写しにしたのだろう。

筆者はルールドとファティマの両聖地を視察したが、いずれも宗教的というよりも宇宙的波動を感じさせる場所だった。ただし宗教上の奇跡的事件のすべてをUFOと結びつけるつもりはない。なかには心霊的なものもあるからだ。

イエスは金星から転生してきた

アダムスキーによると、イエスという方は地球人に愛の法則を伝えるため



▲ジョージ・アダムスキー

とも「キリスト教」という宗教を作るために出現したのではなく、金星で実践されている宇宙の法則ともいふべ

に金星から地球へ転生してきたのだという。このことは『宇宙からの訪問者』に述べてある。

ここで転生（生まれかわり）という問題が出てくるが、科学的に未解決なために一般人は思考の中に入らなくて、人間の生涯は一度だけだと思っ

しかし宇宙的に覚醒するためには、宇宙哲学的にみてこれは重要な問題とされている。いずれ地球人の精神と科学が長足の進歩をとげれば、転生の問題が重視されるようになるだろう。それはともかくとして、イエスはも

き「愛」の哲学とその実践法を伝えるためにきた。キリスト教という宗教団体にしたのは後世の人間たちである。

地球人は宗教を作ることがよほど好きであるらしく、日本だけでも六十二年十一月現在で政府や都道府県に認承されている宗教団体が十八万三千あるという。だから地球人は分割や分裂を好む習性を有するとアダムスキーは言うのだ。統合と分裂をくり返すのが地球特有の現象だから、それでヘーゲル弁証法などが生まれるのだろう。

万物一体のフィーリングが重要

アダムスキーが伝えた宇宙哲学によると、地球人は絶対に分割してはならないものを分割させるために進歩が遅いのだという。これを逆に万物一体の線にそって開発を進めるならば、あらゆる面で急速に新発見が行なわれ、人間も精神的肉体的に飛躍的な進歩をとげるだろう。

万物一体というのはきわめて抽象的だが、人間の場合は「万物一体感」というフィーリングを極限にまで押し進めるのである。この点で「進歩した惑星の人たちは自分によって観察される物を、あたかも自分自身であるかのごとく感じながら意識的にその物を見る」とアダムスキーは「生命の科学」の中で述べている。

これはテレパシー、遠隔透視などの

能力開発の根本的な基礎になるものだろう。

ところが地球人の感覚では何を見ても個別感、分離感しか起こさない。そのため地球人の肉体細胞の重要な機能を持つ部分は眠り込んでしまい、テレパシーなどの能力が出てこない。これを出すためには自分の肉体の個別感を「全体」との一体感に切り替えて、眠っている細胞を活性化させる必要がある。そして練習を重ねるのである。

“宇宙の意識”の存在を悟る

最も重要なのは、大宇宙全体を一つの意識体とみて、その創造的意識の流れが万物を生かしていると認識し、人間もその創造的意識に生かされていると自覚することにある。この創造的意識をアダムスキーは「宇宙の意識」と呼んでいる。通俗的にいえば神と同義になるだろうが、要するに宇宙に遍満すると考えられる「宇宙の創造パワー、英知」である。

宇宙空間に意識は存在しないという哲学者や唯物論者がいるかもしれないが、これは学問ではなく、人間個々の認識とフィーリングの問題である。

こうしたフィーリングを高度に保っている別な惑星の住民は、肉体も超健康で、数百歳の長寿を保ち、病気をしないという。人間の想念波動はまず自分の肉体に大きな影響を及ぼすから、

地球人でも「大宇宙が自分自身である」という強烈な想念とプラスのフィーリングを持ち続けるならば、病気になるに驚異的な長寿を保つことができるだろう。

現在地球の医学も少しはこのことに気づき始めて、PNI（精神神経免疫学）や心身療法が発達してきたが、異星人のすさまじい進歩に比べれば幼児の段階にすぎないようだ。

重要きわまりないUFO問題

ともあれUFO問題は一部の天文学者のいう「子供の夢」どころではなく、地球の運命にかかわる重要きわまりない要素を帯びている。UFOは存在する、しない、などと論議している人たちのすぐそばまで別な惑星の想像を絶する科学の産物である宇宙船がきているし、偉大な進化をとげた異星人が正体を告げずに日常接触しているかもしれない。

こういうわけで、アダムスキーの文献類、春川正一氏の体験談、筆者自身や他の人たちの体験、多数の著書、資料などを総合して、私なりのUFO・異星人問題を述べてみた。まだお伝えしたいことは山ほどあるが、後の機会にゆずりたい。

とにかくUFOなるものがこの世のあらゆる問題を含んだ最重要な現象であることを再度強調したい。

Q & A Session at the 1988 GAP-Japan General Assembly
by Alice Pomeroy / Translated by Shigeko Sakamoto

アダムスキーの

宇宙的カルマと異星人の援助



アリス・ポマロイ／坂本茂子訳

昭和六十二年九月二十五日、アダムスキーの高弟であったアリス・ポマロイ女史は東京銀座カスホールにおける日本GAP総会で「アダムスキーの思いつきと宇宙哲学」と題する大講演を行ない、そのあと質疑応答に出席した。壇上で通訳をつとめた坂本茂子さんが録音テープにより精密に訳し直した全文をここに収録（講演全文は本誌103号に掲載）。

撮影／松村芳之

《ポマロイ女史の挨拶》

「質疑応答の前に、二・三お話ししたいことがあります。

私の感謝と喜びの気持ちはとても言葉に表すことは出来ませんが、久保田氏の素晴らしい業績と私への友情に対して、とにかく心の底からお礼を申し上げたいと思います。

日本GAPという花が開き、今や東洋最大のUFO研究グループとなった状況を、長年に渡って見てこれたことは、私にとつてこの上ない喜びでした。今日ここでUFOコンタクトティー・オー号達成のお祝いを申し上げるとともに、あなた方すべてが、今後とも成功の道を進まれることをお祈り致します。

ジョージ・アダムスキーの業績で、中でも哲学の面において、これ程までに理解・実践してきた国を、私は他に知りません。

久保田氏が長年に渡り示してきた決断力と忍耐、内なる英知と知識、そしてジョージ・アダムスキー個人とその業績に傾倒して来た信念は、多くの称賛を得るに値するものです。人類愛、平和、そして全体の調和といったことに関心のある人であれば、私があらためてお話しするまでもなく、彼とその他の皆様に對して、深い理解を示すはずで

す。問 アダムスキー氏が、自分の健康管理のために特にしていたことがありま

したらお話し下さい。

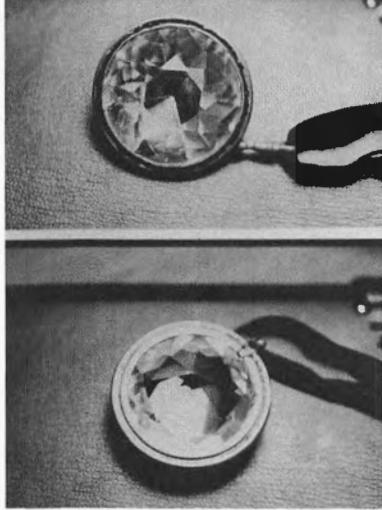
「そうですねえ……。まずアダムスキーはとても健康な人でした。彼を知ったのは確か彼が七十三歳の時で、彼が亡くなったのは七十四歳の時だと記憶していますが、彼はとても強くて健康な人で、彼の体はとても七十四歳の男のように見えませんでした。

彼は自然の法則に従って生きていました。それはブラザーズから教えられたことで、彼は私達と同じように、自分の好きなことを存分に楽しみ、自分自身何も我慢することはないと言っていました。でも彼は常に、何事も程々にこなすことを心がけていて、決してやり過ぎることはありませんでした。

彼はブラザーズから多くの助言を得ています。ここ（地球）に来ると彼らは、地球人の事について常に研究していました。どんな食べ物があるか、どんなビタミン類を食物に添加するのか、私達が実際何を食べ、どんな料理法をするのか等を、彼ら自身の科学技術を使って調査していて、その結果、これは食べるべきだとか、だめだとか、さらにどんな運動をしたら良いか等を、彼に助言していたのです。

でも一般的に言つて彼は健康で、亡くなる前二・三週間を除いては、彼が普通の病気でひどく悩まされたりしたことは記憶にありません。少なくとも私達よりは。

彼はまた、クリスタル・ペンダント



◀写真右はアダムスキーが所持していた金星のクリスタル・ペンダント。昭和五十年十一月、カリフォルニア州ビスタのアダムスキーの家で、故アリス・ウェルズ女史が久保田八郎に見せてくれた。胸にあけるとあたたくくなった。女史の許可を得てこの写真を撮影。写真左はクリスタルを胸に下けて講演中の若き日のアダムスキー。

を持っていました。これは皆さんよくご存じですね？ 彼はよくそのペンダントを胸に下げていて、時には夜寝るときもそれを身につけていました。ブラザーズは、そのクリスタルにある波動を送り込み、それを彼の体に吸収させるといったことも出来たのです。またブラザーズは時折、彼らの惑星の科学技術を応用して、アダムスキーにも出来る簡単なことを教えて援助したこともあります。

ある時彼らは、アダムスキーの体の波動を調整し回復を促す装置の製作を援助しました。彼らはその方法を教えただけでしたが、アダムスキーは独自でそれを整理し、車庫の作業台の上でその実験を続けたのです。

そして彼が作り上げたものは、ちょうどこの位の円板型をしたもので（と

言って両腕で円を描く。訳注Ⅱ後で聞いた所では、衛星放送受信用の室内アンテナと、形・サイズともよく似たものだったという、彼の寝室の窓のすぐ外に立てられた約百八十センチメートル位の棒の上部に取り付けられました。次に彼は、複雑に絡み合った何本もの電線をベッドのマットの下に敷きつめました。これらの電線群は、窓の外に取り付けた円板と連結されていたのです。

そしてこの大きな円板により波動がキャッチされ、電線を通じて就寝中のアダムスキーの所に送られました。これは彼の体調の回復にとても役立ったようです。

アダムスキーが亡くなった後で、アリス・ウェルズを助けるために私がビスタに行った時には、その装置はまだそこにあつて、寝室の窓の外にはあの円板が見えていました。

他に何か聞きたいことは？（と訳者に問いかける。）

問 そのベッドに寝たことは？

「ええ、ありますとも。ビスタに行った時、そのベッドで寝たことがあるんです。あの円板も電線もまだそこにあったんですけど、アダムスキーがそこにいてからしばらくたつていたし、もう効果はなかったですね。少なくとも私に対してはね（笑い）。

しばらくしてから、仲間の誰かがそれを全部取り外して車庫の中に持って

行っていました。

それから、向こうにいた時あのクリスタルも試したことがあります。その時は、クリスタルから来る凄じい波動の流れを感じました。それは明らかに怒濤のように押し寄せる波動で、それを胸に付けていると、何か自分がいい人になったような気がするんです。

そのクリスタルであんな体験が出来たなんて、それは私にとつてとても光栄なことでした。アダムスキーを知る人、及び彼に興味のある人にとつて、それはとても素敵な体験だと思うからです。ほとんどの人がそれに手を触れたり身に付けることも出来なくて、しかも見ることも出来ないのですから」

問 あなたとアダムスキー氏の過去生について、何かエピソードがありましたらお話し下さい。

「初めてアダムスキーに会った……これは今日講演の中で話した時ではなくて、後で私が彼と共に初めて仕事をした時のことです。彼は講演のためにニューヨークランドにやって来たのですが、その最初の日、彼は私達と共に時を過ごしました。その日、講演やあれこれのために二三日宿泊した、ボストンのあるホテルのロビーを私達は歩いていました。

そのロビーを歩いていた時、私の中であるフーリングが沸き上がってきたのです。アダムスキーに対する物凄

い親近感を覚えて、私はただうろたえるだけでした。私達二人が何か特別な間柄であるかのような、そしてそれはつい最近知り合ったのではなく、ずっと長い間友人同士だったかのようなフイーリングでした。

そこで私は彼にそのことをたずねてみました。私がどのように感じたか、そして私にはこの感覚が理解出来ないという話を話しました。そうでしょう？ だって私は、彼ととても長い間一緒にいたことがあるかのように、その時感じていたのですから。

アダムスキーは答えました。『ああそうだとも、私達は以前何度も一緒に仕事をしてきたのだよ』

でも、私達が一緒にいた特定の時代とかその場所については聞かされませんでしたし、自分のフイーリングや印象からもそれは分かりません。ただこれが本当のことだということは、自分がいつも受けるフイーリングと印象から、私には明らかです。

私達が一緒に仕事をしていた頃、毎日少しずつでしたが、このようなことは、二人の間で何度も話題になったものです。このようなフイーリングは、過去生で何度も、一緒に同じようなことをしてきた人からのみ感じられるものなのです。

アダムスキーが言うには、彼が今回地球で生きていた時に、彼を助けて共に働いた人々のほとんどは、過去生で

も一緒に仕事をしたことがあるということでした。そして今回ここでまた一緒にになったのは、より素晴らしいメッセージを再び人類に伝えるとともに、私達自身の間にあるカルマ的な相違点を、この人々と共に解決するためだったのです。

間 タイプライターの話をしていたいただけますか？ 皆さんお喜びになると思います。

「あ、それはいいわね。」

私達の地方に来ると彼はホテルに泊まり、私を含め彼を支援していた人々がそこに向いて彼を送り迎えたのです。そういう時に私は、自分のタイプライターをそのホテルの部屋に持ち込んで、彼の仕事を手伝いました。

ある日のことです。ミーティングが終わって部屋に戻り、私はタイプライターの前に座りました。彼はこのように、手紙や口述筆記、その他自分が家を離れていてもしなければならなかった仕事等の全てのタイプライチを、私達に依頼していたのです。

さて、彼は上着を脱ぎ、ネクタイとベルトを緩めると、両手をそのベルトに引っ掛けながら、二つのベッドの間を行ったり来たり始めました。そのベッドの裾には私のタイプライターが置いてあり、やがて彼は話を始め、私はそれをタイプしたのです。

するとまた、あのフイーリングが沸いてきたのです。私は彼に言いました。

『私達はこのことを何度もやってきたに違いありません。だって、こうしていることが私にとって、とても自然に感じられるんですもの』。でもすぐに私は、過去生でのごとく、ずっと昔のことを考えていたことに気づいて、間違っていたわ。そんな昔にタイプライターなんてなかったですものね』と言ひ直しました。

するとアダムスキーは自信ありげに答えたのです。『いや、過去にもずーっとタイプライターがあつて、私達はいつもこうやって仕事をしてきたんだよ。これは知っておきなさい』(訳注 彼の進歩した惑星群でも過去、現在の地球と同じような進歩段階の時代があり、その頃そこで共に過去生を過ごしたの意味)』

間 すてきなお話ですね。

「そうですね。もし私達が、自分の過去生がどんなだったかを知ることができたなら、それはとてもすてきなことだと思ひます。でも、それを知るのが難しいということには、それなりの理由があるのです。」

つまりそれは、私達は、今現在自分の身の回りで起きていることに注意を払う必要があるということなのです。私はいつも、この事実を受け入れようと努力して来ました」

間 金星や土星などの惑星では、建物や道路といった都市の造りがどのようになっているか、出来るだけ詳しく

お話し下さい。

「金星や土星の建物は、現在の私達のものよりも遥かに近代的で進歩したものであることは明らかですが、その建築法に関しては知りません。ただ、いわゆる人造の材質が使われていて、それは地球のものよりもずっときめが細かいということです。」

建物に関してはあまり聞いていないんですが、そうですね、最近の芸術的建造物などが彼らのものに近いのではないのでしょうか。そのような芸術的な外観を持ち、中は広々とした造りのようです。また、四角形等のように角の突き出した形よりも、円い滑らかな形のほうが一般的だそうですね。

道路に関してなら少しお話し出来ます。彼らがどうやって道路を造ったかは知りませんが、彼らの乗物は私達のものとは全く違うため、地球のような固い道路は必要とされません。

また彼らに個人所有の乗物は必要ありません。というのは、彼らの進歩した交通機関が完全に解放されていて、それを利用してどこでも行きたい所に行けるからです。

彼らの乗物は宇宙船と同じ原理で動きます。それは全く音もしませんし、私達の車のように道路上を走るのでもありません。彼らの乗物は宇宙船と同様、宙に浮いて移動するのです。

それらの交通機関は、地球のものと同様常に決まったコースを走り、その



撮影/松村芳之

コース沿いで乗り降りが出来ます。でも私達の固い道路とは違い、彼らの長い道路には美しい花や植物がぎっしりと植えられていて、彼らの乗物はその花の群のすぐ上を、宙に浮かびながら移動して行くのです」

問 何てすてきなんですか。

「天国ですね」

問 アダムスキー氏が、テレバシー訓練の中で最も好んでいた方法を教えてください。

「アダムスキーは本の中で、彼のテレバシー能力は最初たいしたことなくて、それをブラザーズがテストしていたというようなことを、簡単に書いています。でも私の考えでは、本の中で言っているよりも大きな能力を、当時彼はすでに持っていたと思います。」

同時にブラザーズの存在が、彼の能力開発訓練の助けとなり、その能力をさらに進歩させたのです。

アダムスキー氏は、この能力を発達

させる最善の方法は、何度も何度も練習することだと、繰り返し言っていました。

あのクリスタル・ペンダントもまた利用されました。というのは、それがブラザーズが彼にメッセージを送るときターゲットとなっていましたし、もちろんそれは波動を増幅したのです。

さらに、ブラザーズのテレバシー能力は、私達よりも遥かに優れていましたので、アダムスキー氏に対して、あるいは私達の誰に対しても充分な程に働き、彼らに接することが、彼の訓練の大きな助けになったと思います」

問 アダムスキー氏は、ボマロイ女史達と共にテレバシー練習をしたことがありますか？

「私達は常に何をするにも自由で、いつも自分で一番いいと思うことをしていました。そしてブラザーズは、彼らの出来る限りの方法で、私達を常に勇気づけ援助してくれていたのです。でもテレバシー開発に関する定期プログラムを持ったことも、特定の練習を共にしたこともありません」

問 想念観察を試みていますが、とても難しいのです。自分をいつも観察状態にしておくには多大なエネルギーが必要です。どうしたらそのエネルギーが獲得出来るのですか？

「ブラザーズと共に働いたり、彼らの仕事の手伝いをする時、私達は必要以上に頑張り過ぎないように十分に注意しな

ければなりません。特にテレバシー能力はゆっくりと進歩するものです。あなたがもし、持って生まれた特別な能力があれば、それは早く進むでしょうが、そうでなければ長い時間を必要とします。最善の方法は、徐々に確実に開発して行くことなのです。」

自分の想念レベルを上げようとして、多大なエネルギーを消費するというのなら、それは頑張り過ぎだということですね。こういった努力に対しては、ブラザーズが私達を援助してくれるのです。彼らは、一生懸命その努力をする人に対して、出来る限りの援助をしてくれるでしょう。

でも彼らは決して、あなたが急いだり、必要以上に先に進むことを助けたりはしません。なぜならば、それはじっくりと時間をかけて、あなた自身のペースを守ってなされるべきだからです。

だからといって落胆する必要はありません。私達はそれぞれ全く違う環境にあり、理解力や能力もそれぞれ違うのです。私達は、今置かれた状況の中で、自分が出来る最高の方法を用いれば良いのです。

アダムスキーが言っています。『私達は皆、永遠の存在なのです。私達が必要なのは、ただ忍耐のみです』この言葉を忘れないで下さい」

問 アダムスキー氏はGAP活動を団体化することを拒否し、国際GAPは

精神的な理想集団でした。彼がGAPを創立した当初の理念についてお話し下さい。

「これに関してはポイントが二つあります。まずGAPはとても穏やかに結び付いたグループだということです。このプログラムに参加した人々は、それぞれの地域において、それぞれが全く好きなように活動出来ました。」

様々な地域のGAPリーダーは、各地域で特に高い地位にあった人々が選ばれたというのではなく、いかにアダムスキーを助け得るかということが問題でした。でも、誰もが従わなければならない厳しい規則などはなかったのです。

一方、個々のグループの中では、ほんの少し規則めいたもの、あるいは慣例的な了解事等が必要だったことは認めるべきでしょう。しかし、全世界のGAPをまとめて統制するような厳しい規則や要求事等はありませんでした。アダムスキーが、団体を作ることや強くそれを主張したある協力者を認めなかったことは、よく知られている事実です。彼が全く団体を持たずに活動していたにもかかわらず、世界中に彼の協力者達が現れましたが、彼らはそれぞれ自分の国に適した方法で、自由に活動出来たのです。

アダムスキーは亡くなりましたが、彼が存命中、全ての協力者達が彼を尊敬し、彼の教えを求め、彼の指示に従

いました。彼がいかなる団体も持たなかったのに。

そして彼の死後、今なお世界中で、彼の協力者達はその活動を推進しています。そこで、アダムスキー氏に代わって核となるべき存在がもちろん必要となるでしょう。私達の今置かれた状況は、アダムスキー氏がいた頃とは全く違います。

協力者達の多くは、この問題に関する私の考え方に賛成しませんでした。このことも団体が存在しないという良い例になるでしょうね？

しかし同時に、もし私達が活動する上で、ほんの少しの取り決めや了解事もなかったとすれば、今の日本GAPは存在しなかったでしょう。

ここで私達が必要なのは、今この地球上で考えられているような団体や意識ではなく、宇宙の法則に従って私達すべてが賛同し得る、普遍的真理なのです。

たとえば、生命の源である創造主が存在すること。誰が何を信じようと、私達すべてが兄弟であるという宇宙の法則等です。

このような真理を核としたものであれば、それは良い団体ということが出来るでしょう。私は、全員が従わなければならないような、これ以外の規則・規制は必要だと考えるのです。ここが、私と他の協力者達との間で意見の不一致を見たポイントだったと

思います。彼らは特定の規則・規制を持った団体作りを考えました。でも私はそうは考えなかったのです」

問 アダムスキー氏の死後、何かテレパシーを受けたことがありますか？

「私は受けていませんが、彼の死後アリス・ウェルズが言ったように、彼は金星に転生していると思います。

アダムスキーとアリスは、どちらもとてもテレパシー能力が豊かでした。

二人は何度も過去生で一緒だったことがありましたが、テレパシーを用いてお互いにとても良く意思疎通が出来たのです。

私の考えでは、アダムスキーが私達とのコミュニケーションを取ろうとしたとすれば、まずアリス・ウェルズを通じて行なったと思います。それが彼にとって最も簡単で安全だからです。

私個人に関して言えば、もし彼が何かを送って来ても、私自身それを受け取る程のテレパシー能力を身につけていたとは思えません。

彼の死後しばらくの間、アリス・ウェルズが多くのことを機関誌に書いていますが、それらはおそらく、彼女が何らかの形で、彼とコミュニケーションを取り、その結果知り得たものだという気がします」

問 スペース・ピープルの現在の活動についてご存じでしたらお話し下さい。

「それは分かりません。私が知る限りにおいて、アダムスキーが生前一緒に働

いたブラザーズと私達との間の直接のコミュニケーションは、現在なされていないと思います。彼が言っていました、もし私達が彼らと接触していたり、何かメッセージが送られて来ている時には、明らかにそれと分かる何かが表示されるということでした。

多くの人々がスペース・ピープルとのコンタクトを主張してきましたが、これまでに、アダムスキーと共に働いていたブラザーズが今もなお私達に接触していることを示すメッセージには出会っていません」

問 日本人が今後、特に注意すべき点は何だと思われませんか？

「今の段階で、すでにあなた方はとてもよくやっていると思いますよ。私の考えでは、極めて近い将来に、日本はアメリカがこれまで果たしてきた役割の多くを引き継ぐことになるだろうと思います。

自分達の行く先を明確な形で予想出来る人は、どこにもいないでしょう。

ただアダムスキーがもしここにいたならば、彼はあなた方にこう言うと思います。『わたしならば、こうしたいと考えるよりも、こう出来るのだと常に考えます』」

最後に、私が個人的に感じていることをひとつお話ししたいと思っています。これはアダムスキーとは特に関係のないことですが、あなたの方にも興味のあることかも知れませんので。

ここ二三年、久保田氏と私の間では何度も何度も話題に上ったことなのですが、ニューイングランドという土地に住む私自身の血の問題です。

ニューイングランドは、アメリカ合衆国が出来上がる頃、ヨーロッパやアジアの各地からやって来た入植者達が最初に上陸した土地です。様々な国の人々が集まった結果、現在のニューイングランドに住む人々の多くは、いわゆる混血種なのです。

私の家族を例にとると、父方だけでもイングランド、フランス、スコットランド、オランダ、アイルランドの血が混ざっています。つまり私は、典型的なニューイングランド・ Yankeeなのです。

さて、最近私は日本の歴史を少しばかり勉強しました。それによると、大昔に、もちろん合衆国の出来上がる遙か前のことですが、日本の海岸にも多くの人々がたどり着き、上陸したという事です。私の読んだ本には、それはあまりにも遠い昔の出来事なので、彼らの全てがどこからやって来たのか、日本人達にも分からないと書かれてありました。

さて、日本人とニューイングランド・ Yankeeとの共通点に気づかれたでしょうか？

このことから、私とあなた方とは特に密接な兄弟・姉妹の関係にあるような気がするのです」

The Amazing Traces of the Venusian Saucer
Discovered by Japanese GAP Team in Desert Center!
by Sumio Ando & Hachiro Kubota

デザートセンターで 円盤着陸痕跡発見！

日本GAP調査団による歴史的な大発見に関する報告

① 安藤澄雄

昭和六十三年十一月十九日(土)、昨日とは打って変わって快晴の成田空港から、久保田八郎先生を団長とする日本GAPデザートセンター調査団は、

▲成田空港にて。左より久保田八郎、篠芳史、安藤澄雄・博子・汐南、遠藤由貴子・昭則、田中正、松村芳之。

撮影／松村芳之

シンガポール航空12便で米ロサンゼルスへ向けて飛び立った。

メンバーは篠芳史、田中正、遠藤昭則・由貴子夫妻、松村芳之の各氏、そして私と妻・博子、娘・汐南から成る総勢九名の調査団となった。

この調査旅行はもともと久保田先生の発案によるもので、先生の計画を聞いて最終的にこの顔ぶれとなったわけである。

事前に開かれた説明会で久保田先生は、この旅行の第一目的は一九五二年十一月二十日にデザートセンターでジョージ・アダムスキーが金星人オーソンと会見した正確な位置を調査することであり、決して物見遊山のものではないことを強調された。そして真剣で、しかもリラックスしたバランスのとれた想念でスペース・ピープルに呼びかけるようにと指導された。

確かに私も過去数回の渡航体験からいかに人間は視覚に惑わされやすいかを身をもって実感していたので、改めてこの旅行の意義を自分自身に問い直し、全感覚を常に自分の内部と上空に

向ける決意を新たにしたい。

機上、私は今までになかった自分を意識していた。いつもよりも頻繁にスペース・ピープルの存在を感じていられるのだ。これは私自身が進歩したというよりは、同行の方々の高い波動の影響によるものであるようだ。何年もの間、GAPという同じ活動の中で親密なおつき合いをいただいている方々が周りにいるという安心感と一体感が、私に何らかの変化を与えていたに違いない。

日付変更線を越えて、ロサンゼルス空港に降り立ったのは同じ十九日の午前十一時であった。そしてひと通り市内見学をした後、市内のホテルに投宿し、翌日に備えて就寝する。

輝く物体が出現

明けて二十日。七時に起床。快晴。三十六年前のこの同じ日に起きた素晴らしい出来事を祝うかのような美しい青空が窓外に広がる。上空に向かって歓喜と感謝の想念を送る。

九時五分に小型バスに乗り込む。久保田先生から「全員の心を一つに調和させ、スペース・ピープルにテレパシーで呼びかけ、あるいは受信をしなから行こう」とのご挨拶がある。他の方々の表情も輝いている。きょうは素晴らしい事が起きるといふ確信が湧いてく

る。アダムスキー全集第一巻「宇宙からの訪問者」第一部の中の、アダムスキーが金星人とコンタクトした記事の部分をコピーしてきたので、再度目を通し、距離や位置、その他の細かい点を確認する。

車窓には広大なアメリカの光景が流れるように映し出されるが、今の私の興味を引くものは何もない。それよりも目を閉じて心を空に向けている方が落ち着く。上空で見守っていて下さるに違いないスペース・ピープルと一体化した気持を起し、一緒に私たちの車を見下ろしているイメージを描く。車内はおだやかな楽しい雰囲気になっている。みんなもきつとスペース・ピープルのことを思っているのだろう。

十時頃、右側に座っていた松村氏と私の妻が、キラリと瞬間的に輝く物体を見たという。松村氏は二回目撃したようだ。確証はできなかったが、UFOのようなフレイリングだったと妻が言っていた。さらに十時半頃から一時間ぐらゐ、Kの筆記体のような割目のある雲が左側に浮かんでいた。これを見た瞬間、それが久保田先生の姓の頭文字のKとよく似ているのに気づいたが、何か意味があるのかもしれない。この頃からいろいろ不思議な印象を受ける雲が現れ出した。

十一時三十分には小休憩を取り、十二時十分にデザートセンターに一番近い休憩所で昼食をとった。田中氏の古く



からの知人で米在住の芦田殉子さんご夫妻にぜひお世話になったが、このおいしい和食弁当は日本料理専門家の夫君の調製になるものである。

歴史的大発見！

肉体にも十分な活力を与えたところで再び車に乗り込む。目印の地点まで来たところで先生の案内で進んで行く。午後一時半過ぎに遂に昨年訪れたあの山が見えてきた。先生が指示した地点でドライバーは車を止めた。様子を見ながら少し車を移動させたところで降りる。外は思っていた程寒くはなく、むしろ少し暖かいくらいだったが、念のためにジャンパーを持って出る。

期待に胸をふくらませながら歩き始めたが、実はここからが大変だった。

詳細は久保田先生の手記をお読みいただくとして、とにかくあちこち歩き回って、ようやくコンタクト地点にたどり着いたのは四時過ぎだった。六十二年八月にも来たのだが、人間の（いや、私だけかも知れないが）記憶が意外に曖昧なのに驚かされる。四時半に記念撮影をして、少し辺りを見回したり写真を撮ったりしたあと、一同で三十六年前の円盤着陸地点を探すことになった。

ここで一つの「事件」が起きた。私は前述のとおり『宇宙からの訪問者』のコピーを持参していたので、その中

▼下の写真はパロマー山腹のパロマー・ガーデンズ。昔アダムスキーが住んでいた場所。

撮影／久保田八郎

のコンタクト地点の写真と、今自分が立っている場所や周囲の風景とを比較してみたが、どうしてもわからない場所があった。それは円盤が着陸した地点とその周辺の様子である。それがわからぬまま車に戻ってしまうのは個人的に非常に残念だった。そこで田中氏に遅くならない程度に辺りを見てから帰ることを告げ、やはり同じ気持ちだったのか、篠氏と二人で大急ぎあちこち走り回ってみた。しかし納得のいく風景は見つからず、だんだん暗くなってきたので道に迷わないうちに車に戻ることにした。

戻ってみると、意外にも他の人たちはまだ帰っていないかった。空には星々が輝き始めている。何があったのだろうか？ 辺りはすっかり暗くなっていたが、月明かりを頼りに篠氏がみんなを探しに出かけた。私は車に残って双眼鏡で暗闇に目を光らせたが、不安がつる。やがてかすかに声が聞こえ出し、双眼鏡の中にもうつすらと白い人影が映り出した。思わずぼっとする。

無事帰って来たみんなの話聞いて私は愕然とした。何ということだ、私があれば探し求めた円盤の着陸地点と痕跡を見てきたと言うのだ！ これはものすごい大発見だと驚くと同時に、久保田先生について行けばよかったと



後悔の念が全身を包み込む。

全員が車に乗り込むと、篠氏が「先生、おめでとうございます」とお祝いの言葉をおっしゃった。私はハツとした。篠氏にしても残念な気持ちに変わりはないうであらうに、その気持を見事にコントロールしている。私は自分の事だけを考えていた自分を反省し、やがて落ち着きを取り戻し、素晴らしいレッスンを与えられたことに感謝した。帰り道も上空から祝福されているフイーリングが続いていた。六時二十分ふと左手前方の上空に目をやると、明るいオレンジ色の光が輝いていたので、あれは星だろうか、それとも……と考えていると、五秒ぐらいいで突然消えてしまった。前の席に座っていた遠藤氏も同じ方向を見ていたので「遠藤さん、今を見ていましたか」と尋ねると、もう少し前から光っていたという返事だった。たぶんあれはUFOだったと思う。遠藤氏はこの時に限らず、訪米は初めてであるにもかかわらず、全日程を通して大体に冷静で、いつも上空と自身の内部の印象を受け続けていたようだった。さすがに東京月例会でテレビ練習の指導をされているだけのことはある。この旅行における遠藤氏の存在の大きさを感ぜさせられる。

渦を巻く雲

二十一日も快晴。今日はアダムスキ

ーが住んでいたパロマー・ガーデンズとパロマー天文台を訪れる予定だ。気分を新たに元氣よく出発する。

六十二年に訪れた時もそうだったが、今日も出発して間もなく左手に三〇四本の細い筋状の雲が現れた。遠藤氏も時々双眼鏡を覗いている。

ハイウエーを降りてオーシャンサイド市内に入ると、なぜか頭が重く感じられてきた。寝不足かなと考えていると、ハイウエーの出口を間違えたので引き返すという。再びハイウエーに乗った途端、頭痛は消えた。

十一時五十分、昼食のために四十分ほど休憩をとって、再びパロマー山を目指す。山道に入って来るとまたもや不思議な雲が現れ出した。特に、大地からエネルギーが噴き上げるように渦を巻いている雲が一時以上も見えていたが、これは遠藤氏も注目していた様子で、由貴子夫人に何かさやいていた。

夕やけの中に白い物体

パロマー・ガーデンズには午後一時三十分に着いた。ここを訪れるのは四度目であるが、回を重ねるごとにますますこの土地のすがすがしさ、素晴らしいさを感じられるようになってきた。

二十分間ぐらいここにいる、今度は山頂のパロマー天文台へ向かう。パロマー・ガーデンズにはその帰りにもう

一度寄ることにした。

天文台に一時間ぐらいいいて、暗くないうちに再びパロマー・ガーデンズを訪れようと、三時十五分に出発した。山道をくねりながら下りて行くと、左手遠方にきれいなオレンジ色の雲が広がっていた。「汐南ちゃん、きれいな夕やけだよ」と娘に話しかけると、他の人たちも外を見た。そしてまだ夕やけの時刻ではないことに気づき、樹木に邪魔されないところで降りて確認することになった。少し走ると、ドライブパーがこの道はさっき登って来た道ではないということに気がついた。天文台へ行く道は何本かあつて、登った時には六番道路だったが、標識を見ると七番道路を走っていた。

引き返しながら、さっきの「夕やけ」の見える地点で全員が降りた。各自カメラや双眼鏡を取り出して「夕やけ」の方を見る。まだ太陽はかなり高い位置にあるので夕やけができるには少々早いような気もしたが、たぶん遠方の海面に反射した太陽の光が赤くなっているのだらうということに落ち着いた。突然誰かが「確か久保田先生だったと記憶している」「あ、何か光ったぞ」と叫んだ。数個の白い物体が「夕やけ」の中の暗い部分を移動しているというのだ。私は急いで100ミリのレンズをつけたカメラを覗き込む。しかしその時はすでに消えていた。それでもそのままだ構えていると「あ、出てきた」とい

う声と同時にファインダーの中に白い物がチラリと見えたのですぐにシャッターを切った。絶対に撮ったという自信があつたが、帰国後現像してみるとあまり鮮明には写っていないかつた。かなり大きく映写しても白っぽい物がボーンと見えるだけだった。しかしながら、逆光の中の物体が白く見えるということは普通、考えられないので、あれは自ら発光している何物か——たぶんUFOであらうと思われる。

それにしても道を間違えなければこんな体験はできなかっただろうと思うと、上空から何らかの操作があつたような気がしてならない。

三時四十五分に車に乗り込み、四時十分に再びパロマー・ガーデンズに立ち寄る。しばらく散策を楽しむ。見晴らしの良い場所遠藤氏が印象を感じて立っていたので、私も試してみる。山頂の方向にスーッと抜けるような印象があるのでそのことを遠藤氏に告げると、反対方向にも抜けているということだった。そしてこの土地は両側に抜けているので円盤が通りやすいのだと話してくれた。アダムスキーはそのことを知っていてこの土地に住むことにしたのだらう。

それにしてもこの辺りは面白い雲が多い。遠藤氏が今度はハート型の雲が浮かんでいるのを見つけた。白い満月が美しい。

ずっとついていたUFO

二十二日は先生のアイデアにより、ロサンゼルスに次ぐカリフォルニア州内第二の都市サンディエゴ視察のために南下した。ガイドを兼ねた日本人ドライバーは出発した時から見事な知識を披露し、滔滔と話し続ける。運転しながら大丈夫なのだろうかと思うほどだったが、本人はすつかり慣れている様子だ。ガイド氏には失礼かと思つたが、私は説明を右から左に聞き流し、上空に想を送りながらフリーウエーのドライブを楽しんだ。

十時五分、右側に気になる雲を見つけたので右側に座っていた妻に写真を撮ってもらった。すると遠藤氏がその方向に銀色の光体を見たという。これは妻も確認している。そして遠藤氏の話によれば、我々がロサンゼルスを出た時からずっとついて来ていたということだった。後で妻から聞いた話では、この時の光体の印象と、二十日に松村氏と共に見た光体の印象が同じだということである。

予想以上の大収穫

サンディエゴ市内は時間の都合で車内から見学することが多かったが、とても美しい街並だった。できれば二三日かけてゆっくり歩きたくなるよ

うな独特の懐かしさを覚える都市だった。またシワールドではラッコを見ることができ、娘はとても喜んでた。こうして翌二十三日にはロサンゼルスを立ち、二十四日の夜、無事に帰国した。実質四日間という短い滞在ではあったが、今度の旅行の収穫は予想以上に大きかったと言える。特にデザートセンターでの大発見は長年活動を続けてこられた久保田先生にこそふさわしい素晴らしい贈り物である。この発見のお手伝いの一部を担うことができ

コンタクト地点と円盤着地痕跡を発見

②久保田八郎〈調査団長〉

昨年度調査行の失敗

昭和六十二年度日本GAP海外研修旅行「アメリカ東部西部・メキシコの旅」で、ロサンゼルスからデザートセンターへバスで旅行団が向かったのは八月六日である。一九五二年十一月二十日にアダムスキーが金星人と会見した場所を視察するため(本誌99号掲載記事「アダムスキーの大地とマヤの国へ」を参照)。

だがこのときは正確なコンタクト地点に接近しながらも失敗して引き返した。ひどい熱波のなかを歩きすぎて一同は疲労してしまい、探索する気力を失ったからだ。私たちを親切に案内し

たことはこの上ない喜びであり、お誘い下さった久保田先生には衷心より御礼申し上げたい。また六日間同行して下さり、私の素晴らしいお手本となつて下さった方々、現地で非常に親身にお世話いただいた方々にも言葉を越えた感謝を申し上げる。

そして最後に、全行程を通じて、いや、そのもっと前から私たちをご援助いただいているスペース・ビーブルの方々に感謝してペンを置きたい。

てくれたダニエル・ロス氏はバスを停める位置を間違えたのか遙か先へ行き過ぎたので、数キロを徒歩で引き返すことになり、そのために筆者などは疲労困憊の極に達し、座り込んだまま動けなくなった。

コンタクト地点が近いことを意味するケルン(石を積み上げた塚)が見つかったいるので、私が座り込んだ場所から遠くないという感じはしたが、如何せん、深い川の跡の左側(下流から見ても)の砂原にいたために、深さ三〜四メートルもある乾いた川床を横断することができず、加うるに猛暑で体力を消耗してへたばり込んだとくる。したがって川の右手の土手上的砂原を奥へ行けばよいという印象が強かったけれ

ども、そうするためには川に沿って下手へ行き、大きく迂回して川の右側を再度上流へ向かい、ゆるやかな登りとなった坂数百メートルの岩石と灌木の荒地を歩かねばならない。だがもう立ち上がる気力はなかった。

というわけで六十二年八月はむなしく引き揚げたのだが、六十四年の海外研修旅行「アメリカ南米宇宙ロードの旅」でまたここを訪れるので、その前に一度少人数で現地を踏査し、確実にコンタクトの場所を見つけておこうと思いたち、どうせ行くならアダムスキーがコンタクトした十一月二十日を記念日として選ぶほうがよろうというわけで、満三十六年ぶりの十一月二十日に現地行きを決行したのである。

違う場所と本物との大きな相違

しかしまた失敗しそうになった。今度こそは正しい位置に車を停めようと滴を持してロサンゼルスを出発し、途中で昼食をとりながら休憩したりしてデザートセンターのガソリンスタンド前を通過したのは一時五分だった。

このテキサコのガソリンスタンドはむかしからあったが、いまは建物が変わり、付近の道路も整備されて様子に変化している。「むかしから」というわけは、以前、カリフォルニアのピスタのグループに案内されて「コンタクト地点」なる場所へ何度も行っていたた

め、このガソリンスタンドを知っていたからだ。

しかしこのグループは全く間違った場所へ案内するのが常だった。なんとあればアダムスキーの『宇宙からの訪問者』（アダムスキー全集第一巻）五十九頁九行目に次のような記述があるからだ。

「このパーカー街道を約十七キロメートル行つた所で、道路わきに車を停めて、外へ出てしばらく様子を見ようではないかと私は提案した」

これによるとアダムスキー一行はアリゾナ州との州境にあるパーカーダムへ通じるハイウエーを十一マイル（約



撮影／松村芳之

十七キロメートル）行つたとあるから、地図で見るとガソリンスタンドの前進行して行かねばならないものを、ピスタのグループはどういうわけか、いつもガソリンスタンドから左折し、悪い道路を直進していた。これはイーグルマウンティンという小部落に通じる道で、パーカー街道ではない。だから現地の「コンタクト地点」と彼らがい

う場所も、アダムスキーの撮った写真Bと比較すると明らかに相違していることに私は以前から気づいていた。この「コンタクト地点」と今度確認した正確なコンタクト地点とは距離にして三十キロも離れているのだ。

それはともかくとして、それなら正確な場所へ案内してやろうというわけで、六十二年八月にダニエル・ロス氏が同行したのだが、標識のケルンを発見したもの、ここが金星人の靴の跡をつけた場所だ」という位置まで行けなかったのは前述のとおりである。

大砂漠地帯の徒歩行

だが十一月二十日もあやうく挫折するところだった。この最大の原因は「デザートセンターから十一マイル（十七キロメートル）」とアダムスキーが記述している点にある。私もロス氏も十一マイルという数字に固執しすぎていた。アダムスキーが十一マイルの所に車を停めたというのは何を起点にして十一

マイルとしたのか、それを考える必要があったのだ。

一九五二年当時、そこにガソリンスタンドがあったかどうかがまず問題となる。アダムスキーはガソリンスタンドから起算したとは書いていない。すると、もっと手前の「デザートセンター」という道路ばたの標識から起算したのだろうか。

結論からいうと、ガソリンスタンドから起算して十一マイルというのは遠すぎるのだ。結局、もっと手前でよかったのである。

しかし総勢十一名が乗ったワゴン車の運転をした人は、私がガソリンスタンドの位置から走行計で計って十一マイルの所に停めるようにと指示したのに十一・七マイルの所で停めたことがあとでわかった。

ここで下車した一同は左側の広大な不毛地帯へ入って行つた。私は六十二年夏にここへ来たときに撮った山並みの写真を手に持ち、それと前方の山々のスカイライン（輪郭）を見くらべながら同じラインの山を見つけようと歩いたが、全く見つからない。アリゾナ州寄りへかなり行き過ぎたということに気づかないのだからむりもない。

しかし、いくらなんでもわずか一年五カ月前に見た正しい位置のスカイラインが見つからないはずはない。私たちは岩石と灌木の点在する不毛地帯を二時間近く歩きまわったが、昨年ロス

氏夫妻が案内した方向の山々さえ見えてこない。ここはモハーベ大砂漠の一角。気温は東京の十一月下旬と変わらないので行動には快適だ。

時間は刻々と経過して太陽が彼方の大岩山の方へ傾いている。急がねばならない。昨年夏に行った川の跡さえ見つからずに帰国するわけにはゆかない。しかし歩けども歩けども昨年の山々のスカイラインは見えてこない。



撮影／松村芳之

ついにコンタクト地点に到達

こうなれば歩くのはやめて一同車に戻り、ゆっくり走りながら山々を眺めて見つけることにしようと話し合い、道路の方向へ各人バラバラに歩いて引き返すことにした。「必ず見つかる。絶対にあきらめないぞ」と私は信念を強化した。

しばらく歩きながら私はふと山々の方を振り向いて、手にした昨年の写真とを見くらべた。ピタリ！ 同じ光景が左手前方に展開している。ここだ！ 彼方にいた田中さんに呼びかけて写真を見せると、間違いないという。

さらに左手へ歩くと、あった！ 昨年見たケルン！ しかもだれがやったのか石積み真ん中に古い角材が建っている。

一同そばへ寄って欣喜雀躍する。こうなれば川の跡を見つかるのもわけはない。全員がまた山々の方へ歩きだした。

しかしどういうわけか、また川の左岸方向へ行ったので、迂回して右岸へまわり、坂を登って行くと、小さな砂利をしきつめたような地域があった。ここではるか彼方のハイウエーの方向を望見すると、道路の向こうの砂漠地帯の果てにかすかに山々のつらなりが見える。

持参したジョージ・ウィリアムソンの著書に掲載されている写真を取り出した。一九五二年十一月二十日、アダムスキーが会見した金星人が靴の底の

模様を砂につけたのを、六人の目撃者の一人であるウィリアムソンがしゃがみ込んで石膏をとっている光景の写真である。

これを眼前のはるか彼方の山々のスカイラインと比較すると、写真中の山々のスカイラインが完全に一致することがわかった！ 写真A。

しかも小さな砂利をしいたような地面を靴で払いのけると、下からきれいな砂地が出てきた。靴で踏みつけると靴底の跡がくつきりとつく。この砂利の地面は数メートル四方残っているだけで、他の地域は大きな石のちらばった地帯だから、コンタクト地点がここであつたことは間違いない。

円盤の着地痕跡も発見！

写真を撮影したあと、円盤が着陸した地点の探索を始めた。しかしアダムスキーが撮影した写真Bの馬の鞍状の地帯がどうしても見つからない。深い川をへだてた前方の山にそれらしい鞍状が見えるけれども、これは形が違う。だいいち、いくら金星人といえども肉体を持つ身で幅七〜八メートルの川を飛び越えて来ることはできない。

あちこちを探索しているうちに、全く意外な方向の意外な場所に驚くべき跡が残っているのを一同で発見したのである。地面に並んでいる石（複数）の一部分が見事な曲線を描いて白く輝



▶写真A 上の写真はコンタクト地点と思われる砂原を撮ったもの。下は一九五二年十一月二十日、アダムスキーが金星人とコンタクトしたあと、靴の跡の石膏をとっている写真。しゃがみ込んでいるのはジョージ・ハント・ウィリアムソン博士。上下の写真の横線で示した部分の山脈のスカイラインが一致している。ただし下の写真はもっと左側から狭角レンズ付きのカメラで撮影している。

上は久保田八郎撮影。下の撮影者は不詳。

いており、しかも白くなつた各石の表面が砥石でこすつたかのように平らになっているのだ。

「円盤のフランジの着地跡だ！」

私は大声で叫んだ。アダムスキー撮影の写真Bは、馬の鞍状のへこみ部分に黒い円盤が斜めに傾いて着地している光景が写っている。そして彼が円盤のそばへ行つたとき、「機体の向こう側は地上から四〜五十センチ離れている。そして丘の土手に接近していた。しかし丘が斜面になつていて、円盤の前面すなわち私に最も近い部分は、

地面から二メートルは十分にあつた」と述べている。

そうすると円盤は降下したときに、いったんフランジの一部が着地し、その回転によつて地面の石（複数）の表面が焼けて削られたのか、あるいは着地しないにしても四〜五十センチの至近距離のためにフォースフィールドにより石が焼けたかのいずれかだろう。

こんな不毛の人跡未踏の山中に、かくも見事な曲線を地面に残すとは円盤以外に考えられない。

しかもこれを発見した場所の近くに

またも一基のケルンがあった。そばへ寄つてよく見ると、まだ古びていない石ばかりで、頂上には古いタバコの空きカンがのせてあった。だれがこんな物を作ったのか？

私にはピンときた。遠藤昭則君もピンときたという。

いずれにせよ三十六年前の痕跡が残っていたとは驚くほかない。雨が降らぬ土地であるから石にほとんど変化が

生じないのは不思議ではないが、それにしてもこの痕跡にだれも気づかなかったというのは奇妙である。だいいち容易に気づかれないような場所である点からみると、スペース・ビープルが非常に賢明に配慮した上で事を運んだとは思えない。

厳然たる事実と宇宙のカルマ

今回の調査行で痛感したのは、一九五二年十一月二十日にデザートセンタ

ーの岩山中、ジョージ・アダムスキーが六人の目撃証人の眼前で、円盤から出てきた異星人とコンタクトした事件はまぎれもない事実であり、しかも重大きわまりない意義を帯びた出来事であるということだ。本号の冒頭記事にも書いたように、地球は確実に別な惑星の人々に注目されているのであつて、それは地球の未来が良き方向へ向上するための援助そのものである。

また、地球人のなかの少数ながらも真に宇宙のカルマを持つ人の真摯な努力には必ずスペース・ビープルのひそかな援助と指導が与えられているというのも間違ひはない。こうした事実には全く気づかぬ人たちの嘲笑と非難を愛の微笑と理解とに変化せしめようと努力したアダムスキーの偉大な業績を、六十二年十一月二十日、コンタクト地点であらためて認識し、天を仰いで遙かなる惑星群に思いを馳せたのであつた。さらに痛感したのは、いかなる分野にせよ人間は正確な知識情報とテレパシクな感知力を持たねばだめだということである。これなくして自己の向上はあり得ない。

アダムスキーのコンタクト体験の詳細を知りたい方は、アダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』（文久書林刊）を読みたい。

今回の調査取材行でお世話になったロサンゼルス在住の芦田殉子さんご夫妻に深甚の謝意を表する次第。



▲写真B 1952年11月20日、アダムスキーがコンタクトした金星人が乗ってきたスカウトシップ（矢印の黒い物体）。この位置で日本GAP調査団は石が白く磨滅した曲線を発見した。ストロボを使用したために曲線が乱れて見えるが、実際は見事なカーブを描いていた。直径10m前後の円の一部分と思われる。撮影／松村芳之
▼調査団が発見した曲線。撮影／松村芳之



過去生透視法とその実例

●遠藤昭則

今生のカルマは過去生からの生き方の累積で決まる。
超能力者が語る人間の過去生の実態と透視の練習法。

「道」と一体化したときに、人間は全き自由を回復する。

普遍存在としての「道」は、かすかでおぼろである。捉えどころのないその底に、対象が潜んでいる。奥深く探りたいその底に、エネルギーが潜んでいる。そのエネルギーは不滅である。そこに確固たる法則がある（『老子』奥平卓訳、徳間書店）

人間は転生して多くの生涯を持つ

私達は多くの生涯を経験することによって生命の階段を上がってきている。そしてそれは一つの国だけとは限らず、その人の心の発達段階に適した国、環境へと転生して行く（生まれかわる）。転生とは私達の意識が一つの肉体から他の肉体へと移行することを使う。この太陽系内の惑星群には地球人と同じ人間が住んでいる。そこで、新しい

レッスンを受けるため他の惑星に生まれかわることも可能なのである。なぜなら私達の内部にある宇宙の意識は、またこの宇宙を生かしている宇宙の意識の一部でもあるからだ。そのため意識の中においては距離というものは障壁にはならない。わずかな秒で他の惑星に転生することが可能なのである。この宇宙にある無数の恒星の周囲を回る惑星群は私達の生命の学校である。この地球もその内の一つの素晴らしいレッスンのための学校なのである。過去生が見える人の中で、このことに気付かない人々は、宇宙の意識に対して地球しか見えないという片方の経路しか作っていない。そこで地球人の想念帯にだけ同調することによって空想と個人的興味の入り混じった低い次元での過去生透視しかできないのである。ところでなぜ私達は自分の過去生を覚えていないのだろうか。転生は一つ

の学校から次の上級学校へと進学するのと同じであるとアダムスキー氏は言っている。私達は上級学校へ上がっても前の学校のことを覚えている。楽しかったこと、辛かったこと、成功したこと等々。そしてそれらの思い出は一度に出て来るのではなくて、何かの拍子に、例えば前の学校のときに流行っていた歌を久しぶりに聞いた時等に少しづつ出てくる。ふだんは今いる上級学校の生活のことで頭がいっぱいであるのだが。

過去生もこれと同じである。私達はただ忘れていただけなのだ。生まれまもなく四つの感覚器官（目、耳、鼻、口）がはつきりと始めてくると、今の性を持った肉体だけが自分自身のだと思いはじめしてしまうのである。そしてその上級学校での制服を着て、今生で生活して行くための知識をつめ込まれ、過去生の記憶は置き忘れてしまうのである。

しかし私達は旧友に出会うと懐かしくてその頃の体験が思い出されるように、また生まれ育った場所に行くとか何かほっとすることがあるように、過去生のことにおいてもそういうことがある。過去生を思い出すにはこのような鍵が必要である。

湧き起こってきたフーリングを、つまらない観念で除いてしまわないで、敏感に感じ取ることでできる人は、そのフーリングによって開かれた肉体

の経路を通して自分自身の過去生の情報を読み取ることができるのである。

過去生を知ることの意義

過去生を知ることとは何の役に立つのであろうか。過去生が見える人に、「あなたは昔、これこれこういう事をしていましたよ」とか、「それであなたは今生でこうなのですよ」と言われると、一時的に胸がすつとして、何かを得たような気持ちになつてくる。しかししばらくするとそんなことは忘れてまた今までの習慣的な生活に戻つてゆく。そして時々、「あの時こういう事を言われたけれど、本当にそうなのかな」と考えたりする。だがそれだけである。

よく他人から苛められる人に「あなたは過去生で人を苛めたことがある。それで今生で人から苛められるのですよ」というような事を言う自称過去生透視能力者がよくいる。しかしそれが相手にとって何の解決になるのだろうか。そして苛められる人は誰でもそのような過去生を持つているのである。

私はそうは思わない。病気で苦しんでいる人に、「あなたは過去生でこれこれこんなことをしました。それで今生でこんな苦しみでいるのですよ」と言うことが本当に愛情ある援助になるだろうか。

そしてもう一度読者に問いたい。そういう人の過去生は皆、そうだったのであろうか。その人の今生での想念の使い方を無視してはいないだろうか。その他、考えられることはないだろうか。いつまでもこういう答だという考えを持っていては本当の過去生を見ることはできない。

私達は普段の生活の成功や失敗から益を得て生活を営んできている。そしてその中で自分を顧みて自分の能力を発見し、それを社会に生かそうと努力してきている。過去生についても同じである。私達は過去生の体験から益を得て今の生活をさらに良き方向へと持って行くことができるのである。また自分の能力や、ここに来た目的を改めて知ることによって社会の一員として人々へのより良き奉仕ができるのである。ここに過去生を知る意味があるのだ。

過去生と今生との関係

過去生でのレッスンと今生でのレッスンとは重要な繋がりを持っている。そのため過去生での極端なフィーリングが訂正されずに本人が気づかないで持ち越しているならば、その極端なフィーリングによって生じた想念が本人の身体に影響を与えるということもある。

このようなことが広く知られるよう

になったのは、エドガー・ケーシーのリーディングによってそのような症状を持つ人のことが広く紹介されるようになってからであろう。しかしケーシーのリーディングは催眠下で行なわれていたために幾分か頑張りすぎたような気がする。

アダムスキー氏は、激しい怒りや憎悪の念を持つて死ぬ人は、その最後の想念を持つて生まれてくると言っている。つまり転生というのは眠りと同じであり、前日の夜に怒っていると翌朝目覚めた時も怒りのフィーリングが残っていることと同じだと言っているのである。

『生命の科学』にあるように、想念は本人の肉体に良い影響も悪い影響も与えることができる。『ニューズウィーク』日本版八十八年十一月十七日号には、心が免疫系に影響を与えることが分かってきたということが出ている。

過去生の記憶は忘れていたのだが、持ち越された怒りのフィーリングによって、怒りや憎悪の念を再び抱いていれば必然的にその感情に関連のあるホルモン分泌腺に大小の差こそあれ、影響を与えることになる。そこでそれが極端になるとホルモン・バランスの崩れ等を生ずる原因になるのである。

したがって良きフィーリングが出てきたら、それによって怒りのフィーリングを解消して行くことが可能になってくる。それで良きフィーリングが重要になってくるのだ。

よく宿命論者のように、自分は過去生で暗いことがあったから今生でもこのうなのだと得意になっている人がいる。しかしそれは自分を変えて行く努力をしないで人に甘えている人である。過去生で良くないことをしていたことに気づいたなら、それを努力して良くしてゆく必要がある。そうすることによって過去生から持ち越された良くないフィーリング、つまりカルマを解消することができるのである。

また明るく建設的な良きフィーリングを持つている人々に接する必要がある。一番良いフィーリングを持つ人々は誰か。それはスペース・ピープルである。彼らの宇宙船も良き波動を放っている。そして重要なことは、彼らの良き波動を基準にして、

「私達もあのようになんか波動を持とう」という気持になることである。

彼らは私達のカルマの解消をしてはくれない。それは個人の問題であるからだ。そこで彼らは私達が進歩をするための援助はしてくれているのである。

過去世透視と過去生を思い出すメカニズム

私達が過去生を思い出すとすることとは、私達が内部にある意識からの情報にどれ程敏感になれるかということにかかってくる。なぜなら意識こそが転生する実体であるからだ。

それでは心は転生をしないのかとい

うと、この辺の説明はかなり難しいものとなってくる。心は意識からのメッセージの増幅器にすぎない。もしもレコードがセットしてあるステレオに耳があり、話す意志があるとしたら、スピーカーから出てくる自分の音を聞いて、スピーカーこそ転生するものであると思うかもしれない。なぜならそこにこそ外界に働きかけて自分が存在するのだという確認ができる部分があるからだ。

しかしスピーカーはレコードの情報を増幅しているにすぎない。レコードにこそ様々な情報があり、それが外に表現されていることに気づかないのである。しかしレコードの情報は針から電線を通じてアンプへ行き、また電線を通じてスピーカーへと伝わって行く。スピーカーはレコードと一体になっているとも言える。

だが変わってゆくのはレコードなのであるといつてスピーカーを疎かにしてはいけない。スピーカーがなければレコードは情報を表現することができないのだから。

意識と心の関係もこれと似ている。それぞれの会社によってレコード針やアンプ、スピーカーに特徴があるように、各人の肉体と心にも特徴がある。そして情報は意識から発せられているのである。ただ心とスピーカーの違いは、心は心だけで情報を流すことができるということである。そこで純粹

に見つめるならば、意識の情報が表現される心は、心の情報がそこに加わらなければ意識と一体であると言えるのだ。つまり私は意識なのである。

地球では心を第一に考える習慣があり、意識は遠くに置いて考えている。

この考え方は二千年来少しも変わっていない。キリスト教では神のためと言いながら、神と自分との間に距離を置いているのである。これではいつまでたっても神との一体化は得られない。これは地球の習慣ではあるが、そこには意識と心とが一体化できるということとを認めさせたがらない勢力が働いていることを感ぜずにはいられない。

そこで意識から過去生の情報を得るには、心の流す情報を選けて心を良い状態にする必要がある。よく、心を静めればそれで良いのだということを書いた本があるが、それだけではいけない。それではただ暗黒の世界が見えるだけである。心を良い状態に持つてゆかなくては何にもならない。

意識は全身の細胞に行き渡っている。そこで心を良い状態に持つてゆくにつれて、今までブロックされていた部位の細胞群の活動も活発になり始めて、もつと多くの情報が肉体から得られるようになるのである。

さらに、人と話している時に湧き起こってくる想念や、ふだんの自分の持つ想念の型によく注意していると、自分は過去生でこうであったのだろうと

いうことが分かってくるものである。

練習に入る前に注意すべき点

(1) 自分以外の力に頼ろうなどとしないう方がよい。自分自身である「意識」こそすべてを知るものである。

情報を待つことができずに、自動書記やウィジャ・ボードに頼ろうとする人がいるが、それは地球の低い想念帯に心を同調させているにすぎない。また意識の声や相手の波動を自動書記にしようとしてもいけない。それらは避けなければならぬ経路である。もちろん霊媒にも問題がある。このようなことを行なう人は、神経が過敏であったり、一度思いこむとのめり込む人であったり、感情がアンバランスであったり、今この場でできていることが良いことなのか良くないことなのかということ客観的に見られない人であったりすることが多い。そしてそのような人々に多いのは、何よりも社会常識的な考え方が欠ける点である。非常識な言動をなして平気であったりする。

私達は心を宇宙の意識の経路にしなければならぬ。それは前述のようなことによつて心が意志力をなくすこととは異なるのである。

(2) 次は催眠である。この中では退行催眠が過去生を思い出すこととしてよく使われる。これは被験者の記憶を幼児期まで辿らせ、さらにそれを越えて行

かせる方法である。しかしその催眠によつて今生の記憶の壁を越えたら江戸時代の様子が覚えてきたというようなことを被験者が言い出すことがよくある。これは生命の連続の法則を無視している。

また過去生がカニであったと自分では言いながら、その動作をしだす者もあるそうである。要するにこれでは本当の過去生を思い出せないのだ。動物は動物として転生してゆくのである。

(3) 自分で過去生はこうであろうと思ひ込みすぎないこと。例えば自分はある過去生である国のある地方に住んでおり、暗いことがあったと思つていたり、暗いそれは本当ではなくて、もっと明るい過去生であるのに、暗いものだとばかり思い込んでいるために現在の生活も暗いものにしてしまつていているというような場合もある。

また相手を見てちよつと思いついたぐらいで、一緒にどこそここの国にいたとか言うことも考えものである。本当にそれは正しいのであろうか。しばらくたつてからもう一度よく見直してみることがある。

(4) 過去生が見える人に過去生を聞いて

◆過去生透視練習法

過去生透視はオーラ透視と同じ感受能力である。それでは練習に入つて行こう。初めに相手の過去生を見ること

も、それは過去生のほんの一場面しか見えていないことを覚えておく必要がある。その過去生では良くない状態だったと言われても、その生涯すべてが良くない状態であつたということはない。今生において自分がこれまで生長してきたことを思い出してほしい。良い体験も良くない体験もしてきただと思う。そして良くない体験のときにも宇宙の意識が本人をそこから救い出そうとしている姿があつた筈である。これと同じように、過去生においても常に意識の働きがあつたことを忘れないでほしい。

過去生を透視することは過去生での結果面を見ることだけに終始してしまいがちであるが、今生での肉体を生かしている意識がその過去においてはその時の肉体を常に良き方向に向けようとしていたのである。心の情報に惑わされないことである。今生の肉体から見れば、過去生の肉体はやはり他人なのである。心は同じ意識が生かしていったとは信じられないのだ。それで過去生での顔が見えてこないのだ。とにかく意識という実体が不変不滅であることを知る必要がある。

から始めよう。

(1) まずリラックスする。そして自分の内部には、すべてを知る宇宙の意識が

あることを自分に言い聞かせる。

「私は宇宙の意識と一体である」とリズムカルに心の中で言い聞かせるように二、三分唱える。

(2) 目はあいていた方がよい。相手を見ながら、相手がこれまでに何度も転生してきたことを思う。

(3) 相手が話す過去生を聞こうという氣勢を起こして聞く姿勢になる。

(4) 相手の趣味、特技、才能、個性、環境等々を思う。

(5) 相手の顔を見る。次に目を。そして目と目の間を見る。すぐ前の過去生での顔は似ていることが多い。よく見ているとすぐ前にいた国の顔つきになっ

て見えてくる。
(6) 本誌103号にあるように、身体の広い範囲にあるオーラを見る。身体の横三十センチを見ている。断片的に過去生の姿が出てくるまで待つ。

決して焦らないように。相手はこちらに過去生を見てもらおうとしているのだから、絶対に大丈夫である。

「大丈夫。大丈夫。見えてくる。見えてくる」

この言葉を心の中で唱えよう。

何も見えてこない時は相手と話をしてみる。すると、パツと絵が出てくる時があるので、そんな馬鹿なと思って消さずに見ていること。はっきりとした映像のときもあれば、見えているのかいないのかよく分からないような映像のときもある。

(7) 見えた事柄を相手に言つて書き留めてもらう。その事についてあれこれと考えないように。

話をしながら見ていると、断片的に色々なものが見えてくる。それを見える度に報告する。相手も質問を簡単にしてあげるとよい。しかし、「えーっすごい」とか言わないこと。これでその場の雰囲気が変わり、見ようとしていた映像が吹き飛んでしまうことがあるからだ。

後述する『実例(5)』の場合は次のように見えてきた。

まず鍛冶屋が見えてきた。それを相手に言う。相手が何世紀頃かと尋ねてきたので服装や道具を見ながら大体何世紀だと言う。場所とは聞かれたので見ているとフランスの地図が出てきてアルプスに近い方に強いフィーリングが感じられてきた。そこでその地方だと言う。場所が分からない時は、この国であろうと思わない方がよい。自分の知らない国の時もあるのだ。

それから今の彼と同じフィーリングを持つ人物の胸のあたりが見えてきたので話す。というように行なつてゆくのである。

しばらくして彼の今生での友人と同じフィーリングを持つ人物が見えてきた。技術者である。何のだろうと思つていたら大きな鉄の車輪が見えてきた。それで彼は車輪を修理したり製作したりしていたのだということが分かつて

くる。すると心のスクリーンの暗いカーテンが開かれて明るいその当時の光景がうつすらと見えるような見えないような状態で現れてくる。それを見るようにする。

後でメモを見て流れを追つて行くと、そうか二人はこういうことで知り合つたのかということがはつきりとしてくる。

アダムスキー氏は『生命の科学』の中で

「一時に感受する印象または映像は、ある事柄のほんの一部にすぎないことを常に記憶することが肝要です。これは、絵と同様であつて、切られた個々の部分のすべてを見ることや、それらがどこにあてはまるかを知ることとはできません。絵は少しずつ組み合わされねばなりません。これには時間を要します。その絵の空白の部分あなたがこの世で蓄積した個人的な想念でもつて満たしてはいけません。それは個人的な性質を帯びているからです。また感受する印象にたいして絶対に疑惑を起こしてはいけません」と述べている。見えない所はそのままにしておけばよい。誰も咎めはしないのだから。

また見えたことや感じたことはありのままに言うことよい。それが正しい情報かどうかということはあとで見直せばよいのである。しかし相手に失礼なことは言わないように。

あとで見直す時には、その断片ごとに自分の中に尋ねるようにして見てゆくこと。その時に自分の中に湧き起るフィーリングを敏感に感じとる。

この見直しは一週間、一カ月後にも行なうとよい。そして三カ月後に前のメモを見ないでもう一度過去生の透視をしてみる。

(8) 本当に相手の過去生かどうかの判断は相手にまかせる。

「あなたの過去生はこうですよ」

「言い切らないように。」

「このように見えます」

と言つてあとはまかせる。なぜなら本当に知っているのは彼の内部にある意識なのだから。

自分の過去生を見る方法

(1) まず四つの感覚器官(目、耳、鼻、口)をリラックスさせる。目の力を目尻の方へと抜いて行く。その時に力の抜ける道を金色の筋としてイメージするとよい。次に鼻の力を鼻の前方へと抜く。次に口の力を両側へと、そして耳の力を上方へと抜く。要するにそれぞれの感覚器官がその方向に大きくなつたと思えばよい。これで肩の力も抜ける筈である。

(2) ゆっくりと腹式呼吸を行なう。

(3) 静かに過去生ではどうだったのだろうという気持ちを起こす。

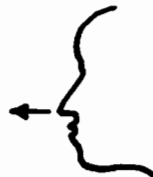
(4) 自分の才能、趣味、特技、想念の型



目と口の力を左右に抜く。



耳の力を上方に抜く。



鼻の力を前方に抜く。

- 等と思う。そしてそれらを消す。
 (5) (3)と同じ。
 (6) 過去にどこにいたのだろうと見ている。出てきた映像を覚えておく。物でも何でもよい。
 (7) 翌日また行なう。これが重要。

- (8) 過去生についてのことを理解できる親しい人に話してみる。
 (9) 話すことによってさらに多くのフィードバックや映像が出てくる。ただし、このように見えたという話をするだけにとどめる。
 (10) 話した時に相手の様子を見る。いやな顔をしていたら自分の印象を再考すべきである。
 (11) 見えた映像は必ず自分の過去生であると思ひ込みすぎないで、「そうかなあ」という余地を残しておくこと。
 (12) しばらくしてまた見てみる。そして前回書いたメモと比べる。前回と多少異なっても良い。しかし共通なものがあると思う。それだけをよく見てそれについて考えてみる。
- この(1)から(12)のことを間を空けて行なうにつれて真実の過去生の映像へと近づいて行く。しかしそれぞれは決して長時間行なわないことである。五分位でよいと思う。気楽に行なうてほしい。民族音楽や自分が生まれる前に流れていた各国の音楽を聞いたり、行ってみたい国に旅行に行くといふ。どうしてか分からないが懐かしさがこみあげてくることがある。それは過去生に関係していることが多い。
- また親しい人の過去生を見ることによって自分の過去生に気付くこともある。注意すべき点は、感情的に高ぶっている時とか、何かの問題で悩んでいる

時には過去生のことを考えないということである。そのような時には大抵自分に都合良く過去生を作り上げてしまふものなのだ。

さらに色々な国の歴史(ムーやアトランティスなど)を本で読んで幾分か知っていても、それらは参考にしないこと。本当の歴史はそうでないこともあり、また当時の地形、植物などが現在と同じでないこともあるのだ。本当のことは内部の意識が知っているのだ。

過去生透視の実例

(1) 二人の中学生

今から十二年前のことである。二人とも自分の身の回りをきれいに仕上げる女の子であった。しかし少し問題を持っており、仲間から離れて行動していた。二人は仲が良くなく、いつも口喧嘩ばかりしていた。一人は背が高く、色が黒く、デリケートな面を持ち、もう一人は背が低く、色が白く、行動的であった。しかし二人とも浅黒いオリではなかった。そこで二人の過去生について透視することになった。

「二人とも江戸時代のもそれ程身分の高いくない殿様に仕えていた女中であり、その頃殿様に気に入られようとしてお互いをけんあつていた姿が見えた。その後背の低い方の子はどこかの国へ転生し、後にアメリカに生まれた。そこでは女性であった。そして恨みの

念を持って生まれ変わり、今生でまた二人は出会った。解決されないカルマのまま二人は出会い、お互いに調和し合うレッスンの場が今生において与えられた。今生においても二人は異性に多大の関心を持ち、背の低い方の子は二十歳近くになるまで性格的に鬱積したものを持っていた」

(2) GAP会員のOさん

「イギリスのロンドンよりも南の方の街に住んでいた女性である。時代は分らない。近代である。律義な性格であり、子供達を集めて優しく本を読んでいた姿が見える。花が好きであり、きれいなオレンジ色の花畑が近くに見える」

(3) 会員のKさん

「中国が見える。人家はまばらである。私と私の妻と浜村氏がその時代にいた私と親しく語り合っているのが見えるが、それ以上は分からない。今度お会いしてゆつくりと見させて頂こうと思っている。

その後Kさんはアメリカへ転生し、奥さんもアメリカに転生して良き家庭を営み、その後今生へ転生した」

(4) 会員のYさん

「中国である。奥さんも当時は男性であり、革命を志す同志であった。家は貧相であり、生活はかなり苦しかったようである。上着は今の人民服とは異なっている。ボタンの付け方が違う」

(5) 友人の林陽氏

潜在脳力を開発し、願望実現を早める奇跡の音楽

この音楽を聴きだしてから 願望が次々と実現し始めた

アメリカで各界から熱
狂的注目を欲びる常識
を超えた奇跡の音楽

「スピリチュアル・ミュージック」、
「ニューエイジ・ミュージック」と呼
ばれる不思議な音楽が遂に日本へも
上陸しました。このスピリチュアル
音楽に関しては、日本でもニューサ
イエンス関係の書籍や一般の雑誌・
新聞でしばしば紹介されているので
既にご存知の方も多いことでしょう。
今から十数年前にウエストコースト
（米国西海岸）で湧き起こった、意識
と物質を同一の次元でとらえようと



●記憶力・集中力・創造力などの潜
在能力が曲を聴くことにより自然に
開発される。

●一二年の長期にわたって、これ
らの曲を愛好していると、超能力者
ヒーラー（心霊治療家）の典型的脳波
であるアルファ波とシータ波の
同時高レベル波形とよく似た脳波が
あらわれるようになり、その結果、鋭
い直観力——これがさらに高まると
未知予知や読心力などの超能力——
の持主になる。

●夜、寝る前に聴くと熟睡でき、疲
れが翌日にあまり残らず、朝の目ざ
めがとてさわやかになる。又、小
さな事にクヨクヨしなくなる。包容

するニューサイエンス運動、エコー
ジ思想等のニューエイジ革命の嵐
の中から生まれ出たスピリチュアル
音楽——。

この音楽の特徴をまとめると、

●作曲家・演奏者達が皆、30代前半か
ら半ばと若く、瞑想愛好家の上、幽
体離脱や超常現象を日常的に経験す
るなど、きわめて霊的意識が高い。
●今までの音楽のように単に曲を聴
いて楽しめるという点だけではなく
（もちろん音楽的に非常に魅力に富ん
だ曲が多く充分に楽しめるが）意識
を高め、潜在意識を刺激するという
「意識・無意識への作用」という事に
重点をおいて曲がつくられている。

アメリカでは脳力開発
に、願望実現に、幅広く
活用されている。

アメリカでは、これらのスピリチ
ュアル音楽の科学的な研究、神秘主義
的側面からの経験データに基づいて、
応用面での研究・実験もまたに行な
われていきます。現在のところ最も
利用が進んでいるのは教育の分野で、
サジェストベディア（超高速音速）
のバックミュージックとしてさかん
にこのスピリチュアル音楽が利用さ
れています。又、能力開発、霊性開
発を目的とした瞑想教室では、スピ
リチュアル音楽はもう空気同然の必
需品で、大脳の潜在脳力をめざめさ
せるのに著しい効果のあることが何
千人の生徒達を使った実験でも実証
されています。

又、成功を夢みるビジネス界のエ
リートの間でもスピリチュアル音楽
はたいへんな人気で、脳力開発に
ストレートコントロールに、又、願望
の早期実現のためにと
いろいろな使い方を
されています。



◇「スピリチュアル・ヒットUSA」ライブラリーの中の1曲ご紹介◇
曲名：TEMPLE IN THE FOREST
作曲演奏：DAVID NAEGELE
曲の内容：アコースティックピアノ、シンセサイザー、エレクトリック
ピアノ、自然音で潜在意識の波動をあらわす森のリズムが形づく
られる中を、「オーム」の神聖なマントラのバイブレーションが限り
なく広がってゆく様をみごとに表現している。
瞑想用に、又直観力・創造力開発に最適な曲の1つ。

★想像以上の効果にびっくり!!★

はじめのころは、何かおもしろい音
楽だナっていう感じでしたが、聞いて
いると心が落ちついてくるし、まあ車
の中で聞くとしらなや静かでない曲一
くらの印象がなかなかあったのですが、
しばらくして色んな異常な気づきは
じめました。低血圧で朝は二ガ手だ
ったのが、すぐ寝ざめがよくなった
と、生前中の仕事のノリがよくなくな
ったとか、仕事上の判断が正確になり
前みたんドジをやらなくなったとか。
それに、いばんの異常は、女の子特
に美人と話をするとどうも変なと
ころで緊張してしまふ話かしてさ
たりして、どうも恋下手だったん
ですが、それが最近じゃ前みたんく変

米国のスピリチュアル 音楽ベストヒット48曲

アメリカンライブラリー社では今
アメリカで最も人気の高いスピリチ
ュアル音楽のベスト曲、48曲（テー
プ24巻）の独占販売権を獲得し、「スピ
リチュアル・ヒットUSA」として

日本の皆様に頒布金方式で通信販売
いたしております。

「スピリチュアル・ヒットUSA」の頒
布システムを説明しますと、初回か
ら12ヶ月にわたって、毎月カセット
テープ2巻が届けられ、支払いは毎
回五、六〇〇円の送料三〇〇円。初
回二回目以降を間々、商品到着後
5日間の無料試験期間がありますか
ら、万、一曲が気に入らなければ自由
に返品できます。（巻のうち一巻の
みの購入の場合は代金は半額の二
八〇〇円プラス送料）又、途中で購入
をストップしたい場合は、所定のハ
ガキ又は電話で通知すれば、その時
点で購入を止められます。

商品は、2週間前後で到着します。
瞑想ガイダンス、願望実現マニユア
ル、脳力開発マニユアルがついてい
ますので、それぞれ別の目的に応じて
これらのマニユアルをご利用下さい。

第一回目の試験のお申込みは、
〒107 東京都港区南青山1-26-14
アメリカライブラリー社 U F 1 係
電話 東京 03(4717)5864

までハガキか電話で、住所・氏名・
年令・職業・電話番号を明記の上、
「スピリチュアル・ヒットUSA」
試験希望とお申込み下さい。

「十六世紀のフランス。その時の彼の父親は鍛冶屋のような所にいるのが見える。フィゴを使わないで金属を叩いて曲げたりしている。経済状態は普通であり、氏はその息子で心の強い人であった。」

場所はフランスのアルプス寄りの地方。氏はフランス人であるが、今のイタリア人のような黒い髪をしていた。肩幅が広くてがっしりとした体格であり、現代から見ればそれ程きれいではなくて厚い紙の關係の仕事をしていて、母親は見えない。彼と父親とは良い關係であり、父親をとて尊敬していた。出かける時も大きな声で挨拶をして行く光景が見える。仕事をする所まで彼は走って行っていた。周囲は当時の普通の街並である。

現在彼と親しいO氏は大きな車輪の修理や組み立てをする技術屋だった。たぶん父親の所に加工を頼み、それを買ったりして彼と知り合ったようだ。O氏は林氏を家族以上に頼っていた。その時の氏の墓は上に四つ、下に四つ程の部屋を持つ修道院の前五メートル位の所の花壇の向こうにある。それは現在では墓石である石が二十センチぐらい頭を出しているだけである。その両側にも数個の石が並んでいるが、皆二十センチばかり頭を出して残っている。O氏の墓が分らないので、林氏は当時随分と周囲の人から頼られていたようである。

数回の転生の後、彼はアメリカ五大湖から西南の方角にある州へと転生した。十九世紀後半から二十世紀前半である。その時は女性であり、身体が弱かった。そして大人になって数人のグループを作り、聖書と人生哲学のようなものをもとにした研究をしていた。

仕事は別に各人が持っていた。彼女の名前のスペルにはeの字が多い。お互いに励ましあう、なごやかな雰囲気である。外で話しているのが見える。その中の二、三人の人が今生で再びアメリカに転生してきている。

その人達はこれから氏と知り合いになるようである。それは誰だろうと、氏がよく知っているアメリカ人の名前を数人言ってもらったところ、その中にこれだという印象を感じる名前があった。尋ねると、以前日本に来たおりに彼の家に二、三日泊って親しく話した人だった。

(6)以前GAP会員だった女性のHさん「イエスの時代を見てくれと頼まれて透視したときのもの」

彼女はイスラエル人であり、イエスが大好きであった。イエスの周囲には女性が多かった。マグダラのマリアもその一人である。エキゾチックで、エジプト人の血が混じっていた。そのマリアにも親しい女性が多くおり、Hさんもその中の一人であった。そして愛するということを植物を愛することによって学んでいた。

近代では白人系の社会に男性として生まれた。暗いギャング団のような仲間と繋りを持っていたが、信仰だけは捨てられずに、心の中に常に葛藤があった。そして生まれ変わったら奉仕的な仕事をしようと思っていた」

林氏の友人

(やはりイエスの時代を見てほしいと言われて見たもの)

彼女はイスラエル人とローマ人とのハーフの子であった。美しい女性であった。髪の色は栗色。目は青味を帯びていた。中流の上くらいの家庭に育ち、そのため自由に外に出してもらえず、直接イエスの近くに行くことはできなかったが、遠くからイエスを見ていたようである。

イエスが処刑されるときも遠くの方においてそれを知っており、直接見ることはできなかったが、自分でそれらの出来事を感じ取っていた。かなり敏感な人であった。

現在の感情のカルマはこの時代に生じた。イスラエル人とローマ人とのハーフであったことが二つの影響を及ぼし、そのために感情の統合がなされなかったのである。元々は純粋なものを持っていたが、むしろそのために汚れた面もある。

イタリアに女性で転生したことがあり、レストランの賑やかな所へ出かけるのが好きで、よく当時の居酒屋に入りしていた。性格が気さくで男っぽ

いたために同性よりも異性の友人が多かった。

図を描く仕事をしていたが、あまりもうけていなかった。髪と目は茶色。花を愛し、身に付けていた。目は大きい。大好きな育ての親と暮らしていた。名前はERU□□□□と言った。

(8)GAP会員だったIさんと会員のNさん

「Iさんは十七世紀頃に小さな城を持つ貴族であり、思慮深い、しっかりとした身体であったが気は弱い方だった。しかしサディスティックな面があり、女性關係に注意を要する人であった。その感情はまだ解決されていない。他の生涯で水の關係で死んだことがあるが、よく覚えてこない。

Nさんは中国とソ連の間あたりの国で女性であった。白い服に赤い模様のついたブラウスを着、スカートをはいている。花畑で花を摘むのが日課だった。おとなしくて恥ずかしがり屋であった。

またヨーロッパにいたことがあり、事務的な仕事をしているのが見える。そこではイスに座って部下にきびきびとした口調で用事を言いつけているのが見える。

NさんはIさんが金持ちであった生涯において一緒にダンスを踊った間柄である。さらに二人は姉妹であったこともある。その時は二人で厳しい社会を強い意志を持って生き抜いていた。

(9)イエスの時代の久保田先生

シュロの木が家の中に数本壁際に並んでいる室内が見える。石造りの当時としては高級な家である。中は朝日が射し込むようになっていて明るい。裕福な家庭である。

先生は男性であり、サンダルのようなものを履き、白い、長い服を着ており、赤いヒモをボタンのように結んでいる(編注Ⅱ以上は春川氏の透視と一致する)。そしてアリス・ウェルズ夫人がポマロイ夫人のどちらかよく分からないが、その時代にも先生と知り合っていた。先生はイエスをよく見て、イエスと話し、イエスのフィーリングをよく覚えておられた。イエスがゴルゴタの丘まで歩いたエルサレムのピアドロローサ(歎きの道)まで来られている。

イエスとその周囲の人々

イエスは大きな顔であり、肩幅が広い。足は毛深く太い。髪は栗色から白の間のように見える。イエスの後ろには、しっかりと人々や物見遊山の人々が見える。しっかりと人々から放たれている波動は強く、堅固な意志を感じる。この人達の身体の特徴はというと、イエス以上に筋肉があり、遅い。

しかしその中には一人だけ背の低い人もいる。彼らはイエスの教えに共鳴してついて来た人々であるが、それ以上

上にイエスを助けるために他の惑星から転生してきたフィーリングをその人々からかなり強く私は感じる。物見遊山の人々の波動とは全く異なっている。そして優しく、感情も豊かである人々である。決して女々しくはない。むしろすごいと形容した方がよいような人達である。

ピラトは神経質な性格であり、ローマ皇帝をひどく恐れていた。しかし兵隊には怠け者が多く、彼はよいいにいらするばかりであった。当時のイスラエルは今よりも木が多く、きれいな鳥が飛んでいた。

イスラエル人の中には、ローマ兵との混血もいた。

イエスの母親のマリアからは高貴なフィーリングを感じる。土星を思う時に湧き起こる色と同じ色である。また父親のヨセフがイエスの処刑の場についてたかどうかの記述が聖書には出てこないようであるが、ヨセフについてはよく分からない。ここにイエスについての大きな謎を解く鍵があるのかもしれない。

イエスが十字架にかけられ槍で突かれる前、イエスの胸の横に微弱な白いオーラが見える。この時イエスは氣を失っている。イエスの身体は白くなって硬くて槍がさしにくく、二回ほど兵隊は槍を突き直した。そして槍は深部に達することはなかった。この時上空に宇宙船があり、イエスに放射線を浴

びせかけていたようである。さらに大気の状態を低くして湿潤にすることによって兵士達のやる気を低下させていた感じがある。

ゴルゴタの丘といわれる場所は現在二カ所あり、どちらが本物か今も議論の的になっている。一つはピアドロローサの頂上の丘にある聖墳墓教会の位置であり、もう一つはかなり離れた聖墳墓庭園と呼ばれている所の横にある丘である。後者には洞窟があり、そこが処刑後にイエスの遺体が置かれた場所ではないかと言われている。

八十三年に両方を訪れて私が透視してみたところ、後者に三人の男性の遺体が白い服を着て横に並べられているのが見えた。まん中が背が高く、両側が背が低く、一人は子供であったと思う。しかしイエスのフィーリングは感じられず、金持だった人々のフィーリングが感じられた。したがって聖墳墓教会の位置が本物だろう。

ピアドロローサでイエスの汗を布でふいてあげたというペロニカは、どのような人物か、そして本当にいたのかということとはよく見えてこない。しかし一人の人物がいたことは確かであり、彼女からは赤いフィーリングを感じる。スペース・ピープルもそこにいたのであろうか。

久保田先生は今生のすぐ前か、一つ前に他の惑星におられた。しかし私にはその光景は見えず、きれいな水色が

心のスクリーンいっぱい広がって見える。

他の惑星から転生してきた人の場合はこのようにきれいな色が見える。たぶん意識は私の心にその人の他の惑星での過去生の情報を送っているのだが、心がまだ理解していないために色となって見えるのであろう」

同質結集の法則

こうして過去生を見てくると、過去生で兄弟、姉妹であった人が今生でも深い間柄であったり、また過去生でお互いに心が通じ合っていた仲間が今生でも心の通じ合う仲間となることがよくある。これは同じ目的を持つ人同士は集まるといふ同質結集の法則が転生においても働いていることを示している。そして過去生は自分で実際に見ようとしないう限りはつきりと見えてくることはない。

「本当はどうなんだろう?」という疑問から、よし見てみようという気持ちが起こると、私達の内部にある宇宙の意識が過去生のメッセージを送り始めるのである。

そして過去生で親しい間柄であって、今生においてもそうであるとき、二人は互いに援助し合っているのだということ忘れてはならない。

以上で過去生を正しく知ることは人間の発達に重要なのである。

〈国内有力紙に掲載された科学記事を抜粋紹介。各記事末尾のカッコ内数字は掲載月日を示す〉

リユーマチの原因、みつけた

原因不明の難病、慢性関節リユーマチの発症メカニズムを研究している福岡大学整形外科の生野英祐医師（三二）らは、健康な人に比べてリユーマチ患者の細胞膜上には補体活性化抑制因子のDAFがわずかしが存在せず、これが発病の原因になっていることを世界で初めて突き止めた。

リユーマチは、本来異物から体を守るはずの免疫が、自分の関節組織を異物と誤認して攻撃する自己免疫疾患の一つ。この研究で「素質」の正体がDAFの欠乏であることが分かったわけで、DAFの数を検査することにより、その人が将来リユーマチになるかどうかある程度予測できると同時に、患者に人工的にDAFを補ってやるなど、今後予防や治療が飛躍的に進む可能性を秘めている（11・9毎日）。

火星旅行に一步前進

ソ連の有人宇宙軌道科学ステーション「ミール（平和）」のウラジミール・チトフ船長とムサ・マナロフ飛行士の二人が十一月十二日午前一時五十五分、同じソ連のロマンコ船長が「ミール」で昨年十月に作った最長宇宙滞在記録三百二十六日十一時間三十八分のレコードを破った。チトフ、マナロフ両飛行士は十二月二十一日、宇宙滞在一年の大記録を樹立し、同日、クレチェン飛行士と地上に帰る予定になっている。

地球と火星を往復するのに必要な飛行時間が一年間とみられたことから、長期間の宇宙飛行に対する飛行士の適応性の

問題が基本的には証明されたことになり、ソ連が初の火星への有人飛行実現を射程に入れたと言える（11・12毎日）。

一万二千八百メートル、熱気球高度世界新記録

中量級熱気球の高度世界記録に、埼玉県比企郡川島町鳥羽井一九〇の二、同町職員、神田道夫さん（三八）が十三日挑戦、熱気球コメント号で岐阜県一北関東のコースを飛び、群馬県赤城山上空で高度一万二千八百メートルの世界記録を達成した。神田さんは同日午前七時二十六分、岐阜県古城郡神岡町の流葉スキー場でLPGのバーナーに点火、高さ二十三メートル、直径十七メートルのコメット号をふくらませ、飛び立った。群馬県赤城山の上空付近で最高高度一万二千八百メートルに達し、さらに偏西風に流されて宇都宮市南部の田んぼに着陸した（11・14毎日）。

家屋内ラドンで肺ガン死年二万人

通気の悪い家屋には往々にして安全基準以上のラドンが充満しており、家屋内のラドンを吸ったために肺ガンになり死亡する人は、全米で年間二万人にも達している——。米公衆衛生局（PHS）と環境保護局（EPA）はこのほど中西部など七州で行なった家屋内ラドンの調査結果に基づき、こう警告した。

ラドンは土壌や岩石に含まれるウランが崩壊して放射性粒子に変質する過程で生成される無色透明なガス。戸外では拡散してしまうが、通気の悪いアパートや家屋では部屋の中にもって安全基準を超過場合が少なくない。米政府は「ラドン」によって誘発される肺ガンは公衆衛生上「最も深刻な問題のひとつ」として実態調査を続けてきた。

EPAでは毎年の肺ガンの死者のうち二万人はこうしたラドン吸引によるもので、家庭で一日の七五％を過ごす人が肺ガンになる確率は、一日にタバコを一箱以上吸う人と同じと推測している（9・21読売）。

ガン殺す人工たんばく

ガン細胞に対する殺傷能力を持つ生理活性物質インターフェロン（IF）と腫瘍壊死因子（TNF）の二つの遺伝子をつなぎ、抗ガン作用の極めて強い人工たんばく質を遺伝子工学で作ることに、米国のジェネテック社とインディアナ大の共同研究グループが成功した。

この人工たんばく質はIFとTNFを独立して与えたり、混ぜた場合よりも抗ガン作用が強く、将来のガン治療への応用が期待されている。遺伝子組み換え技術で作られたTNFとIFはそれぞれ一部のガンに臨床効果が認められたが、副作用が強いのが難点。米国ではIFが白血病の薬として販売されているだけで、TNFはまだ実験段階にとどまっている。

研究グループはTNFとIFを同時に授与すると、単独使用の場合よりもガン細胞によく効くことを実験的に証明し、二種類のたんばく質を融合させることを思いついた。このたんばく質はTNFとIFを同時に授与した場合よりも、ずっと効率よく、試験管内のガン細胞の増殖を抑えた（9・24読売）。

エイズワクチン有力物質を発見

エイズウイルス（HIV）が人体の免疫システムに与える影響を調べている米国立ガン研究所（NCI）分子免疫遺伝学―ワクチン研究部門主任のジェイ・ペルゾフスキー博士は、十一月九日、東京で

開かれている高松宮妃癌研究基金国際シンポジウムで、エイズワクチンの有力候補となる物質を見つけたと発表した。HIVの表面にあるトゲ（糖たんばく質）の一部で、HIVを攻撃する免疫細胞を活性化するという。

この物質は十五、六個のアミノ酸がつながったペプチドと呼ばれる物質で、水とよく結びつく部分と水をはじく部分から成っている。ペルゾフスキー博士は、このペプチドを人工合成し、HIVを直接攻撃するキラーT細胞およびこのT細胞を刺激するヘルパーT細胞に対する効果を試験管の中でテストした（11・10読売）。

エイズに新治療薬

国立予防衛生研究所と明治製菓の共同研究グループは、エイズウイルス（HIV）の成熟を止める新しいタイプの治療薬を開発し、試験管内の試験でウイルスのリンパ球への感染力を一万分の一以下にまで落とす効果のあることを確認した。米国立衛生研究所（NIH）と共同での臨床試験も検討しているが、同グループはエイズ治療薬として有望とみている（10・30読売）。

現代農業をしのぐ古代アンデス農業

南米アンデスのチチカカ湖周辺で発見された三千年前の奇妙な形の耕作地を米国の考古学者たちが現地で復元、耕作実験を行なったところ、アンデスの古代人は現代を上回る農業技術を持っていたことが分かった。この農法は化学肥料、機械を必要とする資本集約型農業と違い、要るのは人手だけ。金がほとんどからないうえ収量が多く、自然災害に極めて強いという（12・7朝日）。

★長野支部 UFO 写真展、大盛況

十一月五、六日の両日、長野市の長野駅ビル五階、信毎ホールで日本GAP長野支部はUFO写真展を開催。わずかに二日間にしては計約千名の入場者があり、素晴らしい成果をあげた。

この写真展には信濃毎日新聞社が大々的にPRし、支部でポスターを多数作成、市内各所に掲示宣伝した効果が大きかった。

会場ではビデオコーナーを設け、昨年長野県喬木村で撮影されたUFOビデオ、その他のビデオと、むかし久保田会長が監修した東宝ビデオ『これがUFOだ』を上映。黒山の人だかりができるほど好評であった。

また会場には写真展が始まる二日前の十一月三日、県内で巨大な母船を目撃した人が三名現れて博田支部代表に体験を洩らした。現在、同代表が取材中。実り多い写真展だった。写真。



★神奈川支部、月例会場を変更

神奈川支部は六十二年十二月より月例会場を従来の川崎市立労働会館から『横浜市民文化会館』七階七〇三号室に変更した。地下鉄『伊勢崎長者町駅』とJR『関内駅』より徒歩三分。大通り公園・石の広場前。毎月第三日曜日の午後一時より五時まで。横浜市中区万代町二四一七。電話〇四五六一八八一六五一。神奈川支部連絡先〇四八八八六六七一七〇四八（清水正代表宅）。

神奈川県内外の会員の方々は気分一新の上、国際都市ヨコハマの新会場に多数参加されたい。

★第十回山形仙台合同支部大会

今年度地方支部大会と皮切りとして第十回山形仙台合同支部大会が五月四日（三連休の中日）に山形県天童市の天童市中央公民館で午後一時より開催される。今回は本号記事『過去生透視

法とその実例』の筆者、遠藤昭則氏が出席し、久保田会長とともに質疑応答にあたるので多数出席されたい。詳細は本号49頁の予告を参照。

★六十四年度海外研修旅行

今年度の第十一回日本GAP海外研修旅行として「アメリカ南米宇宙ロンドの旅」を八月九日より二十日までの十二日間実施する。米西海岸ロサンゼルス、ラスベガス、サンフランシスコ、パロマー天文台、パロマー・ガードンズ住居跡、デザートセンターのコンタクト地点その他を視察後、南米ペルーへ飛び、リマ、クスコ、マチュピチュ、ナスカの地上絵、ティティカカ湖等、幻想とロマンに満ちた大インカ帝国の遺跡を見学する。詳細については

▼写真上はコンタクト地点が近いことを示すケルンのそばにて。下はコンタクト地点。夕暮れ近くで寒くなった。

撮影／松村芳之



本号41頁を参照の上、案内書を申し込まれたい。今年は好評で参加者多数が見込まれる。

★デザートセンター調査、大成功

昨年十一月十九日より六日間、日本GAP東京本部役員七名と会長の計八名（他に幼女一人）から成るデザートセンター調査団が渡米し、一九五二年十一月二十日にアダムスキーが金星人オーソン氏と会見したコンタクト地点を突きとめた上、さらに当時の円盤着地痕跡と思われる曲線を地面に発見。アダムスキーのコンタクトから満三十六年目の十一月二十日、快挙をなして全員二十四日に無事帰国した。詳細は本号掲載記事『デザートセンターで円盤着陸痕跡発見！』を参照。

UFOs and the Complete Evidence from Space by Daniel Ross

宇宙からの 完全な証拠

金星、火星、月に関する真相
●ダニエル・ロス／久保田八郎訳

連載第7回

第6章 月の真相を暴露する(続き)

日が沈むとすぐに薄暮が訪れる。暗闇が訪れるまでのあいだ、地平線下に沈んだ太陽がわれわれの大気を照らし出している短い時間があるが、それをわれわれは薄暮と呼ぶ。もし大気がなければ、薄暮の時間帯は存在しないだろう。太陽が地平線下に沈むや、そこは完全な暗黒となるはずである。

月の明暗界線、すなわち日に照らされた半球と暗い半球との境界線では薄暮があるのだろうか？ 好都合な観測状況のもとでは時折見ることができ

月の相(像)が薄い三日月のとき、その両端から約十度の範囲まで伸びている薄暮の光が、有能な天文学者たちにより報告されてきた。ファースツもまた、欠け行く三日月の明暗界線全体に沿って、暗い月面を縁取りしたように走る細い光線の観測を記録している。円弧状の薄暮の光が観測されるのはきわめて希である。というのは、月面を照らす地球照(地球が日光を反射して月を照らす現象)がこのかすかな明りを圧倒し、結局、地球自身の空の輝

きが肝腎なその月明かりを消してしまふからだ。地球からの観測で月面のかすかな薄暮現象を確認するのは困難だと認めざるを得ない。しかしながら、薄暮の「原理」は、月の陽のあたる部分で頻繁に観測されてきた。月面の濃い影の回りに半影が見えるのだ。この半影を形成する柔らかい影は、大気なくしては存在し得ない。実際、月の大気は、定説となっている古い理論が示すよりもはるかに濃密でなければならぬはずだ。

盲目の天文学者たち

一般天文学界が、月の大気存在を示す現象を何一つ立証できなかったのはなぜだろう？ いつものことだが、彼ら自身の出す結論は、自分たちの仮定に盲目的にしがみつくだけのものだったからだ。彼らは、月には空気が存在しないという自分たちの頑固な理論を「証明する」ための実験を考案し、その結果、お互いの成果を称え合っていたにすぎない。ファースツは、正統派月研究家たちは偶然にも月大気概念を隠すことに成功した方法を用い、その結果、空気は存在しないという結論をくだしたのだと、おもしろそうに書いている。月は望遠鏡で解明し得る距離の限界線上にあるのだから、石頭の理論家たちはそういった慣例にしがみつくことをやめ、客観的な観測記録にも

つと注意を払うべきだとファースツは言っている。

各種クレーター内の謎の現象

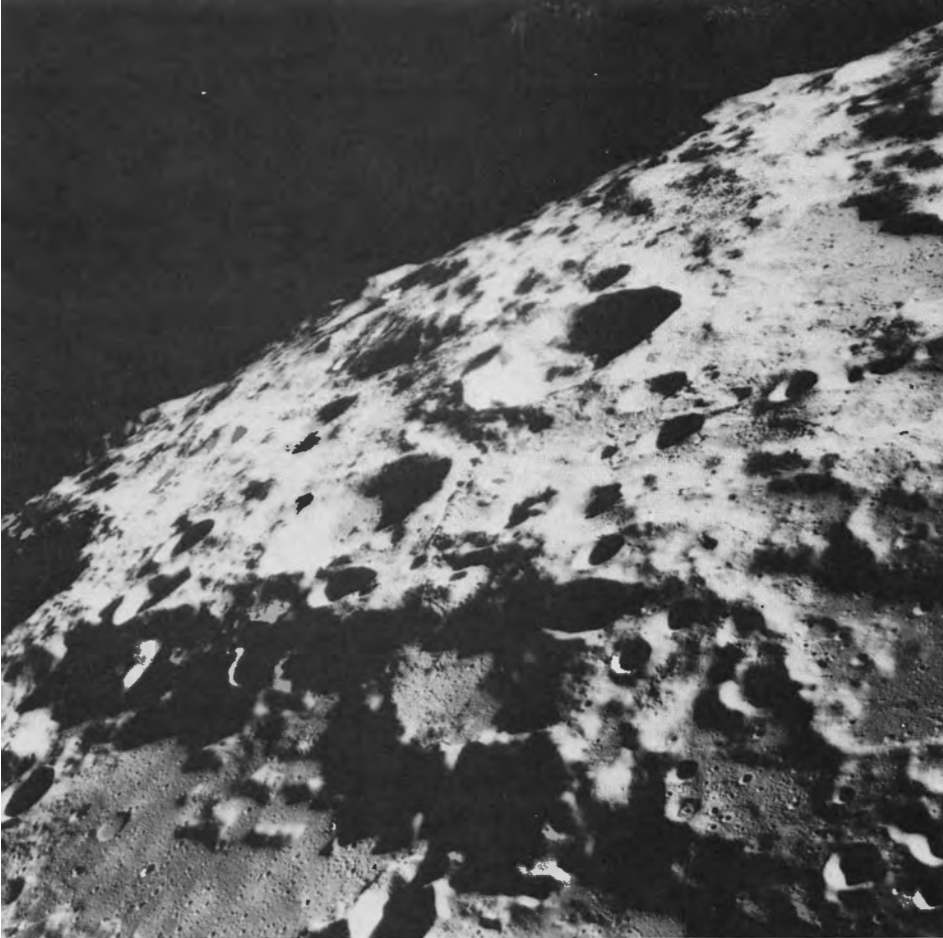
ジェサップとファースツは共に著書の中で、月のクレーター群内で目撃されてきた霧や雲、濃霧等の過去の天文学記録を多数引用している。プラトン(月面の北緯五十度に位置する)が、月の日の出時に立ちこめた濃霧や薄い雲(後で散り散りになって消えた)で覆われる様子が目撃されていた。ティモカリスとティコ・クレーターでは霧が見られ、一方シツカルト・クレーターの壁上では濃霧が波のように揺れていたことが記録されている。雲あるいは水蒸気群が時折クレーター群の底に、流れ行く影を落としていた。

霧や雲はまた、コペルニクス、ピカール、エラトステネス、リトロウやタレス、ガッセンディー等のクレーター群上空にも浮かんでいた。同様な観測結果は静かの海、虹の入江等でも数回報告されている。さらにジェサップは、神酒の海ほとんどいっばいに霧が満ち、それが遙かフラカストリウス・クレーターの中心部まで延びていた例を紹介している。ファースツは多くの例を詳しく説明し、それらの観測記録を完璧に登録すれば、膨大な資料が出来る上がるだろうと記している。

プラトン・クレーター内では多くの

●月の裏側の光景

一九六九年七月、アポロ十一号が、月の裏側の直径約四十八キロある国際天文学連合クレーター三二二号の地帯を撮影したもの。写真の中心は西経一六四度、南緯八度に位置する。太陽が低いために黒い影がシャープに出ている。この高度では月面のいかなる人工建造物も写らない。



謎めいた現象や驚くべき変化が、専門科学者たちにより観測されてきた。たとえ、月面で数々の活動サインを繰り返し見せ続けてきた他の無数の地域を無視したとしても、プラトン・クレーター一つを取り上げるだけで、月の生命とそこで活動するUFO群の存在を証明できるだろうとジェサップは語っている。月理学者バーカー、ピカリングそしてウィルキンズは、この重要なクレーター内で植物群の証拠を見つけたことにより、天文学者としての名声を確立したのだった。

多様に変化する濃霧や雲が、月の日の出後プラトンを横切り、東から西に広がって行く様子が頻繁に目撃されている。このクレーター内では、多様に変化しながら輝く光点群または自分で光を発する物体群などが時折動き回っているように見えた。円、四角、三角といった幾何学模様を形成する光体群が目撃されていたのだ。はるか一八八七年までさかのぼると、米、英、仏の観測家たちが、明るい光の群れがまわりのクレーター群からプラトンに向かって移動し、その壁面を滑るように降下してから、このクレーター底部に巨大な光の三角形を形成した様子を目撃している。

この不思議なクレーターでは過去十年ごとに説明不可能な出来事が記録されてきた。そして一九五三年九月には英国のある天文学者が、月のこの不可

解な地点を占拠して一等星ほどの明るさで輝くオレンジ・イエローの光を見たと報告している。ふたたび一九六六年には、赤みがかって燃えるように輝く光点群がプラトン内で見られた。それらは断続的に明滅する光の群れのように見え、絶えず動いていたという。

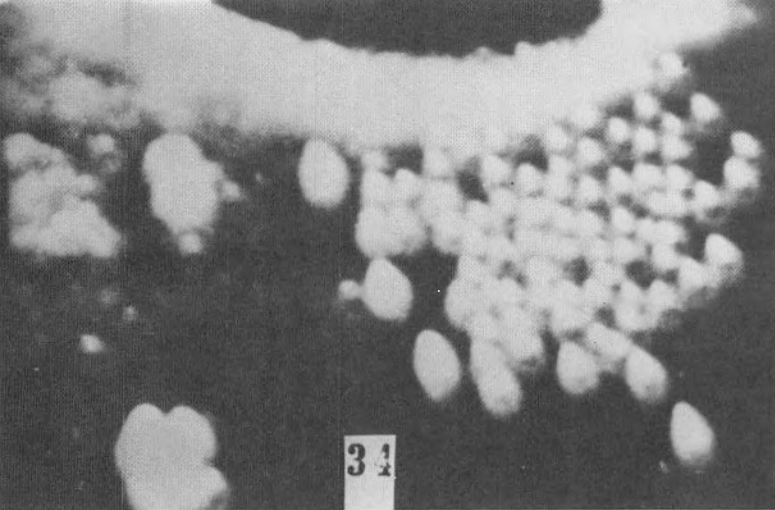
アリスタルコス・クレーターもまた不思議な光の模様や輝きを見せてきた場所だ。TLPすなわち「つかの間の月面現象」として公式に分類されているこれらの出来事は、この魅力的なクレーター内では日常茶飯事だとパトリック・ムーアは述べている。この地域で見られる光体群は、それらが現れると長時間持続することから、ある種の放電現象の可能性が一つ考えられるとファインソフは提言している。

一九五〇年三月、H・P・ウィルキンズ博士は、このクレーターの底部付近で輝く楕円形の光を目撃した。プロ天文学者ジェームズ・バートレット博士は、その三カ月後に同じ地点で、それとほとんど同じ光を見たと報告している。またウィルキンズ博士は、そのクレーター内壁の傾斜に沿って、日中（月の）、濃い色をした帯あるいは筋の群れ広がって行くのを追跡し、それらが密生した植物群であることを示唆した。

月には人間がいると考えられた

植物の問題を取り上げる前に、これまでの証拠を分析してみよう。濃霧、そして雲のような現象等が多くのクレター群や平原地域で目撃され、原則的に東から西に向かって移動していた。たとえ報告された現象群の内でも、あるものは埃の雲だったとしても、空中に浮かぶものはすべて何かによって支えられねばならないのだ。つまり、月には水蒸気や埃の粒子を支え得る気

▲アポロ宇宙飛行士が撮影した月面の綿雲の群れ。



体状の大気が存在するのだ。

この事実はまだ、流星現象、星や惑星の掩蔽、そしてかすかな薄暮現象等からも推測されていたことだ。ジュサップは、過去百年以上にもわたって優れた観測家たちが目撃してきた不思議な光の群れや輝きの多くは、UFOの起こす電磁的現象で、その発光現象は、宇宙船を取り巻くフォース・フィールドにより月のその地域の空気がイオン化されることで起こると信じていた。

ファースフはUFOに触れることを慎重に避けてはいたのだが、月の異常現象はかつて月人（月の住人）の工業活動だと考えられた、という一言を巧みに付け加えている。ファースフは常に科学一点張り、観測データや科学的論証を重視したが、この現象に関して一度だけ、月にいる火星入移住者たちの仕業だとも考えない限り、この月の不思議な現象群をじつと見続けるのはむづかしいことだった」というくだけたコメントをしている。たぶん彼は真剣にそれを提言したのだろう。読者の潜在意識にむかって――。

これまでに述べた現象群を起こし得る充分な密度の大気が月に存在するとすれば、それは月面環境に重要な一面を加えることになる。昼と夜の温度差は、過去に科学者たちが唱えてきたほど極端なものではないだろう。空気の移動により、常に温度の交流があるはずだ。それは明暗界線付近だけではな

く、各地域ごとの気温変化及び、各緯度における太陽光線のあたり具合の違いなどによっても引き起こされるだろう。月の夜の側では大気が暖かい毛布の役目を果たすので、全体の環境はこれまで考えられていたよりずっと穏やかなはずである。

月に植物が存在する証拠

ファースフとジュサップの二人は、地球から月の本当の色を見ることのむづかしさを説明している。実際、月はとても色彩豊かなのだが、それを見るにはかなり大きな望遠鏡、偏光計、二色性と単色性フィルター等を用いた間接的方法が必要なのだ。さもなければ、海面レベルの密度で最低八キロメートルはある地球の空気に阻まれ、月の本当の色はつきりしないか全くわからなくなってしまう。ファースフは、地球上で十〜十五キロメートル程度離れた山々を望遠鏡で眺めても同じ結果になることを比較例として示している。

たとえそこに褐色の樹木、常緑樹、むき出しの岩石や雪などがあるとわかっていても、地球大気の妨害で、遠くの間山々はほとんどその色を見せないのだ。しかし専門的手段を用いることで、月面の本当の色や色調が良く見えてくる。ファースフは三年間で数百回の観測を行ない、他の勤勉な研究家たちの結果とかなりの点で一致する結論を見

いだした。薄茶色からチョコレート色に至る茶系統のさまざまな色調がクレター群の内部に見られる。いくつかのクレター群内には緑の色合いの広大な地域があり、確かな周期によってその緑の色調が変化している。

この二週間（地球時間で）の周期は、日の出時のくすんだ黄緑色で始まり、次第に鮮やかな緑色、次にカーキ色、そして最後は月の夕暮れとともに、黄ばんだ色調へと変化する。静かな海は正に緑であり、蒸気のは暗緑色、そして嵐の大洋は柔らかな黄緑色である。青や紫、赤などの色もまた記録されていた。ファースフは、いくつかのクレター内で時折見た紫色はヒースの花の色に似ていたと告げた友人学者からの手紙についても触れている。また自分自身の観測結果からファースフは、夜明け前のさまざまなクレターを霜が緑どり、アペニン山脈の高峰には雪らしいものがかかっていたと語っている。

ファースフの偉大な業績

専門家たちの資料を集約してファースフは、月面の特定地域群における規則正しい周期的な色彩変化は、おそらく生物学的活動によるものであると推定した。そこでは季節的変化が明らかに存在すると彼は明言したのだ。それらの地域は濃い色へと変化しながら

広がったかと思うと、しだいに色あせながら縮むかまたは全く消えてしまい、後程またそれらの色が現れてくる。

このような色や色調変化はけつして月上空にある太陽の位置変化に伴う影や光量の減少などによって起こるのではない。フアソフによれば、その氣候と、常に降雨と蒸発のバランスをとっている「大気下層のもと、月面で何かが周期的に変化しているのだ。彼は生命が足場を築いている可能性を、断固として主張したのである。

月に生命が存在するという考えを天文学者たちが長いあいだ嘲笑してきたことに触れた後で彼は、クレーター群の内壁を周期的変化をもつて覆いつくす放射状の帯群や、エラストステネスとプラトンに見られる濃い色の斑点模様およびいくつかの顕著な緑色の地域等の起因を考えると、それらの地域での植物群の存在こそ最も理にかなった答のようだと言明している。この月大気存在の証拠はまた、太陽から放射される紫外線が効果的に遮断されることを示唆し、抑制を受けない紫外線はあまりに破壊的なため月では生命が存在し得ないだろうという、よく用いられる議論を否定するものだった（後の米国月着陸探査機サーベイヤー三号が、太陽の破壊的放射線群は月面に到達していないことを確認している）。

彼の書物は月に関する専門家及び大衆たちの望遠鏡観測による業績を高度

に分析・記録した不朽の科学論文である。彼の提示した証拠は容易に反論され得るものではない。この世界最高の科学的月理学者は締めくくりに述べている。「植物群が、たとえそれが高度に進化した種であろうと、月で成育不可能であることをみだす理由などありそうもない」。さらに彼は、植物の存在さえも完全には否定できないと付け加えているのだ。

月面にはUFOの活動があった!

M・K・ジェサップもこの二年前に書物を書き、天文学報告のすぐれた論評を提示している。その望遠鏡記録は多くの月面現象が鮮明に目撃されたものであることを示していた。彼は、著名なエラストステネスを含む多くのクレーター群の底部に濃い色の部分が数マイルも広がり、さらにクレーター壁に登ったり乗り越えているものさえも見ることができたと述べている。しかもそれらは影ではなかった。なぜならば、その時の太陽はすごく高位置にあり、影を作るのは不可能だったからだ。月の午後、それらの黒ずんだ部分はたびたび太陽の位置に従って影が伸びて行くのとは反対方向に動いたりもしたのである。ジェサップは、それらの色彩変化は植物が茂り枯れて行く短い周期と一致しているのだと強調した。彼は、月面の多くの地域における植

物繁茂の事実を主張したことで天文学者としての名声を得た男たちの本や記事を多数取り上げている。プラトンはそれを顕著に示した場所だった。しかし、われわれの教科書が変わることは全くなかった。そしてそこが問題なのだ。NASAの示した「証拠」が地球からの観測・研究を圧倒してしまい、もはや望遠鏡記録が注目を浴びることはなくなってしまう。しかしながら月理学者の示した望遠鏡記録の中になお真実は存在するのである。

ジェサップは、月専門家たちが一世紀以上にわたって観測してきた物理的变化、表面の一部が隠れる現象、光体群などに対して、より強い興味を抱いていた。つまりそれらはUFOとその活動の存在を示唆するものだったからである。

クレーター群の内壁や尾根にそって見られた明瞭な変化の中のいくつかは月面での鉱業活動を示唆しているようだった。平行して走る城壁様のものや幾何学模様の壁群は、建築中の巨大な建造物ではないかとたびたび考えられた。光り輝き明滅する光点群は、月面での知的活動を示唆していた。月面を横切って長い距離を移動する光体群が数多く目撃・記録されている。あるときは単独で、またあるときは群れを成していたという。

ある報告では五十個程の光る物体群が行列を組み、約一時間半を要して月

面を横切ったことが記されている。ジェサップはまた、ある地域の霧や雲だとされた月面の一部が隠れる現象のうちのいくつかは、一つまたは複数のUFOが、一時的にその地点を占拠していたものだと感じていた。プラトン内底部のかんりの地域（複数）を覆ってはすぐ消える雲（複数）の報告が数多くなされている。それらの記録には、そのうちのいくつかは自分から発光し鮮やかに輝いていたことが明確に記されている。白、赤、オレンジ、赤紫そして青などの様々な色彩が報告されていたのだ。

また、もっと長い期間存在する光点群もあり、いくつかの中型クレーター群内ではまっすぐな複数の線も目撃されている。これらの線の多くは対をなしており、ときには平行して走り、またあるときは交差しているのが目撃された。鮮やかに輝く光点群が、これらの線を一定の間隔で結びつけているかのように見えた。この月の不思議な現象は、月面で知的に統制された活動のシルシなのだとジェサップは述べている。

統制された活動は、もっと明確な専門用語に翻訳することができるよう。『宇宙旅行者たちの人工基地』と。

ガッセンデュー・クレーターはその重要な候補地だ。この底部には奇妙な幾何学模様の線群が存在し、そこでは無数の「つかの間の現象」が長年にわ

たり観測されてきた。

しかしジュエツプによると、プラトンこそ月面の生命、知能、そしてUFOの存在を示す真髓であるという。多様に変化する光体群の動き回る様子が目撃され、固定された光点群が数本の交差する線と一定の関係にあるということがわかっていった。こはまた、雲やその他の表面が見えなくなる現象が天文学者たちにより観測されていた場所、太陽の位置とは無関係に変化する異常な表面の暗がり、植物群の存在を暗示していた場所でもある。ここはスペース・ピープルが彼らの宇宙船を停めたり前哨活動を行なう上で最適な場所なのだろう。このような基地群が月面に見える側一帯に多数存在するのは間違いない、それはこの章の始めに述べた不思議なドーム群の出現とも直接結び付くのである。

二年間続いた 月面の光のイベント

当今のUFO目撃時代に入る前、予想もできなかった月面の光体群は初期の観測家たちを悩ませ、驚かせ、そして魅了した。この種のつかの間の現象群は、観測家たちによってまる一世紀にもわたり多数記録されていた。一八六九年に入るや、この不思議な活動を調査するため世界中の天文台が共同観測を行なっている。この特別研究を誘発したのは、危機の海内の奇妙な光体

群に関する多数の報告だった。連夜の観測で、一連の明滅する光体群は普通直線、または円や三角の幾何学模様を成していることが判明したのである。

この光のイベントは二年間続き、英国王立天文学協会は世界中の天文学者やさまざまな天文台が行なったこの不思議な光体群の観測結果を千六百件以上も収集している。詳細な観測図群によつて、この光体群には時折強烈に脈動するといった特定の行動パターンのあることが明らかになった。

この注目すべき月面のショーは一八七一年四月突然停止し、王立天文学協会の発見事は少し後（一八七三年）に、彼らの年次雑誌に発表された。二年間に及んだ研究の結論として彼らは、月面の光現象は、月に住む未知の人種が地球に信号を送ろうとした知的試みだと推論している。

これには驚くべき脚注が付く。光体群は危機の海で集中的に目撃されたのだが、後にこの同じ場所で、ジョン・J・オニールとH・P・ウィルキンズ博士により巨大な「橋」が発見されているのだ。

時がたち、われわれの空で多くのUFO活動が見られたことで、不思議な月のイベントはUFOや宇宙からの訪問者たちと結び付けられるようになった。いづれどおりの月観測中に、ある個々の天文学者たちは全く偶然にもそのときにその場所を見ていたことで、

月面上空を飛ぶ本物の宇宙飛行船を目撃している。

一九五四年十月十二日、エディンバラ天文台の望遠鏡をのぞいていたある天文学者は、ティコ・クレターターからアリスタルコス・クレターターまで一直線に移動する黒っぽい球体を見た。その距離の移動に約二十分をついやしたことから、その速度は時速九千六百キロメートル程だと概算された。同じ年の九月、二人の男が六インチ望遠鏡である物体を目撃している。これもまた黒っぽい球体だったと報告され、四十分後には北部のフンボルト海を後にしてまっすぐ上昇し、宇宙空間に消えて行くのを彼らは見たという。

月面を横切る黒い物体群の報告が数多くなされてきたが、この描写には重要な意味がある。というのは、同じような物体が表面付近を動き回っているところを目撃されたりクレターターを占拠しているのが発見されたときは、一般に明るい光を発する可燃上がるような光となつて見えるのだ。何が光るのだろうか？ 宇宙船自体が光を発するのではない。この発光現象は宇宙船のエネルギー・フォースフィールドが回りの空気をイオン化するときの必然的な結果である。この現象もまた月大気の存在を示しているのだ。さもなくば表面及び表面近くにいた物体群も、月大気圏外を飛んだもう一方の物体群と同様黒っぽく見えるはずである。

この章では、宇宙時代の初期段階での月に関するさまざまな知識を紹介し要点をまとめてきた。専門的な望遠鏡記録は、地球外生命を発見するためのまさに入り口までわれわれを運んでくた。われわれは文明社会として、その線を越えて真実を知る準備ができていたのだろうか？ われわれに過去の無知を捨て去る意欲があつたのだろうか？ 地球の権力者たちは、月の真実を知る権利をわれわれに与え、人類の知力を新しい方向に向けようとしたのだろうか？ われわれは宇宙の岐路に立つていたので。新しい知識と光の道へ進むのか、それとも太陽系の他の惑星群と離れ、疑問と暗黒の古い道を歩み続けるのか――。

V・A・ファーフは、月の大気、気候、そして周期的な植物繁茂等に関する科学的証拠、及び望遠鏡観測による証拠を提供した。ジュエツプは、月面UFO活動の決定的な専門記録を提供した。両名とも熟練した天文学者であり、望遠鏡による月観測史の権威でもあった。彼らの書物は、われらの宇宙の隣人に関する多くの真実を語った。生命の存在する環境がほぼ発見されようとしていたのである。

NASAが月に探査機や人間を送ったときに、これらのことを何も発見しなかったことはあり得るだろうか？ 彼らがすべてを目撃したのは明らかだ。いったいNASAはわれわれに何を信

じさせようとしたのだろうか？ あの百五十年間にわたって記録された望遠鏡による証拠が突然月面から消えてしまったのか？ もちろんそうではない。

第7章 アポロ月へ行く

アダムスキーの宇宙旅行

私たちはこれまで望遠鏡記録をもとにして専門的に推定された月の姿を見てきた。その根拠が初めて示された一九五〇年代のほぼ同じ頃、ジョージ・アダムスキーは、それと全く一致した月の姿を間近に眺めている。円盤でやって来た訪問者との一九五二年の会見（『空飛ぶ円盤は着陸した』日本語版『宇宙からの訪問者』第一部に収録）に続く一連の宇宙コンタクト体験の中で、彼はその特権を得たのだった。後で彼は説明している。

「乗らないかと誘われて私は喜んで同意しました。それにより私は大気圏外を見る機会を得たのです。私は自分で知り得る限りのことを学ぶ恩恵に浴したのでした」

彼は著書『宇宙船の内部』（日本語版『宇宙からの訪問者』第二部に収録）の中で、自己の体験の数々を詳細に述べている。実際、彼の書物はファースト

しかし、この完全なごまかしを陰で操っていたのはいったい誰なのだろうか？

とジェサップの本よりも二三年前に発刊されたのだが、彼の月に関する記述は、望遠鏡記録による結論と驚くほど類似したものだ。その円盤は地球を離れ大気圏外への小旅行に出发し、宇宙空間に浮かぶさらに大きな母船と合流してその中に入った。そしてその母船がさらにずっと遠方に移動したころアダムスキーは、その母船内の研究室に短時間案内されている。

その研究室内でアダムスキーは、接近した映像の伝達を可能にする装置類を通して月の表側の様子を見せられた。月ははるかに小さな天体であり、当然その密度は地球ほどではないものの、その月の映像は明らかに大気存在を証明するものだったのである。その研究用宇宙船にいたパイロットの説明では、地球の科学者たちが見てきたクレイター群内部の穏やかな空気の流れらしきものは、事実、薄い雲の影の流れであり、縁を越えた月の裏側の温暖地域上空にはもっと濃い雲が常に形成さ

れているということだった。

この宇宙人は、月は何の価値もない死の世界ではなく、実は十分に生命を保持できる環境であることを強調したのである。一定の大きさをもつ天体は、その内部からの圧力を押え得る大気を持つ必要がある、それなくしては粉々に分解し、宇宙空間から消え去ってしまうからだということだった。

月から六万四千キロメートル程離れたいたにもかかわらず、進歩した望遠鏡装置によりアダムスキーは、月の風景を間近に眺めることができたのである。常に地球に面した表側の月面は、米国西部の砂漠地帯とあまり変わらなかった。多くのクレイターは大きな谷間のようであり、表面を多数の深い溝が横切り、遠い昔の豊かな水の流れを示唆していた。これらの谷間を険しい山々が取り巻き、その側面には太古の水の流れを示す明確な形跡が存在していた。その山々の内部には今なお多量の水が存在することをアダムスキーは知らされた。

現れたかと思うとすぐに消えて水分を放出するかすかな雲が、アダムスキーがいくつかの谷間を見たまばらな植物群の成長を支えていた。この荒地を間近に眺めていたとき彼は、ある小さな動物が突然視界を横切って走るのに気付いたが、すでに大気存在を知り、植物群も確認していたので、それを見てもあまり驚くことはなかった。

一九五九年、ニュージブラルドルでの講演でアダムスキーは月の表側の様子をさらに詳しく述べている。数カ所のクレイター内には他の惑星から来た人々の建設した基地があり、その近くには居住区域があるはずだ。その基地を運営する上で当然多くの人々が必要とされるだろう。地球の辺鄙な地域でのわれわれの活動と同様、そこが灼熱あるいは極寒の荒地でも、月の人々は宇宙船の運行やパワーステーションを維持する必要がある。われわれが南極基地に人々を駐屯させているように、この月の前哨基地にも人々は必要なのだ。この事実は、二世紀にもわたって天文学者たちが記録してきた、クレイター群内部から発する奇妙な光の現象の多くを説明し得るものであった。

アメリカの六度にわたる月面着陸ではなぜ正反対の姿が示されたのだろうか？ この疑問を解くためにまずなすべきことは、月の地勢地図をチェックして彼らがどこに着陸したかを見ることである。

NASAは月の生命を知っていた

NASAは異星人基地の近くに行くつもりなどなかったのだ。彼らは常に、生命活動を示すクレイターや谷間から少なくとも百六十キロメートル以上離れた荒涼とした地域にのみ着陸している。平坦に広がる月の海（アポロ十

一・十二号)、不毛な平原(アポロ十四号)、古代の熔岩台地(アポロ十五号)、デカルト高原(アポロ十六号)、そしてトールスとリットロー間にある険しい山岳地帯(アポロ十七号)であった。

NASAはこれらの地点が魅力のない外れな場所であることを知っていた。NASAは生命を探す目的で月に行ったのではない。内部の計画立案者たちは生命の存在を知っていた。彼らは、それを証明し得る事実が知られて地球社会がそれまでの操られた考え方からいつきに解放されてしまうことのないよう警戒していたのである。

さらに異星人たちが、われわれの初めての月旅行を監視する目的で、その選ばれた荒野に現れる可能性があったため、念入りな事前対策が必要とされた。NASAが宇宙飛行士たちの活動範囲を特定の地域に限定するのは容易なことだったが、他の惑星の宇宙船の監視活動を制限することは全く不可能だったのである。しかしながらそれが目の前に現れても、大衆が目撃するチャンスは全くなかったのだ。宇宙飛行士たちが月面の生命環境やUFOの存在を証明する事実偶然遭遇しても、それは別な秘密の通信チャンネルを使っていた一部の関係者たちに知られるだけだった。

月からの生映像は八秒遅れで届けられ、そこに必要な検閲の入り込む余地

があった。これは発見のための旅行ではなかったのだ。大衆に見せられるべきものはすべて前もって決められていたのである。大衆が見たものは陰気で寂寥とした地形のみであり、当然ながら、月面に旗を突き刺した後いかにもかすかな重力と真空の中を飛び回る宇宙飛行士たちの姿だった。秘密主義者の作った宇宙探査の筋書で最も重要な点は、われわれに親しい生命体の存在を地球だけにとめておくことだったのである。

それでは、NASAがどのようにして、そこにあつてはならない物との劇的な遭遇を避け得る着陸地点を知るに至ったのかを、もう少し詳しく説明してみよう。

彼らとその前任者たちは、かつて大天文台で行なわれた月の秘密研究のすべてを指揮した。後の無人月探査では五機のルナ・オービターが月のほぼ全表面の撮影に成功している。四十キロメートル上空から高解像度写真が撮影された。そしておそらく、ずっと低い軌道からも撮影されたであろう。こうして月面の全域がかなり詳しく知られていたのである。しかし大衆や正統派科学者たちは、ただ予想どおりのものしか見えない少数の低解像度写真とともに眠らされていたのだ。

同時にNASAは、月面の異星人活動に関する過去のさまざまな記録類の研究を積み重ねていた。ある資料には

『月面現象報告の年代順資料』という名が付けられ、一世紀以上に及ぶ天文観測で判明した奇妙な光や雲の出現地点が網羅されていた。NASAはまた『月のまばたき研究』と呼ばれる独自の観測を行ない、おそらくその最新情報によつてそれらの地点を再確認していたに違いない。

米国政府と空軍はかなり以前から、UFOがなぜ地球を訪れるのか、そしてまたどこから来ているのかも知っていた。宇宙飛行士たちを焼けただれた死の惑星に送るのではないことをNASAが知っていたのは明らかである。しかし彼らは、その印象を茶の間の大衆に与えるための充分な下準備をしていたのだ。

高官が隠蔽した理由

すべてが危うかった。月の真実の姿が少しでも漏れればどういふ事態が起るかを高官達は知りつくしていたのだ。多くの、いわゆる権威者たちが一瞬にして立場をなくすだろう。天文学や欺瞞政治のみならず、正統派とされてきたすべての理論や偽善宗教などがナンセンスの烙印を押されるに違いない。

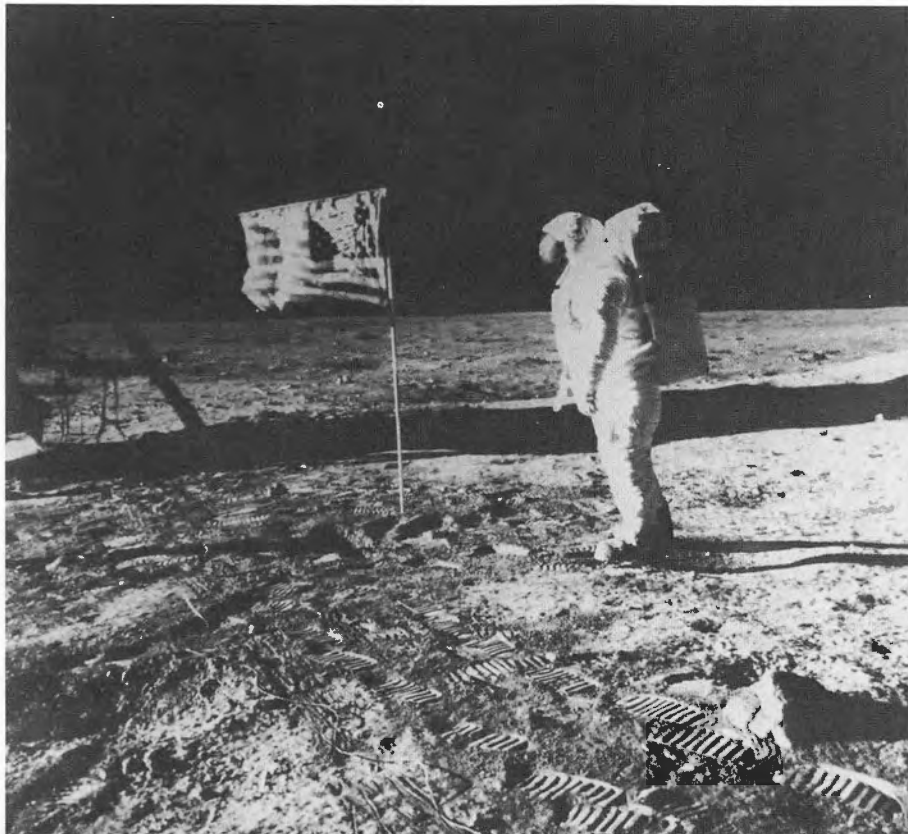
われわれの教育システムの大部分が間違っていたことが判明するだろう。宇宙からの真実が公表されれば、一般大衆がいわゆる宇宙問題の権威者以上

とはいわないまでも、彼らと同レベルの知識をもつことになる。権威的立場を確立していた者たちにとつて、それは考えるだけで恐ろしい事態なのだ。

検閲者たちは有人月探査以前の二十年間暗躍を続けてきた。荒涼とした砂漠や不毛の高原は果てしもなく広がっており、彼らはどこに着陸船を降ろせばよいかを熟知していたのだ。そして公表された月の写真類は生命が存在しないという理論にそつたものに限られ、偶然に現れ得るそれに反する証拠や、不測の出来事など(地球外宇宙船が、われわれの活動を見にやつて来るなど)に関するものは明らかに検閲の対象となつた。

大衆の心に定着させるべき一つのイメージがあつた。ただ一つのイメージだけだった。それは荒涼とした、不毛の、空気も生命もない球体である。それに対して大衆が興味を失うのは時間の問題だ。そして事実、彼らは二・三の月探査結果を見ただけでそうしている。大衆は、このような人間の住めない岩だらけの不毛の地に行くのは、無意味な金の無駄遣いだと考えるに至つた。いったい何のためにこのような芸当が繰り返され続けているのだろうか？

この特殊な疑問への回答として、月探査計画の継続が航空宇宙産業にとつてきわめて重要な経済問題であつたことが上げられる。さらに宇宙空間に人間を送ること自体が重要なことだった



◀月面の静かの海の基地にアポロ十一号の宇宙飛行士エドウィン・オルドリンが立てた米国旗のそばに居るのをニール・アームストロングが撮影した写真。昔の天文学では月面はコンクリートのように固い地面だといわれたが、アダムスキーは二番目の著書『宇宙船の内部』(アダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』第一部に収録)の中で、月面は砂地だと述べた。彼の記述は足跡のついたこの写真で正しかったことが証明されている。

沈黙させられた宇宙飛行士

のだ。この方法以外で人類が真実を学び始めるのは困難なことであり、私もこれには同意する。しかし最終的にはあらゆる方面からの興味が薄れ、国家予算からの資金も削られ、それ以上月にロケットを送る費用を正当化する何の根拠もなくなってしまうた。

月探査にかかわった宇宙飛行士たちは皆よく訓練され、作業遂行能力は充分だったが、一人を除き、すべてが軍人パイロットであり、アポロ計画はもちろん政府プロジェクトだった。探査活動中に多くの飛行士がUFOやそれに関連する何かを目撃したとしても、その事実はこの計画を指揮する高官達にしか報告されない。宇宙飛行士たちがこの件に関することを大衆や報道機関に話すことはできなかった。それは国家の安全を危うくすることになるのだ。帰還後のインタビューで何人かが質問に答え、あやふやでどっちつかずの意見を述べてはいるが、UFO問題に関して沈黙を守るというNASAの堅い方針通り、宇宙空間での目撃事実を飛行士たちが明確に話すことはなかったのである。

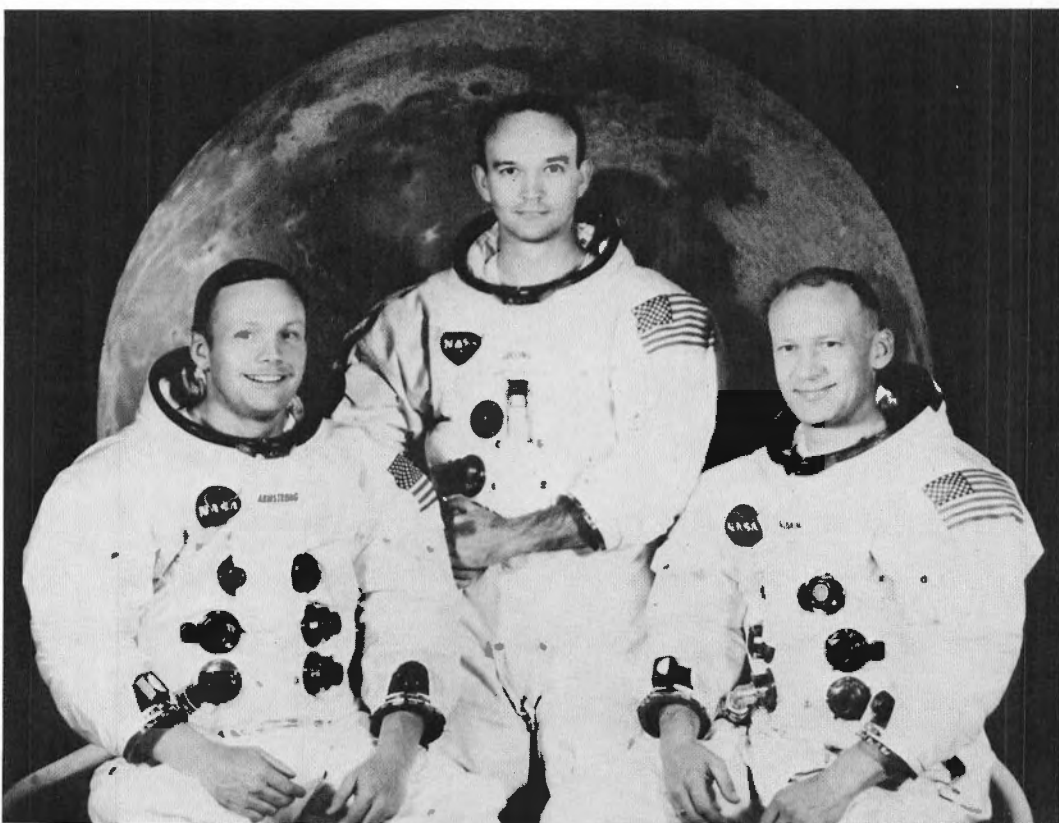
月探査活動中の飛行士たちと管制センター間の交信内容の想像記事が、いくつかの雑誌や本に載ったことがある。ボギー(UFO)が目撃され、探査船

の後ろをあるときには数時間もついてきたという内容であった。宇宙探査活動が常に異星人たちから監視されていたり、飛行士たちが軌道上から月面の異星人基地を見たことはもちろん間違いないと思うのだが、言われているような会話内容が本物かどうかは疑わしい。そのほとんどが不確かな情報にもとづいたものであるし、その他もまぎらわしい内容で、その多くが所々削除されている会話からの単なる推測である。NASAは異星人たちがそこにいるのを知っていたのだ。

当然、予想される目撃を隠蔽し機密事項とするための万全の手順を前もって確立していたのである。秘密交信回路と通じたコード信号が使用され、情報は宇宙センター内の高度機密室へ送られていた。このようにして異星人活動の報告は、飛行の様子を見つめる何億ものテレビ視聴者はもちろん、NASAの主体を成す管判センター内の一般職員にさえも秘密にされていたのである。

大衆はパニックから救われた?

NASA内部からの匿名情報によると、月面のUFOや異星人基地に関する初期の情報は、大衆をパニックから救うという名目で公表されなかったのだと述べている。そして宇宙飛行士たちは月への出発前に充分な説明と指示



▶アポロ十一号の宇宙飛行士たち。左からニール・アームストロング、マイクル・コリンズ、エドウィン・オルドリッジ。アポロ十一号は一九六九年七月十六日にケープ・ケネディーから打ち上げられ、二十一日にアームストロングが人類史上初めて月面に降り立った。

を受け、そこで何を見ても驚かなかったという情報もほとんど疑う余地はない。しかし国家安全保障が優先するために、彼らがその事実を話すことはできないのだ。

NASAの元技術者が、すべての宇宙探査機がUFOと遭遇していた事実を明らかにしている。彼の書いた非常に興味深い著書はまず一九七五年にフランスで、そして二、三年後にはアメリカでも出版された。この本の著者モリス・シャトランは、アポロ計画のすべての通信及びテレビジョンシステムの設計に従事した人物である。著書の中で彼は、NASAの外部で話されることはなかったが、ジェミニ計画以来UFOの目撃は日常茶飯事だったと述べている。

アポロが月に向かったとき、UFOの裏に潜む真実が劇的に証明されることになった。一九六八年十二月、宇宙飛行士フランク・ボーマン、ジェームズ・ラベル、ウィリアム・アンダーズの三人は月への歴史的飛行を成し遂げたのだが、彼らの乗ったアポロ八号が月軌道に乗り初めて裏側から出て来たとき、ラベルが送信して来た。

「お知らせします。月面にサンタクロースがいます」

これを何の意味もない軽い冗談だと主張する人がいたかもしれないが、他の人々は、そのメッセージに隠れた真の意味は、より住みやすい裏側に

異星人基地群が存在するということなのだと言言している。それは以前の無人探査機による詳細な裏側の写真撮影の結果、米・ソ両国の宇宙高官連はすでに知られていた明らかな事実なのだ。

一九五九年、ソ連のある科学者が、「世界中がすくくびつくりすることになるだろう」と素直に記者団に対して語っているが、その詳細な写真類は常に隠されてきた。しかし今やアポロ計画においては、人間が初めて自分の目で直接その証拠に直面したのである。

以後のアポロ宇宙船のすべてが、ときには至近距離で地球外宇宙船の追尾を受けていたが、管制センターはその情報をけつて公表しないという方針を堅持していたのだとシャトランは暴露している。月上空にいたアポロ十号を二機のUFOが追尾し、帰還飛行中も続いたという。そしてアポロ十号が月軌道を周回中、目もくらむような明滅する光がアリストアルコス・クレーター内のUFO基地から発せられたが、それはヨーロッパやアメリカの天文学者が充分観測できたほどの輝きだったのである。この光に関する多くの報告が地球にいた観測家たちによってなされていくのだ。

異星人たちは彼らの世界へのわれわれの最初の宇宙飛行を熱心に観察していた。地球人の誤った核兵器指向の意識がもはや地球上だけに留まらないこ

☆☆日本GAP企画第11回海外研修旅行☆☆

アメリカ南米 宇宙ロードの旅

昭和64年8月9日→8月20日(12日間)

参加費用 ¥595,000/30名を/分割払い可

●昭和64年度の日本GAP海外研修旅行はアメリカ西海岸と南米ペルーに決定しました。アダムスキー問題に関心のある方は一度ならず何度でも行きたくなるアメリカのアダムスキーゆかりの土地、南米ペルーのブレインカとインカ帝国の遺跡、謎のナスカの地上絵等、宇宙につながる特殊な場所をあこがれ訪う大旅行の素晴らしいさを満喫して下さい。日程は下記のとおりです。

日 程 表

8月9日(木)夕方成田発、約10時間の飛行後、同日朝ロサンゼルス着。ただちに市内を見学、ファーマーズマーケット、オリベラ街、ハリウッドその他を視察。同夜ロサンゼルス泊。

10日(金)はバスで南下、モハーベ砂漠の一角、デザートセンターへ行き、1952年11月20日、アダムスキーが金星人と会見したコンタクト地点を見学。同夜ロサンゼルス泊。

11日(土)バスでバロマー山へ登り、アダムスキー一族と共に住んだバロマー・ガーデンズの住居跡、山頂の大天文台を見学。バスでロサンゼルスへ帰り、深夜ロサンゼルス空港から空路ペルーの首都リマへ。

12日(日)朝リマ着後、市内を周遊、インカ時代の遺物を展示する国立人類学博物館、黄金博物館、その他史跡を見学。同夜リマ泊。

13日(月)朝リマより空路クスコへ。高地に栄えた太陽の帝国インカのかつての首都クスコのエキゾチックな街を散策後、午後はバスでサクスワマンに残る15世紀石垣城塞大遺跡、ケンコー遺跡、タンボマチャイ遺跡を視察。同夜クスコ泊。

14日(火)朝クスコから列車で出発、アンデスの雄大な風景を眺めながら謎の空中石造都市マチュピチュへ。標高2500mの断崖絶壁上の都市遺跡へバスで登る。同夜はクスコ泊。

15日(水)朝、高原列車で出発。大アンデス山脈のまっただ中を10時間の列車の旅。雄大な山並みと大平原の牧歌的な素晴らしい風景を楽しみながら夕方チチカカ湖畔の町プノ着。同夜プノ泊。

16日(木)午前中は標高3800mの名高いチチカカ湖へ行き、トトラ草を編んで作った浮き島で原始的な生活を営むウロス族を視察。湖畔を周遊。午後は円柱石塔墳シユスタニの遺跡その他を見学。同夜プノ泊。

17日(金)朝、空路プノ発リマへ帰り、さらに空路ナスカへ行き、ここで世界最大の謎のひとつとして有名な地上絵をセスナ機で視察(これは希望者のみ。要別途料金)。同夜リマ泊。

18日(土)夕方まで自由行動。各自リマ市内を散策。夕方空路ロサンゼルスへ飛び、夜、着。同夜ロサンゼルス泊。

19日(日)午前中、自由行動。午後ロサンゼルス発、空路日本へ。

20日(月)夕方、成田着。

※諸種の事情により日程等に多少変更がある場合もあります。

詳細については下記宛ハガキに「64年度GAP旅行案内書送れ」と記してご請求下さい。お問合せも下記へ。

〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル2F
ワールドセブントラベル社 田中 正(宛)

☎03(499)2461/夜間は0474-77-4728(田中宅)へ。

とを悟った彼らは、われわれを無視するわけにはいかなかったのである。そのような理不尽な考え方が彼らの生活環境を危険にさらし得ることを異星人たちは見抜いていた。これに関してはまた後で触れることにする。

一九六九年七月、アポロ十一号が月着陸船イーグルを放ち、人間が月面に足を降ろした。われわれのまだ駆け出しの宇宙技術を考えれば、これは素晴らしい業績であり、人類はそれを当然のごとく誇りに思った。すべての新聞・雑誌が月面に記された人の足跡の写真を載せ、NASAはそれを、月の埃の表面に人類が記した第一歩だと宣言したのである。

しかしNASAは、月には他にいくつもの足跡があることを知っていた。もちろんそれらは着陸地点として選ばれた静かな海基地にあつたのも、宇宙飛行士の靴のような特大サイズでもなかったのだが――。アポロ十一号の着陸後、近くに二機のUFOが現れ、エドウィン・オールドリンはアームストロングと共に着陸船から出る前、それらを数枚の写真に収めている。この事実は飛行交信責任者であつたモリス・シャトランにより明確にされた。

さらにNASAが、人間の住む世界に旅する現実への対処法や、地球外宇宙船による無害な監視を期待するため方法を、飛行士たちに充分にたたき

こんでいたことも明確にされている。飛行士たちはさらに、地球人類がなぜこの情報に対する準備ができていないのかについても教えられていた。この宇宙計画はわれわれの科学技術の向上を目指すことと、人間の考え方を一步一步、制御しながら広げて行く目的で計画されたように思われる。

権力者の考えは、われわれの文明はまだ地球外生命の証拠に直面できるほど進歩していないというものであったのだ。月探査中のすべての交信及び活動の中から、その証拠を完璧に検閲し取り除くことは可能であり、現実になされないのである。当然のごとく、月面をまごつく人間の姿が映し出され、

月の生命を求める人間の姿はそこになかった。権力者に言わせれば、そこまですが大衆の受け入れ可能な範囲だったのである。

月や火星・金星などに関する宇宙の真実を全く公表せず、人類を幼稚な知識段階にとどめておくことは、秘密主義者たちがこの文明を狂気に満ちた核路線に留めようとするのを許すことになる。権力者が月の異星人基地の発見を公表するつもりはなく、たとえチベット高地の山奥でそれを発見したとしても同様だ。そして実のところ異星人は地球上に基地(複数)を持つていたのだが、それらはわれわれには空からも地上からも近付き難い人里離れた

場所にある。

アポロ十三号の謎の爆発事件

さて、先ほど触れた、われわれの月旅行により異星人が危険にさらされ得るという件に戻ろう。地球の未熟な飛行技術によりアポロ十三号は月に向かう五番目の宇宙船として打ち上げられ、三度目の着陸を行なうはずだった。だが、あれが覚えていえるように、この不吉な飛行は酸素タンクの一つが謎の爆発を起し、月着陸を果たせないまま地球に帰還せざるを得なかったのである。この失敗飛行に関しNASA内部ではさまざまな憶測・情報が流れたとシャトラン氏は述べている。

アポロ十三号は秘密の積載物、つまり月面で爆発させる予定の核装置を積んでいたらしい。その核実験の影響を、以前着陸した二つの地点に残されていた地震計が測定することで、月の下部構造の組成を特定する計画だった。NASA内部での圧倒的な意見は、アポロ十三号を追尾していたUFOが、計画されていた核爆発を防ぐために着陸船の酸素タンクの謎の爆発を意図的に発生させたというものであった。

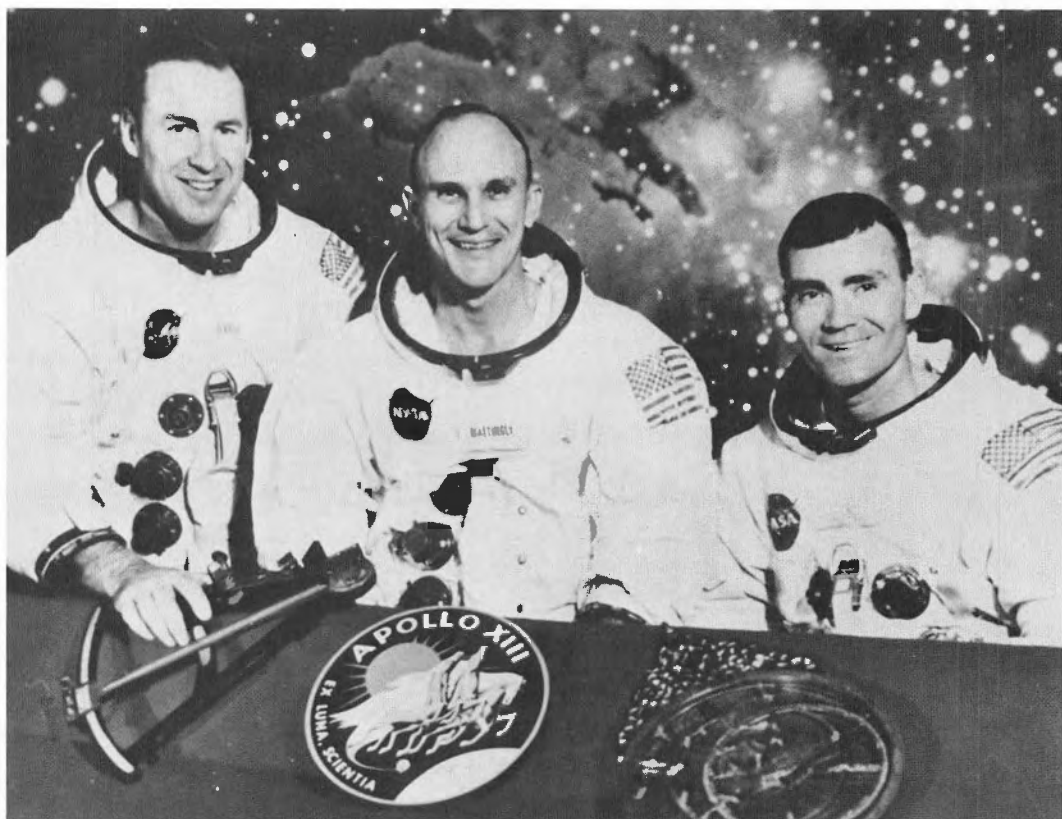
異星人の文明は進歩しているはずだと考え、月の生命環境をおびやかすようなわれわれの野蛮な計画持ち込みの可能性を知りながら、しかも彼らがただ黙って快くわれわれを迎えてくれる

などと期待することはできないのだ。彼らの進歩した技術や計器類をもつてすれば、われわれがどんな装置を宇宙空間に持ち込み、何をするつもりなのかということなどすべて正確にわかってしまうのだ。そしてアポロ十三号の事件に際して彼らは次のように言いながら行動したのである。

「記念碑、旗、そして探査用装置類ならば設置してもかまいませんが、核爆発は地球だけにして下さい。ここでは困ります」

アポロ計画における大袈裟な発表や大騒ぎを振り返ると、ひどく皮肉めいた部分に気が付く。NASA高官連は、月面に降りた飛行士たちが月から未知の病原微生物を運んではいけないかと大変「心配」し、帰還に際してアポロ十一・十二号の飛行士たちを数日間隔離して可能な限りの汚染チェックをしている。しかしながらこの同じ高官連は、下部構造調査によって起こる月の放射能汚染の心配はしなかったのだ。これは月からの病原菌を心配した大袈裟な発表をする一方で核汚染ばらまきの秘密計画をするという、「専門家連」のひどく無分別な策謀であった！

アポロ十二・十四・十五そして十六号も、月面でUFOと人工建造物を目撃していた。数多くの写真が撮られ、機密扱いから漏れた何枚かの写真が、フレッド・ステックリングの最近の本『われわれは月面の異星人基地を発見



▶アポロ十三号の宇宙飛行士ジェームズ・ラベル、トーマス・マティングリー、フレッド・ヘイズ。手前の紋章には太陽神アポロの像があり、三頭の馬が太陽の戦車を地球から月へ引いているのが見える。アポロ十三号は一九七〇年四月十一日に打ち上げられたが、酸素タンクの謎の爆発により月面着陸が不可能になって地球へ引き返した。

絶賛発売中

新書判・約二七〇頁・定価二二〇〇円・送料二〇〇円

異星訪問奇談

久保田八郎編

想像を絶する進歩をとげた別な惑星を大母船に乗せられて訪問した日本人青年の驚異の実話と、地球人を救うメッセージ！

■2年前、日本GAP発行UFOcontactee誌に連載されて大センセーションをまき起こした「私は別な惑星へ行ってきた！」と題する驚くべき記事をまとめ、さらに証人たちの証言と編者の解説序文を加えて一書にした実録。UFOcontactee誌の連載記事掲載各号が品切れ絶版となった現在、本書は貴重な文献である。大超能力者にして愛の精神の権化たるコンタクティー春川正一氏(仮名)は東京で活躍する実在の人物。超絶した諸惑星の実態と偉大な惑星人たちから与えられた感動のメッセージは危険な地球を救う天来の声/UFO研究者、自己改良希求者必読の書。

全国書店で発売中

書店にない場合は直接下記へご注文下さい。(日本GAPでは扱いません)
〒101 東京都千代田区西神田3-5-6

〈発行所〉新典社 振替・東京7-26932
☎03(265)3781

した」の中で紹介されている。彼らはこれらの写真をNASAの科学資料センターで手に入れた。ステックリングの示した素晴らしい証拠は後程紹介することしよう。

まだ「その時」がない？

宇宙飛行士たちは、探査活動中に説明不可能なものを見たというような簡単なコメント以外は、何もおおよけに話すことはなかった。計画を操る者たちは、まだ「その時」ではないという理由で、真実に対しての徹底した沈黙を指示していたのである。宇宙飛行士は国家安全保障のための命令に従わざるを得ないから、彼らの沈黙を責めることはできない。彼らは大衆に仕えていたのではなく政府に仕えていたのだ。

しかし直接真実を見た後で偽りの事実の公表を目のあたりにしたことが、彼らの心に耐えがたい程の重荷を負わせたようだ。まだ「その時」ではないという理由で、輝かしい未来が否定されたのである。

月から帰還した後で、彼らの性格が全く変わってしまう傾向が見られた。帰還後ある飛行士たちはひどい鬱病に悩み、その他狂信的ともいえる程宗教に没頭するものも現れた。最近私はあるアポロ飛行士の講演を聞いたが、彼は講演中に少なくとも十回は次の一節を繰り返している。

「知る価値のあることはただ一つ、イエスが二千年前にこの地球上を歩いたという事実です。人間が月面を歩いたということではありません」

月探査計画が進行中、地球上では何が起きていたのだろうか？ それを知ること、月の真実を公開すべき「その時」ではなかった理由が一部見えて来る。米国の月探査計画は、一九六八年十二月のアポロ八号に始まり、一九七二年十二月のアポロ十七号までの四

年間に及んだ。その同じ四年間はベトナム戦争が最も激しい局面にあった時期でもある。なかでもアポロ十七号が宇宙空間の静寂から戦争に引き裂かれた地球への帰還途中のその時、第二次大戦以来最も激しく破壊的な北ベトナム爆撃命令がニクソン大統領により下されている。

この経済勢力の世界にとって「その時」は決して来ない。戦争と軍備はまさに偽りの経済機構の一部であり、この機構こそが真実を隠し、地球外生命は宇宙に存在しないという決定を必要としているのだ。もしも真実が漏れれば、月にいる人々が誰なのかをすべての人が知れたらどうだろう。月の真相のほんの一部が明らかになるだけで、世界中の多くの間違いが即座に正されることになる。そうすると権力者にはもはや戦争や軍備に対する人々の愚かな支持を得られなくなるのだ。

大衆は新聞の二、三の見出しを読み、

月からのボケた映像を二、三見ただけで月を過去の物としてしまった。当然のごとく関心は薄れ、全国ネットのテレビ局がアポロ十三号の発射シーンを挿入しようとする、スポーツ中継を中断されて怒り狂った視聴者からの電話が局の交換台に殺到したのである。そしてまた当然のごとく、科学界はNASAが公表した月の姿を、単に地質学的興味の対象として心から歓迎し、月の石の到着を待ちかねていた。

(第七章未完。以下次号)



GAP活動の原理

The Principle Behind the IGAP by Daniel Ross

ダニエル・ロス／坂本真一訳 Translated by Koichi Sakamoto

ジョージ・アダムスキーによって世界に与えられた宇宙的記録と宇宙空間に関する知識はGAP活動の基本であり、近隣の惑星群から人々が地球へ来ていることに関する正しい理解を得るための土台となるものです。まず彼の書物や重要な文献類がこの分野の指針と実感を人々に与えるのですが、Get-Acquainted Program (知らせる運動) の本当の意味は、人間同士が互いに知り合いになり、真実や生命の本質をも知るようになることにあります。

この種の友好的な環境の中にいれば人間は真実のフリーリングと表現の喜びを体験するでしょう。また本人は社会に長くつちかわれてきた世俗的なコミュニケーションのほとんどは精神的な競争の結果であり、これは間違っているということに気づき始めるでしょう。生命の目的は宇宙的な性質を帯びた実を結ぶことであり、宇宙的フリーリングによって調和して役立つことにあるからです。

生命は絶えず生長しますが、一定のパターンはありません。全く同じ人間は二人と存在しないからです。各人は異なるバックグラウンドと個人的な記憶を持ち、特殊な才能と体験を持ちます。

人々が調和して出会う社会においては、各人の才能と表現の混合が行なわれます。したがって各人が単独で自分勝手に行動するよりも奉仕の量ははるかに大となるでしょう。

同様に、GAPは人々が集まることによって人々の間により良い理解をもたらすための環境を確立しています。加えて会員は宇宙的な個性と表現を発達させる方向へ自分の研究と個人的な関心を追求

することもできるのです。正しくいえば、一個人が地球上の経歴または専門的教育において、どのような専門的知識や技術を持つとも、この新しい宇宙的な理解の分野で自分の位置を確かめるには、ある期間を要するということに気づかねばなりません。

次のように書いた人があります。

「船というものは港の中にいれば安全だが、それは船が建造された目的をあらわすものではない」

GAPは船のようなものだといえるでしょう。あらゆる船には船長を必要とし、さらに正しく航行するために多くの乗組員を必要とします。そして乗組員たちの協力と調和も必要です。

こうして港を出て行つてから彼らは多くの港に立ち寄つて人々と接触し、体験と学習と理解を広めてゆきます。

いまここで言及している船、すなわち日本GAPは毎年外国へユニークな研修旅行を実施することによって、このことを実践しています。一九八七年、日本GAPはアメリカとメキシコへの素晴らしい旅行をやりましたが、私もカリフォルニア州南部でその旅行の一部に参加する特権を得ました。そしてこれほどまでに友好的外向的に巧みに設定された企画を知つて大いに驚いたのです。なぜなら私がこの分野に入ったとき、アメリカでこのような企画は全くなされていなかったからです。

最近私は一九五七年にジョージ・アダムスキーが書いた初期のコーワーカー(協力連絡員)宛の手紙類を読み返しました。この年彼は国際GAPの設立計画を実施し始めた。彼の書簡から直接に引用

すると次のとおりです。

「スペースブラザーズ(別な惑星から来た友好的な人々)は、GAP活動を地球上で始めるようにと私にすすめました。この活動を援助するため、彼らは各国で関心と真剣さを示した一人の男(女)の援助を要請することもすすめました。別な惑星から来る訪問者たちに関心のあることを表明した各地域の人々は、互いに知り合いになるべきです。そうすれば孤立感を持つている人々を強化するのに役立ちます。そしてより大きな理解を求めて話し合いと親睦を図るための定期的な会合を開くとういでしょう」

私は別な惑星のブラザーズとときどき会見していますから、ブラザーズから与えられる情報を定期的に各国GAPリーダーに送ります。するとリーダーはそれを私にかわつて支持者すべてに送ります。このアイデアは、こうした努力によって各国の市民が何らの偏見や分裂なしに同胞と親しい間柄になることを目標としたものです。いつかはこの国家間の努力が世界的な理解と友情とに発展するでしょう」

これはGAP網設立のために根づいた種子でした。そのうちアダムスキーは刊行された書物類を通じて宇宙の生命の進歩した教えと原理を世に送りましたが、これは科学的な宇宙開発からもたらされる新しい情報と一致したのです。

一九六四年にアダムスキーによって出された「生命の科学」は、人間が自分自身を知るための「知恵の真実のカギ」を教えています。それはわが太陽系の高度に進歩した惑星群のあらゆる人によって生かされている教えでもあります。

GAPリーダーや進歩した会員の人たちのすべては、新しく入ってくる人々が友好的な別な惑星からの訪問者たちと宇宙の知識に関する理解を得られるようなバランスのとれた環境を作るために活動しているのです。

人の話によると、この頃は「超能力」開発に重点があるようです。しかし近隣の惑星群の進歩した人々は大自然と宇宙の諸法則を研究することによって現在の偉大な文明を持つに至つたのです。彼らは結果すなわち現象の背後にある「因」を見ることを学び、エゴを訓練して、個人の中にひそむ「宇宙的自我」の表現体になるようにしたのである。そうなる意識からくる想念の力によって(つまり心による疑惑または障害に対抗して)「人間は自分が考えたとおりの者になる」のです。そうすると経路すなわち動機は他に對する奉仕の一つになり、それは勝手に行動する心(エゴ)による限定された結果を生ずることなしに、正しい現象(結果)をもたらすのです。

以上はきわめて重要な研究の分野であり、ここには詳述できませんが、私の回答としては、超能力というよりもむしろ「意識能力」の開発に重点をおくべきです。生命の目的は宇宙的性質の実を結ぶべきであるからです。

現在のGAP活動をありふれたものとみなすのは容易でしょうが、過去多年のあいだGAPなるものが存在しなかったらどうだろうかと考えて下さい。個人としてのあなたはUFOに関して何を知っているのか。どんな情報を持つてでしょうか。現在あなたが持つていく多くの友人や、あなたが参加した多くの価値ある活



▲日本GAP東京月例研究会（上野公園内東京文化会館）講義中の久保田会長と会員受講生。

撮影／松村芳之

動などは、GAPが存在しなければ出現しなかったことでしよう。機関誌や絶えず流される情報、公開される資料などを忘れてはいけません。

日本GAP会員は、日本にいて大いに祝福された状態にあることに気づかないかもしれません。私がアメリカで持った自分の体験からいえるのは、あなたがた日本GAP会員は、これほどまでに充実した活動に接することができてまことに幸せだということです。日本GAPは他国が活動するための模範であるといえるでしょう。

最後に述べたいのは、自分の能力に応じて生きている会員のすべては、このG

AP活動に責任を持っているのです。もとジョージ・アダムスキーによって創立されたGAPは、高貴な宇宙からの訪問者たちによってこの惑星地球に伝えられた「大義（同義語で真理）」をあらわします。理解は行為ですから、各会員の才能をこのGAP活動に応用するべきであると思います。

さらにあなたの日常生活において、あなたは日常出会う人たちのすべてに対してGAP活動の代理人なのです。責任をもって最善をつくすことです。あなた自身の個性の表現を通じて活動するならば、あなたはこの惑星の「大義」の実例になるでしょう。あなたが出会う人々は、あなたがGAPの会員であることを知るのでしようが、相手はあなたが身につけている正直な寛大さと本当の誠実さを感じとるでしょう。相手が再度あなたに会う機会があれば喜んで会うでしょう。私たちはスペース・ブラザーズと同じフィリングを身につけねばなりません。私たちも惑星地球に住むスペース・ピープルであるからです。地球人だけがそのことに（自分たちも「宇宙人」であることに）気づいていないのです。

久保田八郎氏が率いる日本GAPに私が参加したことは、一九八七年に日本へ八日間の旅をしたことをも加えて、現在までのこの分野における私にとって確かに最も重要な事でした。日本GAPの多くの会員の方々と数日間、貴重な時間をすごした体験は、本当に報いのある、高揚感を与えるものでした。このような主義のための深いフィリングを持つ人々と接触するならば、だれでも多くの価値ある体験を見出すのです。

日本GAPへ入会しよう

日本GAP 日本GAPは名実共に世界のトップクラスをゆく研究実践集団です。昭和28年よりジョージ・アダムスキーと文通を続けた久保田八郎が昭和36年にアダムスキーの要請により世界GAP網の一環として『日本GAP』を設立し、以来28年間、多大の障壁と困難を乗り越えて、わが国におけるUFO問題と宇宙哲学の啓蒙に挺身してきました。これまでGAPに在籍した人は5000名近くに達し、この分野で多数の人材を育成してきました。現在の会員数は1300名弱。全国に21支部を擁し、英文版UFOcontacteeを発行して世界数十のUFO研究団体と交流、情報交換を行なっています。

機関誌 機関誌UFOcontacteeは会員に配布するのみならず、100余名のボランティアにより全国の主要書店に直販で店頭販売されています。これはわが国唯一のUFO専門誌としてUFO目撃事件ばかりでなく、宇宙哲学や超能力などの実践指導講座と体験記等も掲載し、読者の精神面の向上と能力開発に力をそそいでいる希少価値の高い専門誌で、後世に残る貴重な文献です。

各種会合 日本GAPは機関誌発行以外に、東京本部と全国地方支部による月例研究会、地方支部大会、東京における年次総会、毎年8月に実施される海外研修旅行等、多彩な企画によりセミナーその他の会合を開催し、会員の親睦と融和を高め

ています。これらの会合は原則としてGAP会員のみが出席して開催され、宇宙的カルマを持つ人の発掘や個人の研鑽に貢献しています。心霊や宗教とは一切関係ありません。

入会 中学生以上の方なら年齢・性別を問わずだれでも入会できます。入会すれば機関誌UFOcontactee誌（1、4、7、10各月1年4回発行）が直送されるほか、上記の各種会合に出席できます（毎月東京月例会だけで60～70名出席）。

会費 会費というのは機関誌代金の前納を意味します。入会金は不要です。前納回数が多いほど割安になります。

1 回分	¥900(機関誌1冊分代金)	送料200円	計¥1,100
4 回分計	¥4,200	6 回分計	¥6,100
8 回分計	¥8,000	10 回分計	¥9,900

入会手続きは所定の振替用紙を用いて郵便局で払い込むだけでよいのですが、郵便局そなえつけの振替用紙を用いてもかまいません。その場合は「日本GAPへ入会希望。第×号より第×号まで×回分」と通信欄に記入して下さい。もっと詳細を知りたい方はハガキで入会案内書をお申し込み下さい。皆様に良きカルマをもたらす日本GAPへのご入会をお待ちしています。

〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511
日本GAP ☎03-651-0958 振替＝東京4-35912

Letters

ユーコン広場



素晴らしいGAP総会

東京 佐々木八郎

こんにちは。お元気のことと存じます。六十二年九月のGAP総会は迫りがありました。有難うございました。アリス・ポマロイさんのフィリング・波動と何回もびったり合いました。私自身はこのように他人とフィリングが合ったことはあまりありません。英語の理解力はあまりないのですが、びったりと合ったときにはポマロイさんのお話の内容が絵になって頭に(?)浮かんできました。久保田先生の流れるような通訳も素晴らしいと思います。

スペース・ビーブルが総会会場に来ていたり、超小型UFOが来ていたということですが、このことを十月の月例会で聞いたとき、会場で感じていたあの独特なフィリングと高揚感のワケがわかった気がしました。スペース・ビーブルの皆さんに対する感謝の気持ちがあらためて湧き起こってきます。久保田先生、アリス・ポマロイさん、スペース・ビーブルの皆さん、有難うございました。

圧倒的なポマロイ女史の講演

北海道 山岸利男

今年度の日本GAP総会にも運よく出席することができました。当日

は始まる前からアリス・ポマロイ女史が壇上に現れるのが待ち遠しく感じられました。いよいよ壇上に現れたお姿を見つめてみると、背スジがゾクゾクするほど感激し、内奥の高揚が目まいがそうになり、心の高まりを抑えることがむずかしいほどでした。このとき「総会に来ることができてよかった」と心から感謝しました。私の人生にとってアリス・ポマロイ女史にひとめ会うことはどうしても必要だったのかもしれない。

私がUFOに興味を抱き始めたのは二十年以上も前のことでした。当時十代半ばの私は「人間は、いかに生きるべきか」ということに悩み、本をむさばり読みました。しかしトンネルから抜け出ることではできませんでした。あるとき「今の地球人はまだ進歩の途中なのではないか。もしかすると他の星にはより進歩した人が住んでいて、人間としてあるべき理想の姿(生活)をしているのではないか」ということを何の根拠もなく自分に問いかけたことがあります。それから日をおかず偶然にUFOのスライドを見る機会を持ちました。そして「UFOに乗っている人はどんな人なのだろうか?これがUFO(宇宙哲学)に興味を持つスタートだったのです。」

その後アダムスキー氏の著書を知り、何冊か読むうちに「どこかで聞いたことのある内容だなあ」と感じたことが何度かありました。そして久保田先生に手紙を書き、また返事を頂き、以来GAP会員となり現在に至っております。

この地球が宇宙の意識という宇宙の聖なる川の流れに乗れるよう、輪廻転生の一サイクルである私の今生を、GAPを通して奉仕してゆきたいと思いを。総会により私の今生でやらねばならない何かが解りかけてきたようにも思います。素晴らしい総会でした。本当に有難うございました。

総会での講演に感動

香川県 関 高明

六十二年九月の東京での日本GAP総会ではお世話になりました。先生をはじめ多くの会員と再会できて大変嬉しく思いました。アリス・ポマロイ先生の素晴らしい講演を拝聴できて心から感謝しています。

ポマロイ先生の講演の途中、感情的な高まりのため涙が出そうになったことが何度かありました。あらためてG・アダムスキーの偉大さとスペース・プログラムの重要性、壮大さを認識させられました。総会の運営にあられた先生、本部役員の方々に心から感謝いたします。どうも有難うございました。

フィリングの素晴らしい東京月例会

千葉県 岸本 悟

総会では大変お世話になりました。

本日に素晴らしい総会でありまして出席できてよかったと思っています。ちなみに帰りの電車の中で右腕を見ているのですが、右腕に小さな金粉が二つほど出ていました。銀とか半透明のうろこ状のものとかは出たことがあるのですが、金は初めてです。驚きました。このような現象は中嶋順子さんのような一部の超能力者にだけ起こるものだったのでしょうか。ですが、そうでもないのですね。(編注)中嶋順子さんは本誌95号に「私のUFO目撃と不思議な体験」と題する記事を発表。

それから十月の東京月例会ですが、非常にゆたかりした感じがありまして、本日に素晴らしいフィリングの月例会でした。特に遠藤さんのテレビ番組のお話とかをうかがうとき、遠藤さん独特のこころよいフィリングを感じまして、よかったと思っています。

それでは何かと大変だろうと思いますが、これからも日本GAPを良き方向にお導き下さい。

主人の良き理解に恵まれる

宮城県 太田節子

先日は久しぶりに東京月例会に出席させて頂き、有難うございました。今年は私にとっていろいろなことがありましたが、最近幾分落ち着いた状態になりましたので手紙を書かせて頂いております。

今になって振り返りますと、私の「GAP活動」に対する考え方に幾つかの誤りがあったように思います。誰のためというよりも、まず第一に自身の進歩のためにやっているのだ

ということを忘れていたような気がします。最近になってそれぞれの進歩の度合に合わせた参加の仕方があるのもいいのではないかと考えるようになってきました。私のレベルでは仙台北部の月例会で誰かに助言を与えるなど到底無理な話です。

先日久しぶりに東京本部月例会に出席させて頂いて、今自分に最も必要なものはまさにこれ(出席すること)なのだと思いましたが、このことを主人に話したら、私が出席する日は「一日中子供の面倒を自分ひとりでみなければならぬいうえに、東京までの往復のかかりの費用がかかるにもかかわらず、快く承知してくれました。主人には本当に感謝しています。家庭生活の維持も重要ですが毎月とまではいかないかもしれませんが、これからは出来る限り通わせて頂きますのでよろしく指導の程お願い致します。

内容の濃い本誌103号

神奈川県 富岡段子

星空が美しい今日この頃です。このたび本誌102号の精算と103号の卸しで書店へ行きまして、五反田の書店では十冊売れたとのことでした。喜んでおります。たぶん最近雑誌やTV等でUFOの目撃が取り上げられたりした影響があるのだと思いますが、目撃が少しずつ増えているとしたら何か意味があるのでしょうか。いずれにしても真面目な関心ある方に本誌を読んで頂ければと思います。103号は予想以上に内容が濃くて素晴らしいものでした。デザインもカ

ラーもシックな感じと明るくさわやかな感じがうまく調和していて、中を開いてびっくりしました。私も雑誌デザインの仕事をもっと頑張らなければと思います。いつもながら先生のオールマイティーな感覚には驚かされるばかりで本当に頭が下がります。内容も素晴らしいものばかりでした私の記事を除いて、遠藤氏の「オーラ透視能力開発法」はとても参考になりました。これからレギュラーで同氏の記事を掲載して頂ければと切望します。

どうぞこれからもますますお元気で素晴らしい活動を続けて下さいますようお願い申し上げます。

福岡支部大会での深い感銘

福岡市 樋口美由紀

福岡支部大会では有難うございました。久しぶりに先生にお会いできました大変嬉しく思いました。東京あるいはその近くに住んでいれば、いつでもお会いできるのですが、福岡は離れていますから東京月例会へ行こうと思いましたがなかなか大変です。

先生の講演でお聞きした「万物を金星の美と完成のイメージとだぶらせて見る」というお話に勇気づけられました。これはとても私を支えてくれます。頭の中ではわかっていても、日常生活で直面しますと尻こみしてしまう時があります。くだらないことがすぐく気になる時があります、全く自分のマインド(心)の弱さに情けなく思います。

福岡支部会員の川上富喜氏は先生

もご存知のように素晴らしい方で、感情の切り替えの早さといえますか、実行力もすごいのです。もうすでに感情のコントロールができて上がっていてこの地球に生まれてこられた方だと思えます。私は言っています、まだまだコントロールできていません。それを習慣づけて土台にしておれば今は違った自分になっていたかと思えます。

今回の福岡支部大会で、さぼっていた細胞たちを起こすことにします。プラスの想念、実行、金星のイメージとダブらせる、テレパシーの練習再び頑張ります。とにかくいろいろなことにプラス想念をそそぎながら進歩してゆきたいものです。先生もどうぞお元気で活躍されますことをお祈り申し上げます。

ご挨拶

佐賀県 平野綱子

朝夕はだいぶ涼しくなりましたが、お変わりございませんか。先生にはご無理を申しまして励ましのテープを送っていただいたのですが、父は(平野三郎氏)六十三年八月二十日午前〇時五分に他界致しました。病名はすい臓ガンでした。今年の六月十五日に手術を受けていたのですが、肝心の所は手がつけられず、胆汁の流れをよくするために六時間もの長い時間をかけての大手術でした。

入院中は大変痛みが激しくて、亡くなる数日前からは鎮痛剤を打つても止まらない状態で本当に苦しうでした。目も見えない上にこんな病気がかかって大変苦しかったらうと思います。でも息を引き取る前に突

然目を開いていつまでも微笑んでいました。本当に安らかな死に顔でした。

生前先生には大変お世話になりました。私から先生には有難うございました。私からもお礼を申し上げます。父は久保田先生に知り合って本当に良かったと思えます。目も見えない不自由な身で愚痴も言わずに頑張つてこれたのも先生のお蔭だと思います。私が吹き込んであげたテープを毎日聞いて勉強するのが心の支えだったと思えます。昨日(十月二十五日)三十五日を終えましたのでお知らせ致しました。先生もお元気で活躍下さい。

(編注)平野三郎氏は日本GAP創立以前からの知己で最古参の会員であった。バス会社社員だったが眼病をわずらって盲目になり、以後は娘さんの綱子さんがア全集、本誌、編者の書簡等を読んであげたりテープに録音したりして宇宙哲学を学んでおられた。最後の奇跡的な微笑は偉大な惑星への転生に関連する現象であったと思われる。こうして心友は先に去って行った)

高松支部月例会の帰途 円盤出現

福岡市 片岡 豊

先日、高松支部によりまず第一回目の月例研究会に出席させていただきました。今春開通しました瀬戸大橋を電車で渡り、久しぶりに四国の大地に立ちました。高松駅より歩いて五分ほどすると真新しい香川県民ホールに到着しました。支部代表の関氏は先生のご紹介のとおり熱意に

満ちた素晴らしい人物とお見受けいたしました。出席者は少人数ではありましたが、皆さん素晴らしい人達で、終始宇宙的な波動に包まれていました。

私は電車の都合もあり、四時四十分頃会場をあとにして、四時五十六分高松発のマリンライナー26号に乗り、一路岡山へ向かいました。

岡山も近くなって電車が妹尾駅を発車してまもなく、私はふと車窓に目を向きました。するとそこに一機の高松が電車でピタリと並行について飛んでいるではありませんか! 時間にして五、六分間でした。私はその間それが円盤ではなくて別の物ではないかとあれこれ観察しましたが、それを否定できる事実は何一つ見つかりませんでした。GAPの活動にはたしかにスペース・ビープルの関心が寄せられていることは事実のようです。

高松支部月例会で出席者が少なかったことは残念に思います。近隣の会員の皆さん、ぜひとも月例会に出席してみして下さい。必ず得るものがあると思います。

私は頑張ります

三重県 松口幸之助

秋を深く好んだ詩人の詩集「秋の瞳」のようなイチョウの葉が黄色く陽光に輝いています。私も元氣になつてミカン農園に病院から働きに行つていますので、どうぞご安心下さい。

先生のお手紙は力強く、ものすごいパワーを感じます。実は私は腹痛

が何日も続きまして病院で何もしていません。イメージを描いてミカンの仕事をしている光景が実現しているところを確信し続けました、そのとおりになりました。

先生はGAP会員、日本人、あらゆる世界、宇宙の方々等、万物に対する包容力のある方だと失礼ですが確信いたしました。私も健康になり、いい仕事を、お嫁さんをもらつてGAP活動をやつてゆく確信は持っているつもりです。リラックスして楽しく、よく笑い、元氣に希望をもつて生きよう、ダイヤモンドのように固く光り輝いてやるんだと思つています。先生もご多忙で大変でしょうが、くれぐれもお体に気をつけてご指導下さい。私には何もできないのが残念ですが、どんな遠方でもすべては一体で通じるものがあると思えます。私も頑張ります。

文通しませんか

栃木県 大根田匡史

久保田先生そしてGAPの皆さん今日は。僕はGAP会員ではないのですが、宇宙哲学とGAP活動(知らせる運動)を始めてからもうすぐ一年になります。

お互いに学びたいと思う人、そして仲間がほしいなと考えている人、どうか手紙を送って下さい。そしていっしょに活動をしていきましょう。申し訳ないのですが十四、十八歳ぐらいの人に限定して下さい。

住所 千321栃木県宇都宮市宿郷町

七三八一六

大根田匡史(17)

本誌バックナンバー掲載記事目録

※印は絶版。在庫なし。お申し込みの際は郵便振替にて日本GAP宛て送金下さい。バックナンバーに限り送料は不要です。

No.103

昭和63年10月25日発行 ¥900

アダムスキーの体験は真実だった／——アリス・ポマロイ
我らの惑星に愛と希望を——久保田八郎
カイロ上空に輝くUFOが出現——伊東芳和
私のUFOコンタクトと宇宙的目覚め——富岡設子
UFO-宇宙からの完全な証拠⑥——ダニエル・ロス

No.102

昭和63年7月25日発行 ¥900

UFO目撃で驚嘆、大変化した私——後藤泰二
仙台市上空にUFO長時間出現——遠藤昭則
富士山周辺でテレパシーに出来るUFO群——長沼宏志
ミラクルワードとイメージ法で奇跡を起こす——田中 正
良い想念であなたの環境は良くなる——
UFO-宇宙からの完全な証拠⑤——ダニエル・ロス

No.101

昭和63年4月25日発行 ¥900

宇宙的家族のUFO目撃の日々——坂本茂子
精神的指導者に対する警告——G.アダムスキー
円盤の窓から手を振る“異星人”——齊藤庄一
長野県に出現したUFOの大群——博田文喜
頻繁なUFO目撃と超能力体験——佐々木八郎
UFO-宇宙からの完全な証拠④——ダニエル・ロス

No.100

昭和63年1月25日発行 ¥900

UFO問題とアダムスキー——久保田八郎
富士山二合目から目撃したUFO——遠藤昭則
私はこうして超能力を開発した——坂本正廣
アメリカの不思議な土地——水野和彦
UFO-宇宙からの完全な証拠③——ダニエル・ロス

No.99

昭和62年10月25日発行 ¥700

UFO-宇宙からの完全な証拠②——ダニエル・ロス
山中湖畔で空中を飛んだ自動車／——清水 南
富士山にUFOが大挙出現——清水敏恵
(写真)大分市上空のUFO
アダムスキーの大地とマヤの国へ——久保田八郎

No.98

昭和62年7月20日発行 ¥700

木星の衛星イオに古代都市跡を発見／
UFO-宇宙からの完全な証拠①——ダニエル・ロス
静岡市上空にUFO頻繁に出現——遠藤昭則
太陽系惑星にまだ仲間がいる？
連夜のテレパシー送信に応じて出現した円盤——片岡 豊
万物の実体と想念の重要性——知念清邦
私は別な惑星へ行ってきた／(最終回)——春川正一

No.97

昭和62年4月20日発行 ¥700

驚異の「生命の科学」と円盤大接近——伊藤達夫
八王子市でUFOを撮影——降旗和彦
別な惑星の偉大な人類と文明——G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた／④——春川正一

No.96

昭和62年1月20日発行 ¥700

私のオーラ透視とテレパシー現象——清水 南
京都市上空にUFO5回出現——久保田八郎
想念放射、透視、UFO目撃——遠藤昭則
UFOと心霊は無関係——G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた／③——春川正一

※ No.95

昭和61年10月20日発行 ¥700

茨城県千代田村のUFO——日本GAP茨城支部
アダムスキー問題に対する考察——内田格男
私のUFO目撃と不思議な体験——中嶋順子
ジャンボジェットに並行して飛んだ円盤——久保田八郎
私の別惑星訪問体験とアダムスキーの真実性——春川正一

※ No.94

昭和61年7月20日発行 ¥700

テレパシーで飛来した真っ黒い円盤——堀江健一
八丈富士山麓でUFOを撮影——谷口美雄
地球を救う愛の想念放射運動——山崎清美
母船の周囲には人工大気層がある——G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた／②——春川正一

※ No.93

昭和61年4月20日発行 ¥700

月面にいた2機のUFO／
超低空に出現した大型円盤と黒い人影／——笠原弘可
私も光体を見た——伊藤達夫
多くの館——G.アダムスキー
質疑応答——G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた／①——春川正一

No.92

昭和61年1月20日発行 ¥700

偉大な惑星から来た兄弟たち——野口敏治
サン・ビエトロ大寺院の異星人——久保田八郎
米トップ科学者、UFO墜落の事実を認める——ゴードン・クレイトン
質疑応答——G.アダムスキー
地球の哲学と宇宙哲学の相違(完)——松原真弓

※ No.91

昭和60年10月20日発行 ¥700

円盤に乗った日本人少年——伊藤達夫
ブラジル人教授の円盤搭乗事件——
質疑応答——G.アダムスキー
太陽系の惑星に知的生物が存在!?
地球の哲学と宇宙哲学の相違②——松原真弓

※ No.90

昭和60年7月20日発行 ¥700

朝霧高原の不思議な“月”——伊藤達夫
旭川にも月擬装UFO出現——石川晴道
尾道市に出現したアダムスキー型円盤と母船
ムーンゲート第14章(完)——ウィリアム・L・ブライアン
アダムスキー問題の真実性と宇宙哲学実践法——久保田八郎

※ No.89

昭和60年4月20日発行 ¥700

ハケ岳に出現した円盤——秋山京子
富士山麓にUFO頻出——高梨和明
金星文字解読研究——遠藤昭則
ノアの箱舟とアブラハム——久保田八郎
アステロイド帯と月のクレーター——ウィリアム・L・ブライアン

※ No.88

昭和60年1月20日発行 ¥700

驚異の高松市円盤降下事件／——伊藤達夫
人工衛星による写真と地球上の異様な発見物——ウィリアム・L・ブライアン
米政府はUFO問題の真相を公開せよ——ダニエル・ロス
太田市上空に頻出するUFO——久保寺信一
不思議な予知夢の実現——内藤重雄
テレパシー開発基礎トレーニング——久保田八郎

※ No.87

昭和59年10月20日発行 ¥700

月と地球は空洞のコアをもつ天体か——ウィリアム・L・ブライアン
宇宙から来る訪問者たちは地球人を指導しようとする——ジュニー・アベ
絶対に真実であったアダムスキーの体験——遠藤昭則
丸窓の並んだ母船が出現／——後藤澄子
二十世紀の地球——松原真弓
異星人イエスの足跡を訪ねて——久保田八郎

※ No.86

昭和59年7月20日発行 ¥700

月には濃密な大気と強い引力がある——ウィリアム・L・ブライアン
超低空で接近したアダムスキー型円盤／——遠藤昭則
山腹に着陸した巨大な円盤!?——清水 南
アダムスキー型円盤、超低空で出現／——清水 正
テレパシーと透視②——久保田八郎

盛況の福岡支部大会、有終の美を飾る

今年の大会は十月二十三日(日)に博多駅前のチサンホテルで開催。例年のことながら大会当日まで出席者数は容易につかめない。少し不安な気持ちで待ったが、大会が始まった頃にはほぼ満席となり、ほっと一息。出席者は想像以上で約四十名。

吉岡氏の落ち着いた司会で大会は定刻に始まった。今回は支部会員の西本有美子さんと久保田先生の二人に講演をお願いした。

西本さんはGAP活動歴も長く、その体験と実践をもとに力強い発表をされたが、今回は「アダムスキー哲学を学ぶ喜び」という演題で、特に習慣についてのテーマ発表となった。自分の子供の頃の体験と、大人になってからの心と肉体の習慣の対比、そして逆にその習慣にコントロールされてしまうこと。さらに自分を責めたり裁くこと

は逆効果になるのではないかと。また自分は宇宙哲学を学んでいるのだというプライドは逆にこだわりを生じ、良い結果が生じない等、彼女の生命科学研究の真髓の一部が発表され、あらためてわれわれの足元を見ることの重要性に気づかされた。

続いて久保田先生の講演が始まる。

今年は「アダムスキー哲学と超能力開発」がテーマとなった。本当の意味での超能力の必要性についての解説がわかりやすい警えて解説され、特に自分の精神高揚と同時に人を助ける方向に進むこと、他人のことを一緒に考えること、そして自分の家庭や身のまわりをまず安泰にし、希望を基本としてスタートできなければ本来の超能力は開発できないと説かれる。超能力開発の最も身近で大切な部分である。興味本位ではない。

質疑応答も熱心な質問が出され、制限時間がすぎるまで続く。核、音楽と哲学、フィーリングと意識について等々。

続いて夕食会へと移り、しばしの歓談。秋田支部の佐藤春雄氏が今回初めて来福されたので、氏に得意のノドで民謡を披露して頂く。氏は民謡のプロで大家。

翌日はマイクロスコープで佐賀県三瀬村のフランス式牧場「どんぐり村」へ二十名ほどで出かける。あいにくの曇天となったが家族的な雰囲気でのんびりと牧場内の名施設を散策し、秋の一日を楽しんだ。遠来の方々と久保田先生に心から感謝致します。

(福岡支部代表 喜多正宣)

素晴らしい大会だった。真剣な波動、高度な質問等、第一級の支部大会である。福岡支部が見事な成長をとげた証左であろう。デマや噂に惑わされず、



代表・副代表の強固な連携と世間を知る態度がこの成果の要因だったと思う。質実剛健な九州男児の面目を発揮した大会と称えたい。ここには実社会での常識と礼節が土台を成していた。大地に足を着けているこの大人の集団が今後も宇宙的に大成することを心から期待したい。

久保田八郎

〈予告〉昭和64年度地方支部大会〈その1〉

	第10回 山形 仙台合同支部大会
日時	5月4日(祝日。3連休の中日) 午後1:00→5:00
会場と交通	「天童市中央公民館」 3F第1実習室 ☎0236(54)1511 山形県天童市老野森1丁目1-1 ※天童駅から徒歩10分、タクシー約3分。
会費	¥2,000(希望者のみ全員記念写真代¥800を別納。カラーグラントキヤビネ判。送料共)
プログラム	司会 柴田文子 1:00 支部代表挨拶 柴田光明 笠原弘可 1:15 講演「UFO問題と宇宙のカルマ」日本GAP会長・久保田八郎先生 2:30 全員記念撮影・休憩 3:00 全員自己紹介・意見発表・質疑応答 5:00 閉会 ※支部会員一同大変張り切って、大自然に囲まれた清新な雰囲気の中で高次元な大会を開催致します。先生の秘話が出るようすし、質疑応答では本部役員の超能力者・遠藤昭則氏も先生と一緒に質問に答えられますから、多数ご来場下さい。
夕食会	大会終了後6:00から8:00ごろまで下記の場所で開催します。 会費¥5,000程度 会場「滝の湯ホテル」 1F「藤の間」 天童市山元1445 ☎0236(54)2211 ※中央公民館前の川を渡りまっすぐ歩くと温泉街に出ます。徒歩5〜10分。 ※2次会＝滝の湯ホテルから歩いて2〜3分の「水車気そば」で¥2,000程度の会費で開きます。
宿舎	「パーソナルホテル紀の川」(夕食会場のすぐ近く)を幹旋します。 天童市大字山元中5-7 ☎0236(53)4475 シングル ¥4,400(税サ込) 25室 ツイン ¥8,000(〃) 2室
申込	大会、夕食会、宿舎、観光の申込はハガキにいずれかを記して4月末日までに下記へお申し込み下さい(電話でも可)。 〒999-51山形県新庄市大字萩野82 柴田光明 ☎0233(25)3261
観光	大会翌日は希望者で山寺、または有名な鳴子峡の見学を予定しています。 参加費¥2,000程度(昼食代別)
備考	5月は支部大会のため山形支部月例会は中止。仙台支部は月例会を開催。

ジョージ・アダムスキー全集

久保田八郎訳 全8巻 B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

偉大な進化を遂げた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と、深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必読の名著です。

1 宇宙からの訪問者

三三八頁 二五〇〇円

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験談。一九五二年一月二十日にカリフォルニア州の砂漠で金星人と会った体験「空飛ぶ円盤は着陸した」を本書の第1部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会った実録を第2部とし、驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

2 UFO問題の真相

二六二頁 二五〇〇円

第1巻の補足的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係述べた箇所は重要である。第2部はアダムスキーの世界講演旅行記、各国のGAPグループの活動と反応、サイレンス・グループの妨害が克明に描写されている。

3 UFOとアダムスキー

三五〇頁 二五〇〇円

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第1部「死と空間を超えて」が任務。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けた傍大な情報と書簡類を収録して第2部とした。

4 宇宙哲学

一四八頁 一三〇〇円

人間のセンス・マインド(肉体の心)と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理論整然と説く。この哲学は人間の意識、物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三著作の中心となるもの。

5 テレパシー開発法

一九〇頁 一八〇〇円

人間に内在する宇宙的能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の四官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシクな印象を感じる方法を詳しく解説し、他人と無言の会話をを行う技術述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

6 生命の科学

二〇五頁 一八〇〇円

アダムスキーが世界を数年前に出した「Science and Life」と題する十二冊の講座を和訳して一冊にまとめたもの。アダムスキーの宇宙の哲学の総まとめ的な一大金庫で、真実のテレパシーと心霊的な世界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する画期的な書。

7 アダムスキー論説集

三七〇頁 二五〇〇円

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編集したもので、特に死去する直前の最後の講演が任務。第2部にはアダムスキー研究者として高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟的な面が描写されている。

8 質疑応答集

二六六頁 二〇〇〇円

アダムスキーは一九五八年に質疑応答集を自費出版で頒布した。五分冊から成る小冊子で、全部で百問の質問と回答が収録してある。内容は現在の混乱した世界のUFO研究界に的確な解答と示唆を与えるものとして驚くほど新鮮である。これで本全集はア氏の重要な文献すべてを網羅した。

発行所宛直接注文の場合に限り、左記のように定価送料をサービスいたします。

☆一冊注文
☆第一巻より第四巻まで一括注文(正価 八八〇〇円)
☆第五巻より第八巻まで一括注文(正価 一六九〇〇円)
☆第一巻より第八巻まで一括注文(正価 一六九〇〇円)

送料をサービスいたします。送料(振替または現金) 送料無料。書籍代のみご送金下さい。

特別セット価格 七三〇〇〇円(送料共)
全巻セット価格 一四七〇〇〇円(送料共)

■申込先▶ 文久書林 〒113 東京都文京区西方1-19-10 西方ハウス2F ☎(03)813-9561 振替/東京4-2521 日本GAPでは取り扱いません

英文版UFOcontactee No.5 B5・12頁・コート紙使用 ¥500(送料¥170・3冊まで¥240)

久保田会長が心血を注ぎ編集した英文版Uコンは世界各国のUFO研究団体間で絶賛を博しています。春川正一氏の宇宙的体験談(第3回)、アダムスキーの質疑応答集を掲載し、昭和63年度日本GAP総会を写真入りで報じた国際的文献。英語学習にも好適。注文は振替または切手で日本GAP宛にどうぞ。 No.1, 2, 4, は在庫若干。No.3なし。

編集後記

●本号はUFO問題と人間の宇宙的カルマとの関連特集としました。冒頭の記事はUFOと宇宙哲学の入門的要点を述べたものですが、進歩した思索家にも参考になるうと自負します。

●アリス・ポマロイ女史の質疑応答は一種の秘話ですが、これだけでもアダムスキーの偉大さがいま見る思いがします。

●「デザートセンターで円盤着陸痕跡発見」は、まさに驚異的大発見の報告です。この記事には説明不足の部分があるのでありますが、いづれまた書きます。

●「過去世透視法とその実例」はレギュラー執筆者の遠藤昭則氏が畢生の力を込めて解説した記事で、きわめて興味深い内容です。といつも単なる興味本位ではなく、人間の生命の連続と永遠性を考えさせる深遠な意義を含んでいます。

●「ご存じダニエル・ロスの連載記事は佳境にはいつまでも続きます。これによればNASA(米航空宇宙局)はUFOと異星人の存在を熟知しているようで、隠蔽工作云々も間違いないようです。

●次号にはデザートセンターにおけるアダムスキー・コンタクト地点の再度調査行詳細報告を掲載する予定です。

●UFO目撃報告 UFO写真、超能力開発体験、宇宙哲学研究、宇宙科学等の原稿を募集しています(心霊的なものはご遠慮下さい)。

●本誌は約百十名のボランティアにより全国の主要書店に卸されています。この協力チームに参加ご希望の方はハガキでお申し込み下さい。説明書をお送りします。

日本GAP機関誌・季刊 春季号
UFO contactee 104号

編集発行人 久保田八郎
発行所 〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1 511
振替 東京41309158

昭和六十四年一月二十五日発行
定価九〇〇円・送料二〇〇円
※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断転載を禁じます。

——昭和64年度——
日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日 時	会 場	会 費	携 行 品 ・ 行 事
東京本部	毎月第2土曜日 午後1:30→6:00	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。J R「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいすぐ。 連絡先＝日本GAP本部 ☎03-651-0958	会 場 費 ¥500 セミナー 受 講 料 ¥1000 計 ¥1500	1:30→2:10 会員による体験講演。 2:15→3:30 久保田会長による「宇宙哲学」「アダムスキー論説集」講義。 テレパシー練習、近況報告、自己紹介、質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。J Rまたは阪急電車「吹田駅」下車。 連絡先＝平塚和義 ☎06-436-3478	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	長岡市今朝白1丁目「けさじろ荘」 ☎0258-33-7400。長岡駅東口より徒歩5分。無料駐車場あり。 連絡先＝星 富治夫 ☎02579-2-5562	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
福岡支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	福岡市天神町5丁目1-23「福岡市民会館」3 F 国際会議室 連絡先＝喜多正宜 ☎092-863-5438	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1:00→4:30	名古屋市中区金山1丁目5番1号「名古屋市民会館」特別会議室。☎052-331-2141内。 J R東海・名鉄・地下鉄の金山橋より徒歩5分。 連絡先＝林 国宣 ☎0586-45-6468	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・テレパシー練習・座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1:10→4:20	仙台市1番町4丁目141(イチョイ)ビル内5Fエルパーク仙台セミナー室。 ☎022-268-8300。仙台駅よりバスで銀行市役所前下車、三越デパート隣。 連絡先＝笠原弘可 ☎022-295-0725	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00	山形市小白川町「社会福祉センター」 ☎0236-42-5181。山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。 連絡先＝柴田光明 ☎0233-25-3261	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。 ☎011-271-5821 連絡先＝高野省志 ☎011-822-8260	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
静岡支部	毎月第1日曜日 午前10:30→5:00 ※午前中は「生命の科学」の研究 会。テキスト持参。	静岡市黒金町「静岡労政会館」5階会議室。 ☎0542-21-6280。静岡駅北口より徒歩5分。 連絡先＝野口敏治 ☎0542-86-7729	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表。
旭川支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」2 F 小会議室。 ☎0166-26-1304。 連絡先＝川上三秀 ☎0166-61-0044	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・質疑応答・テレパシー練習。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00	群馬県太田市「社会教育総合センター」3 F。 連絡先＝久保寺信一 店：☎0276-25-5958 自宅：☎0276-45-3544	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。座談会。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室。 ☎0177-34-0163。 連絡先＝田村嘉彦 ☎0177-38-0416	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表等。
沖縄支部	毎月第4土曜日 午後6:00→10:00	那覇市客宿1-2-1「那覇市民会館」1 F A会議室。 ☎0988-55-5081。与儀公園の隣。 連絡先＝比嘉政広 ☎09893-2-2889	¥1000 (徴立金共)	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。質疑応答・想観観察とテレパシーの研究報告・自己紹介・座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。 ☎0188-24-5377。 連絡先＝伊藤正治 ☎0188-62-2831	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
神奈川支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※1月のみ第4日曜日に変更。 2月のみ1泊の移動月例会。 (詳細は右記へ)	横浜市中区万代町2-4-7「横浜市技能文化会館」7F、703号室。 ☎045-681-6551。J R関内駅、地下鉄・伊勢崎線有明駅より徒歩3分。 連絡先＝清水 正 ☎0488-66-7048	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・座談会等。
茨城支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	水戸市梅香1-2「三の丸公民館」小集會室。 ☎0292-24-6600。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一 ☎0292-73-1903	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長野支部	毎月第4日曜日 午後1:00→4:30	塩尻市大門7番町「塩尻総合文化センター」第1会議室。 ☎0263-54-1253。 連絡先＝博田文喜 ☎0263-58-8510	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
紀南会	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	和歌山県新宮市新宮6882-1「新宮市福祉センター」1 F 相談室。 ☎0735-21-2760。J R西日本新宮駅下車、徒歩5分。 連絡先＝松口幸之助 ☎0735-34-0605(呼・田中)	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」と「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
栃木支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	鹿沼市(市役所裏)「御殿山会館」1 F 小会議室。 ☎0289-64-4334。JR鹿沼駅から西へ1.5km。東武新鹿沼駅から北へ1.5km。市内行きのバスに乗り天神町下車、徒歩5分。 連絡先＝渡辺克明 ☎0289-62-3319	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長崎支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	長崎市魚の町5番1号「長崎市民会館」 ☎0958-25-1400。公会堂電停前。 連絡先＝元本和雄 ☎0958-22-5521	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
鹿嶋会	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	鹿児島市与次郎2丁目3-1「鹿児島市民文化ホール」 ☎0992-57-8111 連絡先＝鶴田清剛 ☎09932-5-4398	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
高松支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00	高松市玉藻町9番10号「香川県民ホール」5F第1会議室 ☎0878-23-3131。J R高松駅より徒歩7分。 連絡先＝関 高明 ☎0878-88-1334	¥400	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。

① **あなたも超能力者になれる!**
テレバシーESPカード
 能力開発用

テレバシー、透視力開発用のESPカードはアメリカのデューク大学で科学的に開発されたゼナーカードが主体になっています。色カードは目を閉じたまま各カードの上に手をかざして色の発する波動を感知しながら色を言いあてる練習に使用するものです。堅牢なプラスチック製。



50枚1セットケース入り 使用説明書付き
 ¥4,800 送料¥350(2〜5個¥700)

②



①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが創的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウエリスのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判・カラー写真) [上半身写真もあり。定価¥600]
 ②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は「すべてを見透す眼」で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインドの発達状態をあらわしている。(サービ判・カラー写真)
 上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。

①¥600 送料¥120
 ②¥300 送料¥60 } 一括注文の場合送料¥120

③ 大いなる信念と勇気を与えるGAP能力開発テープ

毎月行なわれている日本GAP東京本部月例研究会のなかから、日本GAP会長・久保田八郎先生が宇宙的フィーリングをもってアダムスキーの名著を解説した講義などが収められたテープ。ドライブ中や、通勤・通学電車内で、あるいは就寝前に聞いたりすれば絶大な信念と勇気がわき起こります。5月分より在庫。 □□ドルビー録音・ドルビー編集。

■日本GAP東京本部月例研究会録音テープ①

内容＝「宇宙哲学」・「アダムスキー論説集」解説講義／近況報告／質疑応答(一部)

テープ1本(120分) ¥1300 送料¥200

※このテープは日本GAPでは取り扱いせん

◆申込先◆ 〒133 東京都江戸川区本一色1-24-3-202 松村 芳之 ☎03-653-9387 振替・東京0-162644

■日本GAP東京本部月例研究会録音テープ②

内容＝「宇宙哲学」・「アダムスキー論説集」解説講義／テレバシー実践講義／テレバシー練習(テキスト付)／近況報告／質疑応答(全部)

テープ2本(90分×2本) ¥1900 送料¥240

会員募集

日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団／多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう／入会案内書を1ハキで日本GAPへ申し込もう！

——日本GAP——

GAPテレホンカード

第1回のテレホンカードは好評裡に品切れになりました。第2回目は金星の田畑を黄金色であしらった優美でシンプルなデザインです。少部数につき早目にご注文を。



©WTR ホワイトテレホンカード

1枚¥1500 送料10枚まで¥60

会員バッジ



実物大

ジョージ・アダムスキーが金星人から与えられた唯一のバッジと形、色共全く同様に複製した径18mmの丸い優美なバッジです。薄青色地に金色のシンボルマークが浮彫りされており、縁も金色です。表面には透明樹脂がかけてありますからキズがつかず、光を反射してキラキラ輝きます。男性用は裏側が心棒ネジどめ式、女性用は裏側が安全ピン式です。ぜひお求め下さい。ご注文のさいは男性用・女性用の別を明記して下さい。

(無断複製を禁じます)

1個¥2000 送料4個まで¥120

④

——幸せを呼ぶ——

GAPシール

シールを製作しました。WITH COSMIC CONSCIOUSNESS(宇宙の意識と共に)の文字がシンボルマークを取り囲む優雅なデザイン。径6cm、5cm、4cm、3cm、2cmの5枚1セット。青と赤の2種類あります。自動車の窓、運転台、カバン、書籍・ノートの表紙、その他の持ち物に貼っておけばいつも宇宙的フィーリングに満ちて気分さわやか。良き想念が良き物事を招きよめます。表面光沢。防水加工。裏面のり付。ご注文の際は青、赤の区別をお忘れなく。

1セット¥900 送料5セットまで¥60

◎を除く商品の
 申込先・申込方法

住所・氏名・電話番号・商品名・種類・色・個数等を明記の上右記へ郵便振替または現金書留でお申し込み下さい。

〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511 日本GAP
 振替・東京4-35912 ☎03-651-0958

●「セドナ・リサーチ・プロジェクト」参加者募集中●

この不思議なエネルギーで

あなたには何が起ころるか？



▲アリゾナ州セドナのエネルギースポットのある岩山



▲セドナの町の遠景

また、次のような神秘的体験を報告した人

- 「氣力」が非常に満ちあふれてくる
- 自分自身に対する自信のよくなるものが出てくる
- 意識が高まり気分が高揚してくる
- 他人へのやさしさ、人類愛のような次元の高い「愛」の感情が自然に出てくる
- 深い瞑想状態に非常に入りやすくなる
- 呼吸が自然に深くなる
- 体がホカホカ暖かく心地よくなる
- 夜よく眠れるようになる
- ケガや病気の回復が早くなる
- 歯痛や頭痛がかわらなくなる
- 肩コリがなくなる
- 疲れにくくなる
- 長年の持病が直ってしまった
- 集中力が増す
- 創造的意欲・芸術的感性が磨かれる
- 直観力が非常に強くなる
- 男女の別、年齢層等によってバラつきはあるが、以上のような心理的・肉体的変化を報告した人が90%を超えた。

セドナエネルギー・ストーンにふれた150名のアメリカ人の体験データの二部



セドナ・エネルギー・ストーンの小片とエネルギーを調整する金箔がカプセル内に入っています。ヘッド部分はセドナを聖山と仰ぐ有名なホビ・インディアン（銀製）専用チェーン・専用ケース付

まもなく申込を締切らせていただきますのでお申込みはお早目に！

今、アメリカのアリゾナ州の観光地グランド・キャニオンに近い、セドナという小さな町が不思議なエネルギー・スポットとして熱い注目を浴びています。4次元の不思議なエネルギーを放出しているそのセドナのエネルギー・スポットの地下深くから、超能力者の協力によって掘り出された「エネルギー・ストーン」。

これを部屋に置いたり、身につけたアメリカの人々が種々の心理的変化や超常現象を体験しています。

セドナの不思議なエネルギーを研究しているアメリカのR・Aと協力して、日本ニューエイジセンターでは、ペンダント化したセドナのエネルギー・ストーンを多くの人に身につけてもらい、その体験報告を統計的に分析して、この不思議なエネルギーの性質を探る「セドナ・リサーチ・プロジェクト」を企画し、参加者を募集しています。「参加のご案内」をご覧の上、積極的にこのエキサイティングなプロジェクトに参加下さい。

も多かった。

- 顔や手足から金粉が吹き出した
- 幽体離脱を初めて体験した
- 正夢や予知夢をたびたび見るようになった
- 自分の前世と思われる記憶・ビジョンが潜在意識の奥深くから湧き上がってきた

- オーラが見えるようになった
- ヒーリング（病氣治療）能力が身についた
- サイキックな体験をしはばするようになった
- 目に見えない「実体」からインスピレーションやアドバイスを受けるようになった

超能力者の透視による情報

何名かの超能力者の透視によると

- 通常の電磁気とは次元の違う「電磁気のエネルギー」が渦巻き状に出ている
- 石の表面に幾何学的な模様（マンダラ）に並んで見える
- 金色やエメラルドグリーンの美しいオーラが多数に出ている
- この石のエネルギーは、人間の意識を目覚めさせたり、マインドパワーや肉体的活力を高めたたりする非常にレベルの高いバイブレーションを持っている

「セドナ・リサーチ・プロジェクト」参加のご案内

『電気のエネルギー（男性的エネルギー）の強いアメリカとは対称的な磁気的エネルギー（女性的エネルギー）が非常に強い日本列島の土地に長く住む日本人には、この不思議なエネルギーがどのように作用するかを調査するため「セドナ・リサーチ・プロジェクト」が企画されました。現在、日本全国から参加者を募集しています。応募資格は16才以上の男女で、一定期間（ペンダント）を適用し心理的・肉体的変化を体験報告として提出していただく。感受性豊かな方であれば、ただでも応募できます。

参加者にはペンダント代金、5000円の支払い（ペンダント到着後7日以内に同封の払込用紙にて送金）と体験報告提出が義務づけられ、又「セドナ・エネルギー・ストーン情報」と今回のプロジェクトの結果報告を無料で受け取れる特典があります。（ペンダント到着後7日以内にペンダントを返却すれば参加はキャンセルできます。）

（申込み方法）

住所・氏名・年齢（生年月日）・電話番号

【注意】

◆セドナ地区は環境保護地域のため、今回お届けするエネルギー・ストーンは特別採掘許可を受けて掘り出された極少量の限られたものです。日本に送られてきた分がなくなり次第、申込を締め切らせていただきます。（申込多数の場合は先着順となります。）（今後セドナのエネルギー・ストーンが大量に市販されることは物理的に有り得ません。）

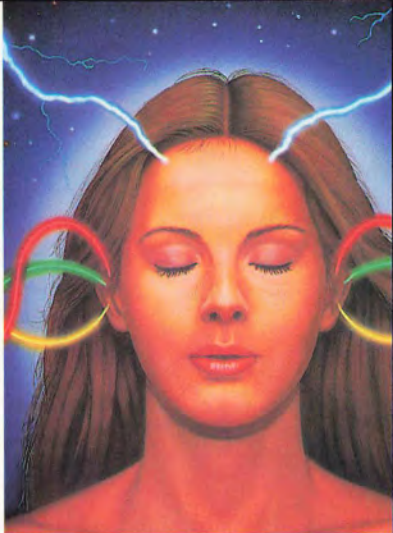
〒107 東京都港区赤坂9-6-27
日本ニューエイジセンターJNOO 係
電話 東京 03(479)6576
受付時間 AM 10 ~ PM 20

サブリミナルテープ
潜在脳刺激法であなたの人生が変わる!

今なら各シリーズを無料試聴できます。

マインドパワー・潜在能力を開発

「マインドパワーの開発」「充実した人生」これらを簡単に現実のものにしてくれる驚くべきテープがアメリカからやってきました。アメリカの著名な心理学者S・ハルパーン博士の開発した「サブリミナル・プログラム」がそれ。なにせ美しいBGM音楽を聴き流しているだけで確実な効果があるというのですからこれを利用しない手はありません。



あのハルパーン博士が あなたのために制作

「マインドパワーの開発」「充実した人生」……これはどんな人でも多かれ少なかれ持っている共通の願望でしょう。ところがこの夢をいとも簡単に実現してしまうテープがアメリカからやってきたのです。それがアメリカでは知らない人はいないほど有名な心理学者博士「サブリミナル・ハルパーン」氏の開発した「サブリミナル・テープ」です。博士の手になるサブリミナルテープは、米国で昨年一年間だけで五十数万本という驚異的なペースでテープを聴く、その確かな効果が実証されています。

BGMとして聴く だけで効果が!!

このサブリミナルテープ、耳に聴こえるのは、うっとりするような美しいメロディーの心がゆつりと流れていく静かな音楽だけです。

(日本の曲でいえば、喜多郎の音楽にイメージが似ている。この音楽だけでなく、ストレスを解消し、気分をさわやかにするすぐれた効果がある)しかし、実はこの音楽に、ハルパーン博士が開発した他に真似できない高度な音響テクノロジーを駆使してある心理学的な音楽のメッセージが入っているのだ。音響空間に独特の刺激を与える音楽の波が、耳に聴こえないメッセージの波長を潜在脳へ運び、植え付けていく。この音楽に交って入っている「耳に聴こえない心理学的メッセージ」が、ただテープの音を聴いているだけで、潜在能力が開発される。充実した人生、歩み始める。という現象を引き起こす秘密なのです。『本を読んだり趣味に熱中している時に、BGM音楽として聴き流しているだけで、夢がかなってしまふ』『このアメリカの苦勞の多い生活の日常が、ついに日本の生活にもご利用いただけるようになったのです。』

商品お申込みの方々に試聴用テープを無料進呈!

1 マインドパワー・潜在能力を開発 マインドパワーシリーズ(MDシリーズ)

あなたの心と体をゆつたりともみほぐし、不安感や心と体の疲れを取り除いてくれる宇宙的感覚のα波BGM音楽に、あなたの意識を拡大し、精神力「マインドパワー」や秘められた潜在能力を自然に開発する「サブリミナル・メッセージ」を同調させたのが、このMDシリーズです。会社から帰ってその日の疲れを癒したい時、日常生活のわずらわしさから解放された時、静かなBGM音楽を流して気分転換をしたい時……



MDシリーズのお届けするテーマの内容は、●完全なる安らぎ●意識の拡大●大いなる自分との出会い●無限大の心●宇宙意識の目覚め●人間性・人格の向上●愛と慈悲のエネルギー●精神力の強化●偉大な潜在能力の開発●第六感の開発●自由自在な思考力●無限の知識の獲得……このシリーズのサブリミナルテープのベース音楽には、ハルパーン博士の友人である「ヤンソ」の宇宙音楽をはじめ素晴らしい瞑想音楽が使われています。

●ステイヴン・ハルパーン博士のプロフィール●

音楽・音響の潜在意識の作用の研究で世界的にその名を知られる心理学者博士。学者であると同時に、瞑想音楽の神様としても米国はもとよりヨーロッパ各国にその名を知られ、世界的なファンを数多く持つ。博士の音楽は鑑賞用の音楽として高く評価されているが、博士の長年の研究のメッセージが凝縮した「音楽の薬」としての効能も医学・心理・教育関係者の中で高い評価を受けている。いろいろな分野で博士の音楽を取り入れている。カイザー・バーマン病院では、博士の音楽を薬品の代わりとして患者に与え、著しい効果を得ている。

2 現状を打破し充実した人生を 充実人生シリーズ(HLシリーズ)

「今のままではいけない!」「もっと充実した人生を送るために何かをしなくては……」そんな中で感じているんだけれど、現状を打破する第一歩を踏み出すキッカケをつかめずに毎日を情性に引きずられて何となく「過」でしてしまっているという方にお勧めするのがHLシリーズです。現状から抜け出し新しい人生に向けて第一歩を踏み出す動機づけ、毎日がワクワクするような胸のときめきを感じる充実した人生を送るために……



HLシリーズのお届けするテーマの内容は、●現状を打破する●目標計画づくりの習慣●情性に囚われない●最高の人生を考える●自分の可能性を試す●すぐ実行する習慣●必要な読書・勉強の実行●毎日ベストを尽くす●プロフェッショナルをめざす●向上意欲の強化●充実した人生を生きる●大いなる未来へはばたく……このシリーズには「フィノシ」プログラムもA面B面を通してオーディオテープでお使いいただけます。※このHLシリーズには、充実人生計画シート、充実人生コンセプトシートが付いています。

今なら無料試聴でき特別価格で購入できます

●MDシリーズ●HLシリーズは一年間の会員の頒布会費で、お届けします。お申込み後、毎月各テーマ別のテープを二巻ずつ送ります。お支払いは毎月テープ到着後、4,800円(送料300円)。第一回目およびそれ以降もテープ到着後5日間の無料試験期間を設けていますので、気に入らない場合は自由に返却できます。又、途中退会も自由です。●今回ご紹介したシリーズ以外にも、「高度学習セット」「魅力的性格シリーズ」等のシリーズがございます。詳しい案内書をご希望の方は、お電話あるいはおハガキで案内書をお送りください。お申込み下さい。

住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記の上、●MDシリーズ試聴希望●又は●案内書希望●と在記でお申込み下さい。

〒100 東京都港区南青山1-26-4
アメリカ・インテリジェント・UFCO1係
TEL: 東京 03(479)5864
(受付 AM 8:30 ~ PM 24 日・祭日も受付中)